らず。已に灌頂せる其の性調柔にして、精勤堅固にして、殊勝の願を發して、師長を恭敬し、恩德を念ずる者の、內外淸淨にして、自の身命を捨て、而も法を求むる者を除く。

(一)持明禁戒品第十五

爾の時金剛手、復偈頌を以て、大日世尊に持明禁戒(ヂミヤウキンカイ)を請問したてまつる。眞言門に菩薩の行を修する、諸の菩薩の爲の故なり。

云何んが禁戒を成ずる　云何んが(二)尸羅に住する　云何んが所住に隨つて
修行して諸の著を離るる
修行に幾の時月にして　禁戒終竟することを得る　何の法敎に住して　而も
彼の威德を知る
時と方と作業と　及び法と非法と等を離る　云何んが而も速に成ずる　願く
は佛其の量を說き玉へ
先佛の宣說し玉ふ所なり　悉地を得しめ玉へ　我れ一切智の　正覺兩足の尊
に問ひたてまつる

(一)持明禁戒品　持明者所乘の持明禁戒を明す、明は眞言なり、眞言を持するに由りて起る所の制戒なり、持明即ち禁戒なり。

(二)尸羅　本性戒なり。

未來の衆生の爲なり　人中の尊　證知し玉へり
是の時に薄伽梵毗盧遮那、衆生を哀愍し玉ふが故に、而も偈を說いて言はく、
善哉勤勇士　大德持金剛　說く所の殊勝の戒　(一)古佛の開演し玉ふ所なり
(二)明に緣つて起す所の戒は　戒に住すること正覺の如くにして　悉地を成ずる
ことを得しむ　世間を利せんが爲の故なり
等しく自の眞實を起して　疑慮の心を生ぜず　常に等引に住して　戒を修行
すること當さに竟はるべし
(三)菩提心と及び法と　及び修學の業と果と　和合して一相と爲す　諸の造作
を遠離せよ
(四)具戒は佛智の如し　此に異るは具戒に非ず　諸法に自在なることを得て
通達して衆生を利す
常に無著の行を修すれば　礫石と衆寶とを等しうす　(五)乃至落叉を滿すに至つ
て　說く所の眞言敎
時月等を畢へて　禁戒の量終竟す　(六)最初には金輪の觀なり　大因陀羅に住

(一)古佛　自然法爾の義なり。
(二)明に緣つて云云　此の持明の戒に住するを以ての故に、即ち正覺に同じ、正覺は佛の別名なり、如來所行の道を行ずるを以ての故に、即ち佛に同じ。
(三)菩提心云云　菩提心の上の一切の功德を法と云へ業は如來三密の妙業なり。
(四)具戒云云　佛智は平等なり。
(五)乃至　持戒の量を明す、即六月の成就の法を說くなり。落叉とは淺略には十萬遍なるも今は落叉とは見なり。即ち自心の實相を見るなり。
(六)最初には云云　心と佛と衆生と三平等の觀を明す。

(一)金剛の印外五股地大の印也。(二)乳を飲む云云、實の乳にはあらず、出入の息をいふ。(三)水輪云云白色圓形の座に坐し(四)醇淨の水入の印に住す。息白乳の氣を食とす、白身を字となして之を觀ず。(五)次に第三月云云自身を字の△形となりて出入の息赤色なるを以て食とす。(六)火輪三角の壇白色なり。(七)第四月詞字半月の壇黑色なり。(八)風を服出入の息。(九)金剛水輪外に黃色の方形の中に白色の圓形の檀を作り、(一〇)風火輪檀を作る。第六月の觀は風輪の中に茶羅の明を作り、火輪あり。

して

當に(一)金剛の印を結び　(二)乳を飲んで以て身を資くべし　行者一月滿して

能く出入の息を調ふ

次に第二の月に於ては　(三)水輪の中に嚴整して　應さに蓮華印を以て　(四)醇淨の水を服すべし

次に(五)第三の月に於ては　勝妙の(六)火輪の觀なり　不求の食を噉へよ　印は

大慧刀を以てす

一切の罪を燒き滅して　而も身と意と語とを生ず　(七)第四の月には風輪なり

行者常に(八)風を服して

轉法輪の印を結んで　心を攝して以て持誦すべし　(九)金剛水輪の觀は　瑜伽

に依住す

是を第五の月と爲す　得と非得とを遠離して　行者著する所なくして　三菩

提に等同なり

(一〇)風火輪を和合して　衆の過患を出過す　復一月持誦して　亦利と非利と

を捨てよ

(一)梵釋等の天衆と　摩睺(マゴ)と毗舍遮(ビシャシャ)と　遠く住して而も敬禮し　一切守護を爲し

皆な悉く敎命を奉く　彼れ常に是の如くなることを得て　人天の藥草神と

持明の諸の靈仙と

其の左右に翔侍して　命ずる所に隨て當さに作すべし　不善爲障者の　羅刹(ラセツ)

七母(シチモトウ)等

持眞言者を見て　恭敬して而も之れを遠ざかり　是の處の光明を見て　馳散

すること猛火の如し

所住の法敎に隨て　皆明禁に依るが故に　等正覺の眞子　一切に自在を得て

難降の者を調伏すること　大執金剛の如し　諸の群生を饒益すること　觀世

音に同じ

六月を經逾し已つて　所願に隨て果を成じ　常に當に自他に於て　悲愍して

而も救護すべし

(一)梵譯云云已下は六月持誦の功德を說く。

(二)阿闍梨云云上品に廣く阿闍梨、並に弟子相、及び方便作檀引入弟子等の相を說くと雖も、猶ほ未だ阿闍梨眞實の相を說かず、故に此の品來るなり、故に阿闍梨眞實智の所在を擇ぶ也。

(一)云何んが云云 阿闍梨の持する眞言を云ふ。

(二)支分 一身の支分に諸字を加ふるをいふ。

(三)相應 師自ら布し了て次に行者に授けて布字せしむ。

爾の時に持金剛者、次に復大日世尊に、諸の曼荼羅の眞言の心を請問したてまつりて、而も偈を說いて言さく、

(一)云何んが一切の　眞言實語の心と爲す　云何んが而も解了するを　說いて
阿闍梨と名くる

爾の時に薄伽梵　大毗盧遮那　金剛手を慰喩し玉ふ　善哉摩訶薩
彼の心をして歡喜せしめ　復是の如きの言を告げ玉ふ　秘中の最秘　眞言智
の大心を解る

今汝が爲に宣說せん　一心に應さに諦に聽くべし　所謂る阿字とは　一切の
眞言の心なり

此れより遍く　無量の諸の眞言を流出し　一切の戲論息んで　能く巧智慧を
生ず

秘密主何等か　一切の眞語心なる　佛兩足尊　阿字を說いて種子と名く
故に一切是の如し　諸の(二)支分に安住し　(三)相應の如く布し已つて　法に依
て皆な遍く授けよ

(一)本初 丑字の丑梵の二字を本初といふ。

(二)心を以て云云 上の心は阿字下の心は行者の自心なり。

(三)餘は云云 十二の摩多字を餘と云ふ。

(四)即ち我體は大日如來に同じき故に阿闍梨と成ることを得。

(五)聲智 阿字一轉して生ずる智なり。

彼の(一)本初の字　增加の字に遍在するに由て　衆字以て音を成じ　支體是れ
に由つて生ず

故に此れ一切の身に遍じて　種種の德を生ず　今分布する所を說かん　佛子
一心に聽け

(二)心を以ては而も心に作せ　(三)餘は以て支分に布せ　一切是の如く作せば
(四)即我が體に同じ

瑜伽の座に安住して　尋で諸の如來を念ずべし　若し此の敎法に於て　斯の
廣大智を解るは

正覺大功德なり　說いて阿闍梨と爲す　是れ即ち如來と爲し　亦即ち名て佛
と爲す

菩薩と及び梵天と　毗紐と摩醯羅と　日月天と水天と　帝釋と世間主と
黑夜と焰摩等と　地神と妙音と　梵志と及び常浴となり　亦梵行者とも名く
漏盡の比丘衆と　吉祥と持秘密と　一切智見者と　法自在と財富となり
若は菩提心と　及與び(五)聲智の性とに住して　一切の法に著せざるを　說い

て遍一切と名く　　(一)持吉祥眞言と　眞實語の王と　持執金剛印となり

即ち是れ眞語者と　　若は支分に在らんには　當に知るべし(二)眉間に　斛字命

所有る諸の字輪は　　是れを蓮華句と謂ふ　我即ち(三)心位に同じ　一切處

剛の句を住せしめ　　(四)阿字は第一の命なり　嚩字を名て

娑字をば臍の下に在け　　斛字を忿怒と名く　佉字は虛空に同じ　所謂る極空の

に自在にして　　佉字は脣の上に在り　哦字を以て頸と爲す　伽字は喉

普く種種の　有情と及び非情とに遍ず　　(五)最眞實　五字

水と爲し　　(六)不死の句　　(七)布字品　此の

囉字を名て火と爲し　　(八)最眞實を知るを　　(九)佛の所說を了知すべし　　(十)說いて阿闍梨と名くべし　故に應さに方便を具して

點なり　　常に精勤に修することを作さば　當さに(十一)不死の句を得べし

(一)持吉祥眞言と　眞實語の王と　持執金剛印となり

(二)眉間　一切執金所持の處なり。

(三)心位　阿字菩提心の位なり。

(四)阿字云云　阿字を以て情非情に遍ずる故なり、經中六大の文なし、今の文を六大の證となす。

(五)最眞實　五字戲身等之を思へ。

(六)不死の句　阿字を以て一身の支分に布するをいふ。

(七)布字品　此の品には三部心數の諸字を一切の支分に布することを說く。

(八)最眞實を知るを　佛の所說を了知すべし

(十一)不死の句を得べし

(十)布字品第十七

爾の時に世尊、復金剛手に告げて言はく、

復次に秘密主　諸佛の宣說し玉ふ所の　諸の字門を安布すること　佛子一心

に聽くべし

迦字は咽の下に在り　佉字は脣の上に在り　哦字を以て頸と爲す　伽字は喉

の中に在り

遮字を舌根と爲し　車字は舌中に在り　若字を舌端と爲し　闍字は舌の生處

なり

吒字を以て脛と爲し　吒字は知るべし髀なり　拏字を說いて腰と爲し　荼字

は以て坐に安ず

多字は最後分なり　他字は知るべし腹なり　娜字は二手と爲し　馱字を名て

脇と爲す

波字を以て背と爲す　頗字は知るべし胸なり　婆字を二肘と爲す　婆字は次

に臂の下なり

莽字は心に住す　耶字は陰藏相なり　囉字を名て眼と爲す　邏字を廣き額と

爲す

縊・伊は二の眥に在り　　塢・烏は二の脣と爲し　　翳・藹を二耳と爲す　　汗・奥を二の頰と爲す

暗字は菩提句なり　　噁字は般涅槃なり　　是の一切の法を知る　　行者正覺を成すべし

一切智の資財　　常に其の心に在り　　世に一切智と號す　　是れを薩婆若と謂ふ

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷第五 終

(一)受方便云云方便とは即ち學處なり、學處とは戒なり、即ち世間の十善戒を以て眞に眞言行者の秘密學處となす、此の戒を受けて後に入壇灌頂の行を聞く可きなり。

(二)生命云云一念の殺心なきを云ふ不殺生戒なり。

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷六

(一)受方便學處品第十八

爾の時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊願くは諸の菩薩摩訶薩等の、智慧方便を具して、修學する所の句を說いて歸依の者をして、諸の菩薩摩訶薩に於て、二意あること無く、疑惑の心を離れて、生死流轉の中に於て、常に不可壞ならしめ玉へと、是の如く說き已て、毗盧遮那世尊、如來眼を以て一切法界を觀じて、執金剛秘密主に告げて言はく、諦に聽くべし金剛手、今善巧修行の道を說かん。若し菩薩摩訶薩、此に住する者は、當さに大乘に於て而も通達することを得べし。秘密主、菩薩は(二)生命を奪はざる戒を持て爲す應らざる所なり。不與取と及び欲邪行と虛誑語と麁惡語と兩舌語と無義語との戒を持し、貪欲と瞋恚と邪見と等皆作すべからず。秘密主、是の如く修學する所の句は、菩薩修學する所に隨つて、即ち正覺世尊及び諸の菩薩と同行なり、應さに是の如く學すべし。

爾の時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊薄伽梵、聲聞乘に於て、亦是の如き

の十善業道を說き玉ふ。世間の人民及び諸の外道も、亦十善業道に於て常に願つて修行す。世尊、彼と何の差別かある、云何んが種種に殊異なる。是の如く說き已つて、佛執金剛秘密主に告げて言はく、善哉、善哉、秘密主、汝復善哉、能く如來に是の如きの義を問ひたてまつる。秘密主、應當に諦に聽くべし。吾れ今(一)差別の道と、一道の法門とを演說せん。秘密主、若し(二)聲聞乘の學處は、我れ慧の方便を離れて、教令を以て成就し、邊智を開發す。等しく十善業道を行ずるに非ずと說く。彼の諸の世間は、復我に執著するが故に、他因に轉せらるるを離る。菩薩は大乘を修業して、一切法平等に入つて、智慧方便を攝受して、自他俱なるが故に、諸の所作轉ず。是の故に秘密主、菩薩は此に於て、智の方便を攝し、一切法平等に入つて、當に勤て修學すべし。爾の時に世尊、復大慈悲の眼を以て、諸の衆生界を觀察して、金剛手菩薩に告げて言はく、秘密主、彼の諸の菩薩は、形壽盡(ギヤウジユ)さで、不奪生命戒を持して、應さに(三)刀杖を捨て、殺害の意を離れ、他の壽命を護ること、猶し己身の如くなるべし。餘の方便あつて、諸の衆生類の中に於て、其の事業に隨つて、彼の惡業の報を解脫せしめんが爲の故に、施作する所あるは、怨害の心に非ず。

(一) 今差別云云　一切法は阿字門なり、即ち一道の出でず、此の一道の中に上中下の所觀に隨て差別あり。

(二) 聲聞乘　氏の中に緣覺乘を含む。

(三) 刀杖　此に限らず故に是れ輕なる見て殺害の意重きを見るべし。

復次に秘密主、菩薩は不與取戒を持して、若し他の所攝の諸の受用の物には、觸取の心を起さず、況んや復餘物の與へざるを而も取らむをや。餘の方便あり、諸の衆生の慳悋(ケンリンシヤクジヨウ)積聚して、施福を修せざるを見ては、其像類に隨つて、彼の慳を害するが故に、自他を離れしめ、彼が爲に施を行ず。因て讃ずる時に施せば、妙色等を獲と云ふべし。秘密主、若し菩薩、貪心を發起して、而も觸れて之を取れば、是の菩薩は菩提分を退して(一)無爲の毗奈耶(ビナヤ)の法を越ゆ。

復次に秘密主、菩薩は不邪婬戒を持て、若は他の攝する所と、自らの妻と、自種族と、標相の護る所とに、貪心を發さざれ。況んや復非道に二身を交會せんをや。餘の方便あらば(二)度すべき所に隨つて衆生を攝護せよ。

復次に秘密主、菩薩は形壽を盡すまで不妄語戒を持て、設ひ活命の因緣の爲にも、妄語すべからず。即ち諸佛の菩提を欺むき誑らかすなかれ。秘密主、是れを菩薩の最上の大乘に住すと名く。若し妄語する者は、佛菩提の法を越失す。是の故に秘密主、此の法門を應に是の如く知て、不眞實語を捨離すべし。

復次に秘密主、菩薩不麁惡罵戒を受持して、當に柔軟の心語と、隨類の言辭とを以て、

(一) 無爲の毗奈耶　本性戒なり、遮戒は佛出世して機に應じて說き、性戒は之に依らず、故に無爲といふ。

(二) 度すべき云云　瑜伽に七非を開すといふ是れなり。

諸の衆生等攝受すべし。何を以ての故に。秘密主、菩提薩埵の初行は、衆生を利樂す。或は餘の菩薩惡趣の因に住する者を見ては、之れを折伏せんが爲に、而も麁語を現ず。復次に秘密主、菩薩不兩舌語戒を受持して、間隙語を離れ、惱害語を離るべし。犯せば菩薩と名くるに非ず。衆生に於て離拆の心を起さざれ。異の方便有て、若し彼の衆生所見の處に隨つて、著を生ぜば、其の像類の如く、離間の言語を說いて、一道に住せしめよ、所謂る一切智智の道なり。

復次に秘密主、菩薩は不綺語戒を持て、(一)隨類の言辭を以て、時と方と和合して、義利を出生し、一切衆生をして歡喜の心を發して、耳根の道を淨めしむべし。何を以ての故に、菩薩は差別の語あるが故に。或は餘の菩薩戲笑を以て先と爲して、衆生の欲樂を發起して佛法に住せしむ。具さに無義利の語を出すと雖、是の如きの菩薩は、生死の流轉に著せず。

復次に秘密主、菩薩は當に貪戒を持つべし。彼の他の物を受用する中に於て、染思を起さざれ、何を以ての故に、菩薩は著心を生ずることあること無きが故に。若し菩薩心に染思あれば、彼れ(二)一切智門に於て力無くして、而も一邊に墮す。又秘密主、菩

(一) 隨類云云時とは時ならざる語なり、方とは例なし作す、方とは酒屋に於て酒を作せば酒の邊なる時は彼の邊に說く時は酒に著するは故に之れを背はず、故に無義利の語となす。

(二) 一切智門菩薩若し染欲の心あれば六度萬行に力無きが故に。

薩は應さに歡喜を發起して是の如きの心を生ずべし。我が作すべき所を彼をして自然に而も生せしむ。極めて善哉と爲す、數自ら慶慰す。彼の諸の衆生をして、資財を損失せしむることなきが故に。

復次に秘密主、菩薩は應當に瞋戒を持つて、一切の處に遍く常に安忍を修すべし。瞋と喜とに著せず怨及び親に於て、其心平等にして而も轉ずべし。何を以ての故に、菩提薩埵は而も惡意を懷くに非ず。所以は何となれば、菩薩は本性清淨なるを以ての故に。是の故に秘密主、菩薩は不瞋恚戒を持つべし。

復次に秘密主、菩薩は應當に邪見を捨離して正見を行じ、(一)他世を怖畏して害無く、曲なく諂なく其の心端直にして、佛と法と僧とに於て心に決定を得べし。是の故に秘密主、邪見は最も(二)極大の過失たり、能く菩薩の一切善根を斷ず。是れ一切の諸の不善法の母たり。是の故に秘密主、下、戲笑に至るまで、亦當に邪見の因緣を起さざるべし。

爾の時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊、願くは十善道戒の極根を斷ずる斷を說き玉へ。云何んが菩薩王位自在にして宮殿に處し、父母妻子眷屬圍繞し、天の妙

(一) 他世未來なり。

(二) 極大云云邪見を發して因果を撥無すれば一切皆破る。

樂を受けて而も過を生せざるやと。是の如く說き已つて、佛、執金剛に告げて言はく、善哉、善哉、秘密主、汝當に諦に聽き、善く之を思念すべし。吾れ今菩薩の毗尼の決定の善巧を演說せん。秘密主、應に知るべし、菩薩に二種あり、云何んが二と爲す。所謂る在家と出家となり。秘密主、彼の在家の菩薩は、五戒の句を受持す、勢位自在にして、種種の方便道を以て、時方に隨順し自在に攝受して、一切智を求む。所謂る方便を具足して、舞伎天祠主等の種種の藝處を示現し、彼彼の方便に隨つて、四攝の法を以て衆生を攝取して、皆阿耨多羅三藐三菩提を志求せしむ。謂く不奪生命戒と、及び不與取、虛妄語と、欲邪行と、邪見等とを持つを、是れを在家の五戒の句と名く。菩薩は說く所の如き善戒を受持して、應さに具に諦信し、當に勤て修學すべし。往昔の諸の如來の學處に隨順し、(一)有爲の戒に住し、智慧の方便を具足して、如來の無上吉祥の無爲戒蘊に至ることを得べし。(二)四種の根本罪あり、乃至活命の因緣にも亦犯すべからず。云何んが四とする、謂く諸法を誘ずると、菩提心を捨離すると、慳悋すると、衆生を惱害するとなり。所以は何となれば、此の性は是れ染なり、菩薩戒を持つに非ず。何を以ての故に。

(一)有爲の戒無爲戒は即是れ本性戒なり、此れに對して所行の方便あるを有爲と云ふ。故に有爲と云ふ然れども深く觀ずれば、即無爲戒に同じ、阿字門を離れざるを以ての故に。

(二)四種云云秘密の四重禁戒なり下の句にあり。

過去の諸正覺と　及與び未來世　現在の人中尊と　智と方便とを具足して
無上覺を修行して　無漏の悉地を得玉へり　(一)亦餘の學處の　方便智を離れ
たるを說くは
當に知るべし大勤勇　諸の聲聞を誘進するなりと

(一)亦餘云云具足戒及び四重等の聲聞の律儀なり。

(二)說百字生品第十九

爾の時に毗盧遮那世尊、諸の大會の衆を觀察して、(三)不空の敎の、樂欲に隨て一切を成就する、(四)眞言の自在と、眞言の王と、眞言の導師との、大威德者を說き玉ふ。(五)三昧耶に安住して、(六)三法圓滿するが故に、妙なる音聲を以て、大力の金剛手に告げて言はく、勤勇士、一心に諦に諸の眞言と眞言の導師とを聽けと。即時に智生三昧に住して、而も種種の巧智を出生する、百光遍照の眞言を說て曰く、

南麽三曼多勃馱喃、暗　　眞言救世者なり　大なる威德を
佛金剛手に告げたまはく　　此れは一切眞言
成就し玉へり
即ち是れ正等覺（シヤウトウカク）　法自在牟尼（ホウジザイムニ）なり　諸の無智の暗を破すること　日輪の普く

(一)說百字云云此品は前の眞言品の中に說き玉ふ可きも、是は亂脫なり、慢法の人を繫がんが爲めの故此の品阿字より二十五字を生じ、各四百字を成ずること轉して百字を說く、即ち阿字は百光王なりとす。

(三)不空の敎一切衆生の見聞觸知皆菩提を成ずる故に不空の敎といふ暗字を示す。

(四)眞言の自在眞言に於て自在を得る故なり。

(五)三昧耶身口意をいふ。

(六)三法理と行と果とを云ふ。

現ずるが如し

是れ我が自體なり　大牟尼加持して　衆生を利益するが故に　應化して神變を作し

乃至一切をして　思願に隨て生起せしむ　悉く能く爲に　神變を施作する無上の句なり

故に當さに一切種にをいて　淨身にして諸垢を離れ　理に應じて常に勤修して佛菩提を志願すべし

(一)百字果相應品第二十

(二)爾の時に毗盧遮那世尊、執金剛秘密主に告げて言はく、秘密主、若し大覺世尊の、(三)大智灌頂地に入ぬれば、自ら見るに三三昧耶の句に住す。秘密主、薄伽梵の大智灌頂に入ぬれば、即ち陀羅尼の形を以て佛事を示現す。爾の時に大覺世尊、隨つて一切の諸の衆生の前に住して、佛事を施作し、三三昧耶の句を演説し玉ふ。佛の言はく、秘密主、我が(四)語輪の境界の廣長にして、遍く無量世界に至る清淨門を觀ずべし。其の本性の如く、類に隨ふ法界門を表示して、一切衆生をして皆歡喜を得しむること、

(一)百字云云　前品の百光遍照の果地の萬德を說きたまふ、故に此の品は三來る、相應とは三平等の境智相應なり、迷語平等是れ相應なり、空點は智、阿字は境、阿字は果なり、故に百字果相應といふ。

(二)爾の時云云　二敎論下卷に之の經文を引きて大日三身の相とする。

(三)大智云云　佛果なり。

(四)語輪　舌なり

亦た今の釋迦牟尼世尊の、無盡虛空界に流遍して、諸の刹土に於て佛事を勤作し玉ふが如し。秘密主、諸の有情の能く世尊の是の語輪相より、正覺の(一)妙音莊嚴の瓔珞を流出し、胎藏より佛の影像を生じて、衆生の性欲に隨つて、歡喜を起さしむることを知るに非ず。爾の時に世尊、無量の世界海の門に於て、法界に遍く慇懃に勸發して、菩提を成就し、普賢菩薩の行願を出生し玉ふ。此の(二)妙華布地、胎藏莊嚴世界の、種性海の中に於て生を受けて、種種の性の淸淨の門を以て、佛の刹を淨め除き、菩提場を現して、而も(三)佛事を作す。次に復三藐三菩提の句を志求す、(四)心の無量を知るを以ての故に、身の無量を知る。身の無量を知るが故に、智の無量を知る。智の無量を知るが故に即ち衆生の無量を知る。衆生の無量を知るが故に、即ち虛空界の無量を知る。秘密主、心の無量に由るが故に、四種の無量を得、得已つて最正覺を成じて、十智力を具し、四魔を降伏し、無所畏を以て、而も師子吼す。佛偈を說て言はく、

勤勇此の一切の　無上覺者の句は　百門の學處に於て　諸佛の說き玉ふ心なり

(五)百字位成品第二十一

爾の時に執金剛秘密主、未曾有なることを得て、而も偈を說て言さく、

(一)妙音云云　法本より甚深なり、說かざれば彰はれず、故に妙音莊嚴といふ、瓔珞は喩なり。

(二)妙華云云　妙華は阿字、布地とは自の心地に布く。

(三)佛事　化他門のこと、佛の自證は入定の時なり、其他皆化他門に住したまふ。

(四)心の無量　已下五無量を明す。

(一)百字位云云　上品阿字の義を種々に說くと雖、未だ無相無分別の義なる故に此の品に說くなり、之に依らずんば則ち法相に著して親證することを得ざる故に。

佛眞言救世者の　能く一切の諸の眞言を生ずることを說き玉へ
摩訶牟尼(一)云何が知る　誰か能く此を知る何れの處よりす
誰か是の如き諸の眞言を生ずる　生ずる者を誰とかする唯だ演說し玉へ
大勤勇士は說の中の上なり　此の如くの一切を願くは開示し玉へ
爾の時に薄伽梵　法自在牟尼　圓滿し普く周遍して　悉く諸の世界に遍じ玉ふ
一切智慧者の　大日尊告げて言はく　善哉摩訶薩　大德金剛手
吾れ當に一切を說くべし　微密にして最も希有なり　諸佛の密要は　外道は
知ること能はず
若し悲生曼荼に　大乘の灌頂を得れば　調柔して善行を具し　常に悲ありて
他を利するものなり
(二)緣あつて菩提を觀ずるに　常に見ること能はざる所なり　彼れ能く此の
內心の大我を知ることあれば
其の自心の位に隨つて　(三)道師所住の處あり　八葉の意より生ず　蓮花極め
て嚴麗なり

(一) 云何云云　下四門を擧ぐ。已

(二) 緣ありて云云　佛法は一切の相と緣とを離るゝ、有相有緣なるは即ち斷常の見を離れず。

(三) 導師　佛をいふ。

圓滿の月輪中に　無垢にして猶淨き鏡のごとし　彼に於て常に安住せる　眞
言救世の尊は　三昧に住して毒を害すること　日の觀る可きこと難
金色にして光焰を具せり
きが如し　諸の衆生も亦然なり
常恒に內外に於て　普く周遍して加持す　是の如く慧眼を以て　意の明鏡を
了知す
眞言者の慧眼を以て　是の圓鏡を觀ずるが故に　當に自の形色の　寂然とし
て正覺の相なるを見るべし
(一)身と身より生ずる影像にして　意は意より生ずる所なり　常に淸淨の　種
種の自の作業を出生す
次に彼の光現ずるに於て　圓照なること電焰の如し　眞言者能く　一切の諸
の佛事を作す
若し見に淸淨を成せば　聞等も亦復然なり　意の思念する所の如く　能く諸
の事業を作す

(一) 身と身云云　上の身は有爲の身下の身は無爲淸淨の身なり。

復次に秘密主、眞言門に菩薩の行を修する諸の菩薩は、是の如く自身の影像生起す。殊勝なること三菩提に過たることあることなし。眼耳鼻舌身意等の、四大種の攝持し集聚するが如く、彼れ是の如く自性空にして、唯名字の所執のみあり。猶し虛空の如くにして、執著する所無きこと影像に等し。彼の如來正覺を成じて、互相ひに緣起し玉ふこと間絕ゐることなし。若し緣に從つて生ずること、彼れ即ち影像を生ずるが如し、是の故に諸の本尊は即ち我なり。我は即ち本尊なり、互に相ひ發起す。身より生ずる所の身は、尊の形像生ずるなり。秘密主觀ずべし、是の法は通達慧により、通達慧は法に緣り、彼等遞ひに作業を爲し無住にして性空なりと。秘密主、云何んが意より意を生じ、能く影像を生ずる。秘密主、譬へば(一)若は白、若は黃、若は赤、作意する者の作す時に、染著の意生ずるが如く、彼れと同類にして是の如く身轉ず。秘密主、又內に意の中の(二)曼荼羅を觀ずるが如きは、熱病を療治するに、彼の衆生の熱病即時に除癒して疑惑ゐることなし。曼荼羅は意に異なるに非ず、意は曼荼羅に異なるに非ず。何を以ての故に、彼の曼荼羅と一相なるが故に。秘密主、又幻者の男子を幻作して、而も彼の男子又復化を作すが如きは、秘密主、意に於て云何ん、彼何なる者をか勝れたりとする。時に金剛手、佛に白して言さく、世尊、此の二人は、相異なること無きなり。何を以ての故に、世尊、實に生ずるに非るが故に。此の二の男子は本性空なるが故に、幻に等同なり。是の如し秘密主、意より生ずる衆の事と、及び意の生ずる所のものと、是の如く俱に空にして(一)無二無別なり。

(一)若は白云云 今は染汙して流轉することを說きたまふ、白は黃とも赤とも成るが故なり。

(二)曼荼羅 壇上の曼荼羅は全く自心の功德を畫き顯すが故に、彼と心とは全同なれば、心に執着すれば流轉となる、彼と心と別なりと見る時は則ち流轉なり、壇上の曼荼羅も法界、自心も法界なるが故に。

(一)無二無別 此の品の肝要なり。

(二)百字云云 上品に果相を說きし故、此の品に三十二字を說きて三十二相となして相好を說けり。

(三)身と身 上の身は有爲身、下の身は無爲身なり。

(四)意云云 上の意は染淨の意、下の意は淸淨の意。

(五)彼の處 淨心なり。

(六)摩奴闍 意生身といふ、諸天等意より化生するを言ふ、人とも翻ず。

(七)摩納婆 勝義我又は儒童と譯す。

(八)一切の分別云云 蠹分別と細分別なり。

(二)百字成就持誦品第二十二

爾の時に世尊、執金剛秘密主に告げて言はく、諦に聽け秘密主、眞言救世者は、(三)身と身と異分ゐること無し。(四)意は意より生じて善く淨除せしむれば、普く皆光ありて(五)彼の處より流出す、相應して而も起つて諸の支分に遍ず。彼の愚夫の類は常に知らざる所なり。此の道に達せず、乃至身の所生の分無量種なるが故に、是の如く眞言救世者の、分說も亦無量なり。譬へば吉祥の眞陀摩尼の、諸の樂欲に隨つて而も饒益を作すが如し。是の如く世間に世を照す者の身は、一切の義利成せずと云ふ所なし。秘密主。云何んが無分別の法界に、一切の作業隨轉する。秘密主、亦虛空界の衆生に非ず、壽者に非ず、(六)摩奴闍に非ず、(七)摩納婆に非ず、作者に非ず、吠陀に非ず、能執に非ず、所執に非ず、(八)一切の分別及び無分別を離れて、而も彼の無盡の衆生界の一

切の去來の、諸有所作に疑心を生ぜざるが如く、是の如く無分別の一切智智も、虛空に等同にして、一切衆生に於て、內外に而も轉じ玉ふ。

爾の時に世尊、又復無盡衆生界を淨除する句、三昧を流出する句、不思議の句、他門を轉ずる句を宣說し玉ふ。

若し本より所有無けれども　世間に隨順して生ぜば　云何んが空の　此の瑜伽者を生ずることを了知せん

若し自性是の如く　名不可得なりと覺るとき　當に等空の心生ずべし　所謂る菩提心なり

應に慈悲を發起して　諸の世間に隨順すべし　唯想の行に住する　是を即ち諸佛と名く

當に知るべし想より造立す　此を觀じて空空と爲す　數を下す法の轉じて一を增して而も分異なるが如く

勤勇の空も亦然なり　增長すること次第に隨ふ　(一)即ち此の阿字等は　自然智の加持なり

(一)即ち此云云自然智とは佛を指す、次に四十字門を說て字形等の法門を示す。

阿、婆、嚩、　迦、佉、哦、伽、　遮、車、若、社、　吒、咤、拏、荼、　多、他、那、駄、波、頗、麼、婆、　野、囉、邏、嚩、奢、　莎、娑、訶、乞、灑、　仰、壤、拏、曩、莽、

秘密主、此を觀ずれば、空の中より流散し假立す。阿字に加持せられて、三昧道を成就す、秘密主、是の如く阿字は、種種の莊嚴に住して、圖位を布列せり。一切の法本不生なるを以ての故に、(一)自形を顯示す。(二)或は不可得の義を以て、嚩字の形を現はし、或は諸法造作を遠離するが故に、迦字の形を現し。或は一切の法等虛空の故に、迦字の形を現し。或は行不可得の故に、哦字の形を現し。或は諸法一合相不可得の故に、伽字の形を現し。或は一切の法生滅を離れたるが故に、遮字の形を現し。或は一切法影像無きが故に、車字の形を現し。或は一切の法生不可得の故に、若字の形を現し、或は一切の法離戰敵の故に、社(上聲呼)字の形を現し。或は一切の法離我慢の故に、吒字の形を現し。或は一切の法離養育の故に、咤字の形を現し。或は一切の法離怨對の故に、拏字の形を現し。或は一切の法離災變の故に、荼字の形を現し。或は一切の法離如如の故に、多字の形を現し。或は一切の法離住處の故に、他字の形を現し。或は一切の法離施の故に、那字の形を現し。或は一切法界不可得の故に、陀字の形を現し。

(一)自形云云阿字本不生を云ふ。即自心なり、阿字の處には自形と云ひ嚩字已下には字形と云ふ、丑字より一切の字形を生ず、阿は能生の故に。

(二)或は不可得云云已下は諸字を以て阿字を轉釋す。

し。或は一切法勝義諦不可得の故に、波字の形を現し。或は諸法不堅如聚沫の故に、頗字の形を現し。或は一切法離繫縛の故に、麼字の形を現し。或は一切の法諸觀不可得の故に、婆字を形を現し。或は一切の法諸乘不可得の故に、野字の形を現し。或は一切の法離一切塵の故に、囉字の形を現し。或は一切の法無相の故に、邏字の形を現し。或は一切の法離言說の故に、嚩字の形を現し。或は一切の法離寂の故に、奢字の形を現し。或は一切の法本性鈍の故に、沙字の形を現し。或は一切の法離因の故に、訶字の形を現す。秘密主、隨つて此等の一一の三昧門に入るべし。秘密主、是を觀ずれば、乃至(二)三十二大人相等、皆な此の中より出づ。仰、壤、儜、曩、莽、等しく一切の法に於て、自在にして而も轉ず。此れ等隨つて現れて、三藐三佛陀の隨形好を成就す。

(二)百字眞言法品第二十三

復次に秘密主、此の三昧門に於て、(三)空を以て加持すれば、一切の法に於て自在に、最正覺を成就す。是の故に此の字を即ち本尊となす。而も偈を說いて言はく、

秘密主、當に知るべし　阿字は第一の句なり　明法普く周遍し　字輪を以て圍繞せり

彼の尊は相あることなし　遠く諸見の相を遠離せり　無相なれども衆の聖尊

而も相を現じて中より來り玉ふ

聲は字より出で　字は眞言を生じ　眞言は果を成立す　諸の救世尊の說なり

當に知るべし　聲の性は空なり　即ち空の造作する所なり　一切衆生の類は

(一)言の如く而も妄りに執す

空に非ず亦聲に非れども　修行者の爲に說く　聲の解脫に入つて　即ち三摩地を證す

法に依て布して相應せよ　字を以て照明を爲せ　故に阿字等の類の　無量の眞言を想へ

(二)說菩提性品第二十四

譬へば十方の虛空の相の　常に一切に遍くして所依無きが如く

是の如く眞言救世者も　一切の法に於て所依なし

又空中の諸の色像の　現に見るべしと雖も依る處なざが如く

(一)三十二云云　初めの阿婆縛と次の迦字等の二十字、合せて卅二字なり。

(二)百字眞言云云　眞言とは丸字なり、丸字の一字に百字を攝するなり。百字を說きて一の字に百字を顯すなり、此の品には百字なし、一字を擧げて他を略す。

(三)空を以て加持すれば云云　阿字を以て加持すると云ふ。

(一)言の如く云云　凡夫は鐘の音を聞て鐘音と執し、空と言へば空と計り執す、故に次に聲の解脫に入つて本不生と云ふ、解脫とは解脫の義、入とは了知の義、一音を聞て萬德を知ると。

(二)說菩提云云　當品は百字法品の中の義を賺けて喩へて說くなり、菩提とは暗字なり、性とは本不生不改の性なり、即ち暗字の普遍なることを說くなり。

眞言救世者も亦然なり　彼の諸法の所依の處に非ず
世間成立の虛空の量は　去と來と現在世とを遠離せり
若し眞言救世者を見れば　亦復三世の法を出過せり
唯だ名趣のみに住して　作者等を遠離せり　(一)虛空の衆の假名は　導師の宣
說し玉ふ所なり
名字は所依なきこと　亦復虛空の如し　眞言の自在も然なり　現見すれども
言說を離れたり
火と水と風等に非ず　地に非ず日光に非ず　月等の衆曜に非ず　晝に非ず亦
夜に非ず
生に非ず亦老病に非ず　死に非ず損傷に非ず　刹那の時分に非ず　亦年歲等
に非ず
亦成壞あるに非ず　劫數も不可得なり　淨染の受生に非ず　或は果亦不生なり
若し是の如き等の　種種の世の分別無くば　彼に於て常に勤修して　(二)一切
智の句を求むべし

(一) 虛空云云　種々に假名を付しても一も虛空に非ずと。

(二) 一切智云云　菩提性は即阿字門なり、阿字門は即一切智の句なり。

(一) 三三昧耶云云　三平等を明す謂く心と智と悲と佛と法と僧と法と報と應との三是れ平等なり。

(二) 自性云云　初心は發心して佛果を求むれども、心性に功德ありと觀ずること能はざるなり。第二心は如實智生じて分別を斷ず、第三心は利他の大悲を起す。妄想

(一)三三昧耶品第二十五

爾の時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊の說き玉ふ所の、三三昧耶は、云何んが此の法を說いて、三三昧耶とするか。是の如く言ひ已つて、世尊、執金剛秘密主に告げて言はく、善哉、善哉、秘密主、汝吾に是の如きの義を問ふ。秘密主汝當に諦に聽き善く之れを思念すべし、吾今演說せん。金剛手の言さく、是の如し、世尊願樂くは聞んと欲す。佛の言はく、三種の法相續すること有りて、除障と相應して生ずるを、三三昧耶と名く。云何んが彼の法相續して生ずる。所謂る初心には(二)自性を觀せず、此れより慧を發し如實の智生じて、無盡の分別の網を離る、是を第二の心と名く。菩提の相は無分別の正等覺の句なり。秘密主、彼實の如く見已つて、無盡の衆生界を觀察して、悲自在に轉ず。無緣の觀をもて、菩提心生ず。所謂る一切の戲論を離れて、衆生を安置し、皆無相菩提に住せしむ、是を三三昧耶の句と名く。

復次に秘密主、　三三昧耶あり　最初は正覺の心なり　第二を名て法と爲す
彼より心相續して生ずるは　所謂る和合僧なり　此の三三昧耶は　諸佛の導
師なりと說き玉ふ

若し此の三等に住して　菩提の行を修すれば　諸の導門の上首として　諸の
衆生を利することを爲す
當に菩提を成じ　三身自在に轉ずることを得べし
秘密主、三藐三佛陀、敎を安立し玉ふが故に、一身を以て加持し玉ふ。所謂る初めの
變化身なり。復次に秘密主、次に一身に於て三種を示現し玉ふ。所謂る佛と法と僧と
なり。復次に秘密主、此れより成立して、三種の乘を說き、廣く佛事を作して、般涅
槃を現じ、衆生を成熟し玉ふ。秘密主、彼の諸の眞言門に、菩提の行を修する諸の菩
薩を觀ずべし。若し三等を解り、眞言の法則に於て、而も成就を作して、彼れ一切の
妄執に著せざれば、能く障礙を爲す者なし、(一)不樂欲と懈怠と、無利の談話と、信心
を生せざると、資財を積集する者とを除く。復二事を作さざるべし、謂く諸酒を飲む
と、及び(二)牀上に寢ぬるなりと。

(三)說如來品第二十六

爾の時に執金剛秘密主、世尊白して言さく、
云何んが人中の尊　云何んが菩薩と名け　云何んが正

(一)不樂欲　眞言密敎を信ぜざるものなり。
(二)牀の上云云　茅艸を敷くべしと。
(三)說如來云云　上來法を說きて處處に如來菩薩等の名字を說くと雖も其の名義を決擇することを說かず、故に此の品來るなり。

覺と爲す
導師大牟尼　願くは我が疑ふ所を斷じ玉へ　菩薩大名稱　疑慮の心を棄捨して
當に摩訶衍を修すべし　行の王として上あること無けん。
爾の時に薄伽梵毗盧遮那、諸の大會の衆を觀察して、執金剛秘密主に告げて言はく、
善哉、善哉、金剛手、能く吾に是の如きの義を問ふ。秘密主、汝當に諦に聽き、善く
之を思念すべし、吾今摩訶衍の道を演說せん、頌に曰く、
菩提は虛空の相なり　一切の分別を離れたり　彼の菩提を樂求するを　菩提
薩埵と名く
十地等を成就じて　自在に善く　諸法は空にして幻の如しと通達す　此れ一
切同なりと知り
諸の世間の趣を解す　故に名けて正覺と爲す　法は虛空の相の如く　無二に
して唯一相なり
佛の十智力を成ず　故に三菩提と號す　唯し慧を以て無明を害して　自性言
說を離れたる

(一)世出世云云　梵天所説の四十四種の火を世とし、如來所説の十二種の火を出世とす。而して此の品所説の世間の護摩は大日如來往昔梵志たりし時、梵天來りて種々の火を問ひし故なり、次に如來の火相を説く。

(二)所謂る云云　已下外道四十四種の火を説けり。

(三)胎藏云云　在家の梵志苦行十二年擧りて家に還り妻を娶りて家事を修む彼の婦人胎らむ時胎藏を置と云ふ。

自證の智慧あり　故に説いて如來と名く

(一)世出世護摩法品第二十七

復次に秘密主、往昔に一時、我菩薩と爲て、菩薩の行を行じて、梵世に住せし時に、梵天有り來つて、我に問うて言はく、大梵我等火に幾の種か有るを知らんと欲す。時に我是の如く答て言はく、

(二)所謂る大梵天を　我慢自然と名く　次に大梵天子あり　彼れを簸𨻶句と名く
世間の火の初めなり　其の子を梵飲と名け　子を畢怛囉と　吠濕婆捺羅と名く
復訶囉奴と　合毗囉訶那と　簸說三鼻覩と　及び阿闍末拏とを生ず
彼の子は鉢體多と　補色迦路陶となり　是の如きの諸の火天　次第にして以て相ひ生ず

復次に(三)胎藏を置くに　忙路多火を用ゐ　後に身を澡盥せんと欲するときは
囉訶忙囊火なり　曹蘖盧火を以てす　若し子を生じての後には　鉢
妻に浴せしむるの所用は
伽蒲火を用ゆ

(一)禁滿十二ヶ年を滿して師恩を報ぜんが爲に牛を施す。

子の爲に初めて名を立るには　簸體無火を用ゐ　飲食の時の所用には　當に
知るべし戌脂火なり　殺毗火を用ゆべし　次に禁戒を受る時は　三謨婆𨻶
子の爲に髻を作る時は
火なり

(一)禁滿して牛を施す時は　素哩邪火を用ゐ　童子の婚媾の時は　瑜赭迦火を
以てす　跋那易迦火なり　諸の天神を供養するには　簸𨻶
衆の事業を造作するには
句火を以てす
房を造るには焚火を以てす　惠施には扇都火なり　羊を縛に用る所は　阿縛
賀寧火なり
觸穢の用る所は　微吠脂火を以てし　熟食するに用る所は　娑訶娑火を以てす
日天を拜する時の用には　合微誓邪火なり　月天を拜する時の用には　所謂
る儞地火なり
滿燒に用る所は　阿密栗多火なり　彼の息災の時に於ては　那嚕拏火を用ゆ

増益の法を作す時には　訖栗旦多火なり　怨對を降伏する時には　當に忿怒の火を以てすべし

諸の資財を召攝するには　迦摩奴火を用ゐ　若し林木を焚燒するには　使者火を用ゆべし

食する所を消化せしむるは　社陀路火を用ゐ　若し諸火を授くる時には　所謂る薄叉火なり

海中に火あり　縛拏婆目佉と名く　劫の燒盡の時の火をば　名けて瑜乾多と曰ふ

汝諸の行者の爲に　已に略して諸火を說きつ　韋陀を修習する者　梵行の傳へ讀む所なり

此の四十四種は　爾の時に我宣說しき　復次に秘密主　我往昔の時に於て諸火の性を知らずして　諸の護摩の事を作す　彼の護摩の行に非ず　能く業果を成ずるに非ず

我復菩提を成じて　(二)十二火を演說す　智火を最も始めと爲し　大因陀羅と

(二)十二火　已下出世の外護なり　第一は息災、第二は增益等なり。

名く

端嚴にして淨金の相なり　增益して威力を施す　焰鬘あて三昧に住す　當に知るべし智圓滿

第二をば行滿と名く　普く光らして秋の月の華の如し　吉祥圓輪の中に　珠鬘鮮白の衣あり

第三の摩嚕多は　黑色にして風燥の形なり　第四の盧醯多は　色朝日の暉の如し

第五の沒嚧拏は　髭多くして淺黃の色なり　頸脩くして大威光あり　遍く一切を哀愍す

第六をば忿怒と名く　眇目にして霏煙色なり　髮聳くして而も震吼す　大力にして四牙を現ず

第七の闍吒羅は　迅疾にして衆綵を備ふ　第八は迄灑耶なり　猶し電光の聚るが如し

第九をば意生と名く　大勢あつて巧色の身なり　第十の羯擺微は　赤黑にし

て唵字の印なり

第十一の火神は　―梵本に名を闕く―　第十二の謨賀那は　衆生の迷惑する所なり

秘密主此等の　火色の所持は　其の自の形色に隨つて　藥物等も彼に同じう

して

而も外護摩を作すべし　意に隨つて悉地を成ず　(一)復次に內心に於て　一性

にして而も三を具す

(二)三處を合して一と爲す　(三)瑜祇の內護摩なり　大慈大悲の心　是を息災の

法と謂ふ

彼兼て喜を具す　是を增益の法と爲す　忿怒は胎藏に從て　而も衆の事業を

造す

又彼秘密主　其の所說の處の如く　相應して事業に隨ひ　信解に隨つて焚燒

すべしと

(四)爾の時に金剛手、佛に白して言さく、世尊、云何なるか火爐の三摩地、云何なるか

而も用て散灑し、云何んが順に吉祥草を敷く、云何んが緣の衆物を具する、是の如く

(一)復次云云已下內護摩を說く、

(二)三處云云已身に本尊の三密と、行者の三密とを具するは一性にして而も三を具し、此三平等不二なるを三處を合して一と爲すと云ふ。

(三)瑜祇云云是れ心內觀心の內護摩にして秘觀等あり。

(四)爾の時已下外護摩の衆緣支分を說きたまふ。

說き已ぬ。

爾の時に金剛手　佛に白して言さく世尊　云何んが火爐の定　云何が散灑を

用ゆる

順に吉祥草を敷く　云何が衆物を具す　佛秘密主　持金剛者に告げて言はく

火爐は肘量(チウレウ)の如くして　四方の相均等なり　四節を緣の量と爲し　金剛の印

を周帀すべし

之れを藉くに生茅を以てし　爐を繞りて而も右に旋らす　末を以て本に加へざ

れ　本を以て末に加ふべし

次に吉祥草を持して　法に依て而も右に灑げ　塗香と華と燈とを以て　次に

火天に獻ぜよ

行人一華を以て　沒栗茶(ボリダ)に供養して　坐位に安置す　復當に灌灑を用ゆべし

當に滿施を作すべし　持するに本眞言を以てし　次に息災の護摩　或は增益

の法を以てす

是の如きの世の護摩を　說て名て外事と爲す　復次に內護摩は　業生を滅除す

自の末那を了知して　遠く色聲等を離る　眼と耳と鼻と舌と身と　及與び語
と意との業は
皆悉く心より起つて　心王に依止す　眼等の分別生じて　及び色等の境界あり
智慧未生の障は　風燥火能く滅す　妄分別を燒除して　淨菩提心を成ずと
此を內護摩と名く　諸の菩薩の爲に說く

(一)說本尊三昧品第二十八

爾の時に執金剛秘密主、佛に白して言さく、世尊、願くは諸尊の色像、威驗の現前することを說き玉へ、眞言門に菩薩の行を修する、諸の菩薩をして、本尊の形を觀緣せしむるが故に、即ち本尊の身を以て自身と爲す。疑惑あること無くして、而も悉地を得べし。是の如く說き已て、佛、執金剛秘密主に告げて言はく、善哉、善哉、秘密主、汝能く吾に是の如きの義を問ふ。善哉、諦に聽き極て善く作意すべし、吾今演說せん。金剛手の言さく、是の如し、世尊、願樂くは聞かんと欲す。佛の言はく、秘密主、諸尊に(二)三種の身あり、所謂る字と印と形像となり。彼の字に二種あり、謂く(三)聲と及び菩提心となり。印に二種あり、所謂る(四)有形と無形となり。本尊の身に亦二種あり。

(一)說本尊云云　本尊とは自身具足の自性清淨身なり
(二)三種の身となり。字印形は三三平等なり、此の三平等和合するに由り本尊降臨したまふなり。
(三)字と印と形なり。
(四)聲と及び云云　聲を觀ずるは其字義を觀ずるなり。即ち字の實相に由て菩提心を觀ず。
(四)有形と無形　有形とは所の一股手に執る等を有形と云ふ。無形とは觀念三股等を無形と云ふ。方に由りて成ずる所の蓮月等なり。

所謂る(一)清淨と非清淨となり。彼れ淨身を證すれば、一切の相を離る。非淨有想の身は、即ち顯と形との衆色あり。彼の二種の尊形、二種の事を成就す。有想の故に、有相の悉地を成就し、無想の故に、隨つて無相の悉地を生ず。而も偈を說いて言はく、

佛有想を說き玉ふ故に　樂欲して有相を成ず　無相に住するを以ての故に
無想の悉地を獲
是の故に一切の種　當に非想に住すべし

(二)說無相三昧品第二十九

復次に薄伽梵毗盧遮那、執金剛秘密主に告げて言はく、秘密主、彼の眞言門に、菩薩の行を修する諸の菩薩、(三)無相三昧を成就せんと樂欲せば、當に是の如く思惟すべし。想は何れより生ずる、自身とせんや、自の心意とせんや。若し身より生せば、身は草木瓦石の如し。自性是の如く造作を離れたり、識知する所無し、因業の生ずる所なり、當に等しく觀じて外事に同ずべし。又建立せる形像の如く、火に非ず、水に非ず、及に非ず、毒に非ず、金剛等に傷つけ壞られ、或は忿恚麤語すれども、而も能く少分も其をして動作せしむるに非ず。若し飲食と衣服と塗香と華鬘とを以て、或は塗香と旃

(一)清淨云云　清淨とは尊形、非清淨とは神木等の形像なり。
(二)說無相云云　上品に行者本尊を觀じて奇妙の境を得ることを說きしも之れ有相なり、故に更に無相三昧を說くなり。
(三)無相三昧　身口意三平等の法門の成熟するを無相三昧といふ。

檀と龍腦と是の如き等の類の、種種の殊に勝れたる受用の具を以て、諸天と世人と、奉事し供給すれども、亦喜を生せず、何を以ての故に、愚童凡夫は、自性空の形像に於て、自ら我分を生じて、顚倒不實にして、諸の分別を起して、或は復供養し、或は毀害を加ふ。秘密主、當に是の如く循身の念に住して、性空を觀察すべし。

復次に、秘密主、心は自性無し、一切の想を離れたるが故に、當に性空を思惟すべし。秘密主、心は三時に於て求むるに得可らず、三世を過ぎたるを以ての故に。是の如きの自性は、遠く諸相を離れたり。秘密主、心想ありとは、即ち是れ愚童凡夫の分別する所なり。了知せざるに由りて、是の如き等の虛妄の橫計あり。彼の不實不生の如く、當に是の如く思念すべし。秘密主、此の眞言門に、菩薩の行を修する諸の菩薩は、無相の三昧を證得す。無相三昧に住するに由るが故に、如來の說き玉ふ所の眞語、親たり其の人に對して常に現在前す。

(一)世出世持誦品第三十

復次に秘密主、今秘密眞言を持する法を說くべし。

一一の諸の眞言に　(二)心意の念誦を作せ　出入の息を二となす　常に第一と

(一)世出世持誦云云上來修行者の爲に入道の法を示す、是れ所行の法なり、今の品は持誦の方軌を示す。(二)心意云云心意念誦を第一とし出入息念誦を第二とす。第一とは阿第一命なり。

(一)我れ四種前に已に說けども更に說くの意。(二)所緣云云聲念誦。或は云云作意念誦。(三)出入云云出入息念誦。(四)當に云云三摩地念誦なり。(五)三落叉相なり、即本尊と身と字との三平等なり。(六)囑累品云云末代傳法の人等の爲に更に外迹の傳ふ可きの相を明す。前に經の初に弟子の相を擇ぶことを明し、今又之を說くなり。即之れ流通文なり。(七)不放逸師資相承の法則を越へざるを云ふなり。

相應するなり

此に異つて而も受持すれば　眞言支分を闕く　內と外と相應するに　(一)我れ四種ありと說く

彼の世間の念誦は　(二)所緣あつて相續して　種子の字と句とに住し　(三)或は心本尊に隨ふ

故に攀緣ありと說く　(四)出入の息を上と爲す　(五)當に知るべし出世の心は遠く諸字を離れたり

自と尊と一相と爲す　二無く取着無し　意と色像とを壞らず　法則に異すること勿れ

說く所の(六)三落叉(サンラクシャ)に　多種の持眞言あり　乃至衆の罪を除いて　眞言者淸淨なり　念誦の數量の如くして　是の如きの敎に異すること勿れ

(七)囑累品第三十一

爾の時に世尊、一切の衆會に告げて言はく、汝今當に、(八)不放逸に住すべし。此の法門に於て、若し根性を知らざれば、他人に授與すべからず。我が弟子の標相を具する

者をば除く。我今演說せん、汝等當に一心に聽くべし。若し吉祥の執宿の時に於て生れて、勝事を志求し。微細の慧あつて、常に恩德を念じ、渴仰の心を生じ、法を聞きて歡喜して而も住せん。其相青白なり、或は白色なり。廣き首、長き頸、額廣く平正にして、其の鼻脩く直く、面(メンポ)圓滿(エンマン)にして端嚴相稱はん。是の如くならば、應當に殷懃に而も之れを敎授すべし。爾の時に一切具威德者、咸く慶悅を懷いて、聞き已つて頂受し、一心に奉持す。是の諸の衆會、種種の莊嚴を以て、廣大に供養し已つて、佛の足を稽首し、恭敬合掌して、而も是の言を說く、唯願くは此の法敎に於いて、救世の加持の句を演說して、法眼道をして、一切處に遍じて、久く世間に住せしめ玉へと。

爾の時に世尊、此の法門に於て、加持句の眞言を說て曰く、

南麽三曼多勃馱喃、薩婆(サラバ)他勝勝(タショウ〜)、怛(タ)㗚怛㗚(リンタリン)、顚顚(ヒヤウ〜)、達嚩達嚩(タランタラン)、娑他跛(サタハヤ)也娑他跛(サタハヤ)也、勃馱(ボダ)薩底(サチヤ)也嚩(バ)、訖(ウンタラ)達摩(マ)薩底(サチヤ)也嚩(バ)、僧(ソウ)伽薩底(サチヤ)也嚩(バ)、訖訖(ウンウン)、吠那尾吠(ベイダビベイ)、莎訶(ソハカ)。

時に佛此の經を說き已り玉ひて、一切の持金剛者、及び普賢等の上首の諸の菩薩、佛の說き玉ふ所を聞いて、皆な大に歡喜し信受し奉行しき。

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷六 終

(一)供養云云前六卷は梵本三十頌の略本なり、此第七卷は各別略本にして供養儀軌を說きたまふ、故に品題も別立せり。

(二)我大日云云我とは文殊菩薩なり。

(三)方廣乘 大日經をいふ。

(四)有情の信解云云 諸の衆生に漸入と(下)頓入(中)と超昇(上)との三品ありとの意。

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷七

(一)供養念誦三昧耶法門眞言行學處品第一

毗盧遮那佛の　淨眼を開敷し玉へること靑蓮の如くなるを稽首したてまつる

(二)我大日經王に依て　供養を資くる所と衆の儀軌とを說かん

次第の眞言の法を成せん爲に、彼の如くせば當に速に成就することを得べし

又本心をして垢を離れしめんが故に　我今要に隨ひ略して宣說せん

然も初に自多の利成就することは　無上智願の方便なり

彼を成ずる方便は無量なりと雖　悉地を發起することは信解に由る

悉地の諸の勝願を滿し玉へる　一切如來と勝生子と

彼等の佛身の眞言形と　住する所の種種の印と威儀と

殊勝の眞言を行ずる所の道と　及び(三)方廣乘とに於て皆諦信すべし

(四)有情の信解に上中下あり　世尊彼の證修の法を說き玉ふ

六趣に輪廻する衆を哀愍して　隨順し饒益するが故に開演し玉ふ

當に恭敬して決定の意を以てすべし　亦勤誠深信の心を起すべし
若し最勝の方廣乘に於て　妙眞言の(一)調伏の行を知り
善逝子の修習する所の　無上(二)持明の別律義に隨ひ
具緣の衆の支分を解了し　傳敎の印可等を受くることを得たる
是の如きの師を見ては恭敬し禮して　利他の爲の故に一心に住すべし
瞻仰すること猶世の導師の如くし　亦善友及び所親の如くすべし
慇懃殊勝の意を發起して　供養し給侍して所作に隨ひ、
善く師の意に順じて歡喜せしめよ　慈悲攝受して相對はん時には
稽首して勝れたる(三)善逝の行を請ふべし　願くば尊應の如く我を敎授したまへ
彼の師自在に　而も大悲藏の妙圓壇を建立し
法に依て曼荼羅に召入し　器に隨つて三昧耶を授與すべし
(四)道場と敎本と眞言印と　親く尊の所に於て口に傳授すべし
勝三昧耶及び護を獲て　爾して乃ち應當に說の如く行ずべし
然も此の契經の說く所は　正眞言の平等の行を攝す

(一) 調伏　眞言行者の三昧なり。
(二) 持明　禁戒の威儀なり。
(三) 善逝の行　云云　行者は初の三昧耶に入て三密の行を修する故に佛の所行なる以て勝れたる善逝の行を請すと云ふ。
(四) 道場　曼荼羅をいふ。次の敎本とは大日經なり。

劣慧の弟子を哀愍するが故に　漸次の儀式を分別す
勝利に造れる天中の天　正覺の心より生ずる所の子に於て
下世天の身語印に至るまで　此の眞言の最上乘に入る
諸の密行に導く軌範の者をば　皆當に敬ひ重じて輕んじ毀らざるべし
能く諸の世間を饒益するを以て　此の故に捨離の心を生ずること勿れ
常に應に無間に而も　彼等の廣大の諸の功德を繫念すべし
其の力分相應の事に隨つて　悉く皆承け奉りて而も供養すべし
佛と聲聞衆と及び緣覺との　彼の敎門の苦を盡すの道を說くと
學處を授たる師と同梵行とに　一切毀り慢る心を懷くこと勿れ
善く時宜の當に作すべき所を觀じて　和敬と相應して而も給侍すべし
愚童の心行の法を造らざれ　諸尊に於て嫌恨を起さざれ
世の導師の契經に說き玉ふが如く　能く大利を損ずること瞋に過ぎたるは莫し
一念の因緣悉く　俱胝曠劫に修する所の善を焚滅す
是の故に慇懃に常に　此の義利無きの根本を捨離すべし

(一)淨菩提心　眞言なり。

(二)大利　自證の大利なり。

(三)勢力　財施法施等の勢力なきを云ふ。

淨菩提心の如意寶は　世出世の勝希有を滿す
疑を除けば究竟じて三昧を獲　自利利他是に因つて生ず
故に應に守護せんこと身命より倍す　觀ずれば廣大の功德藏を具す
若し身口意に衆生を嬈(なやま)すことは　下少分に至るまで皆遠離すべし
異の方便の濟ふ所多くして　內に悲心に住して而も瞋を規ずるをば除く
恩德に背く有情の類に於て　常に忍辱を行じて過を觀せざれ
又常に大慈と悲と　及與び喜捨無量の心とを具足して
力の能へたる所に隨つて法食を施し　慈の利行を以て群生を化せよ
或は(二)大利と相應の心に由つて　時を俟つが爲の故に而も棄捨せよ
若し(三)勢力の廣く饒益すること無くば　法に住して但だ菩提心を觀ずべし
佛此の中に萬行を具し　淸白醇淨(シヤウビヤクジユンジヤウ)の法を滿足すと說きたまふ
布施等の諸の度門を以て　衆生を攝受して大乘に於て
受持と讀誦と等と　及與び思惟と正修習とに住せしめよ
智者は六情の根を制止して　常に當に意を寂めて等引を修すべし

(一)所應云云　投擧所得の尊なり。

事業を毀壞するは諸の酒に由る　一切の不善法の根にして
毒と火と刀と霜雹等との如し　故に當に遠離して親近すること勿れ
又佛我慢を增すと說きたまふに由つて　高妙の床に坐臥すべからず
要を取て之れを言はば具慧者は　悉く自損損他の事を捨つべし
我れ正三昧耶の道に依つて　今已に次第に略して宣說す
佛說の修多羅を顯明して　廣く知解して決定を生せしめん
此れに依て正しく平等戒に住して　復當に毀犯の因を離るべし
謂く惡心を習ひ及び懈惰し　妄念し恐怖し談話する等なり
妙眞言門の覺心者は　是の如く正しく三昧耶に住して
當に障蓋をして漸く消へ盡さしむべし　諸の福德增益するを以ての故に
此の生に於て悉地に入らんと欲はば　其の(一)所應に隨つて之れを思念せよ
親たり尊の所に於て明法を受けて　觀察し相應すれば成就を作す
當に自ら眞言行に安住せんこと　所說の明の次第の儀の如くすべし
先づ灌頂傳敎の尊を禮して　眞言に修する所の業を請白せよ

(一) 妙山云云　一國中の名山。補峰とは大山の本にありて相助くる山、牛巖とは巖穴。
(二) 涅川　常に流て水絶へざるなり。
(三) 蓋纏　慳貪と嗔と昏沉と睡眠と掉擧と散亂と疑となり。

智者師の許可を蒙り已つて　地分の所宜の處に依れ
(一)妙山と補峯と牛巖との間　種種の龕窟と兩山の中と
一切の時に於て安穩を得べし　芰と荷と青蓮との遍巖の池と
大河と(二)涅川と洲と岸との側　遠く人物の衆の憒鬧を離ると
篠葉扶疎たる悅意の樹あり　乳木と及び祥草に多饒なると
蚊虻と苦と寒と熱と　惡獸と毒虫との衆の妨難有ることなく
或は諸の如來聖弟子の　嘗て往昔に於て遊居したまふ所
寺塔と練若と古仙の室と　當に自心意樂の處に依るべし
在家を捨離し諠務を絶ちて　勤めて五欲の諸の(三)蓋纏を轉せよ
一向に深く法味を樂み　其の心を長養して悉地を求むべし
又常に堪忍の慧を具足して　能く飢渴の諸の疲苦を安ずべし
淨命の善きを伴とし或は伴無くば　常に妙法の經卷と俱にせよ
若は諸佛と菩薩との行に順じて　正眞言に於て堅く信解し
淨慧力を具して能く堪忍し　精進にして諸の世間を求めず

(一) 增益云云　前品は序文にして此より正宗分なり。
(二) 心目　心に觀ずるとき現に目に見るが如きなり。
(三) 十方云云　已下なる胎藏の九方便と云ふ、中臺と八葉とを合する故に九なり。第一は作禮の方便眞言門なり。

常に樂つて堅固にて怯弱無く　自他の現法に成就を作せ
餘の天の無畏依に隨はず　此を具するを名けて良助伴と爲す
(一)增益守護清淨行品第二
彼成就の處所を作り已つて　毎日に先づ念慧に住し
法に依て寢息して初て起る時に　諸の無盡に障を爲す者を除け
是の夜に放逸より生ずる所の罪を　慇懃に還つて淨く皆悔除せよ
根を寂にし悲を具し利益の心を以て　無盡の衆生界を度せんと誓ふべし
法の如く澡浴し或は浴せずとも　應に身口意をして清淨ならしむべし
次に齋室空靜の處に於て　妙花等を散じて以て莊嚴し
隨て形像と勝妙典とを置き　誠心に十方の佛を思念し
(二)心目に現觀して諦かに明了なるべし　當に本尊の在す所の方に依て
誠を至し恭敬して一心に住し　五輪を地に投げて而も禮を作すべし
(三)十方の正等覺の　三世一切に三身を具し玉へるを歸命し
一切の大乘の法を歸命し　不退の菩提衆を歸命し

諸明眞實の言を歸命し　一切の諸の密印を歸命して
身口意の業を以て　慇懃に無量に恭敬し禮したてまつる
作禮方便の眞言に曰く
唵、南麽薩婆怛他蘗多、迦耶嚩吒質多、播娜鑁娜難迦嚕弭、
此の作禮の眞實の言に由て　即ち能く遍く十方の佛を禮したてまつる
(一)右の膝を地に著け爪掌を合せて　思惟して先の罪業を悔ることを說くべし
我無明に積集せらるるに由て　身口意業に衆罪を造れり
貪欲と恚と癡と心を覆ふが故に　佛と正法と賢聖僧と
父母と二師と善知識と　以及び無量の衆生との所に於て
無始生死流轉の中に　具に極重の無盡の罪を造れり
親たり(二)十方現在の佛に對し奉りて　悉く皆な懺悔して復作らじ
出罪方便の眞言に曰く
唵、薩婆播波薩怖吒、娜訶曩伐折囉也、莎嚩訶
十方三世の佛の　三種の常身と正法の藏と

(一)右の膝云云　第二出罪方便眞言門。

(二)十方云云　第三歸依方便眞言門。

勝願菩提の大心衆とに南無したてまつる　我れ今皆悉く正しく歸依せん
歸依方便の眞言に曰く
唵、薩婆勃馱菩提薩怛鑁、設囉赦蘗車弭、伐折囉達磨、頡唎
(一)我此身を淨めて諸垢を離れたると　及與び三世の身口意との
大海と刹塵との數に過ぎたるを　一切の諸の如來に奉獻したてまつる
施身方便の眞言に曰く
唵、薩婆怛他蘗多、布闍鉢囉跋嘌多曩夜怛忙難、涅嚩夜哆夜弭、薩婆怛他蘗多室柘
地底瑟咤哆、薩婆怛他蘗多若難謎阿味設都、
(二)淨菩提心の勝願の寶を　我今起發して群生を濟ふ
生苦等の集に纏ひ繞まれ　及與び無智にして身を害せらるるを
救攝し歸依して解脫せしむ　常に當に諸の含識を利益すべし
發菩提心方便の眞言に曰く
唵、菩提質多、母多播娜夜弭、
是の中の(三)增加の句に言く、「菩提心は一切の物を離れたり、謂く蘊と界と處と能執と

(一)我此身云云　第四施身方便眞言門。

(二)淨菩提云云　第五發菩提心方便眞言門。

(三)增加の句　眞言の外に別に置きたまふ故に餘の長行偈頌の如くにはあらず、當誦梵本とあれども未だ梵本傳らず。

所執とを捨てたるが故に、法に我あることなし、自身平等にして本來不生なること大空の自性の如し。佛世尊及び諸の菩薩の菩提心を發し、乃し菩提道場に至り玉へるが如く、我も亦是の如く菩提心を發す。

(一)十方無量の世界の中の　諸の正遍知の大海衆の
種種の善巧方便力と　及び諸の佛子の群生の爲に
諸のあらゆる所修の福業等とを　我今一切盡く隨喜す

(一)十方云云第六隨喜方便眞言門。

隨喜方便の眞言に曰く

唵、薩婆怛他蘖多、本嗜若囊、努暮捺那布闍迷伽參暮捺囉、薩巨囉拏三麽曳、㘑

(二)我今ま諸の如來と　菩提大心の救世者とを勤請す
唯願くは普く十方界に於て　恒に大雲を以て法雨を降し玉へ

(二)我今云云第七勤請方便眞言門。

勤請方便の眞言に曰く

唵、薩婆怛他蘖多、睇灑儞布闍迷伽娑慕捺囉、薩巨囉儞三麽曳、㘑

(三)願くは凡夫所住の處をして　速に衆苦の集むる所の身を捨てしめ
當に無垢虛に至ることを得て　清淨の法界身に安住すべし

(三)願くは云云第八奉請法身方便眞言門。

奉請法身方便の眞言に曰く

唵、薩婆怛他蘖多、捺睇灑多弭、盧婆薩怛嚩係多嗢他耶、達麽馱覩薩囉嗢嗢婆鞞覩

(一)修する所の一切の衆の善業　一切の衆生を利益するが故に
我今盡く皆正に迴向す　生死の苦を除いて菩提に至らん

(一)修する云々已下第九廻向方便眞言門。

廻向方便の眞言に曰く

唵、薩婆怛他蘖多、涅哩也怛囊布闍迷伽參慕捺囉、薩巨囉儞三麽曳、㘑

(二)復餘す所の諸の福事の　讀誦と經行と宴坐等を造すことは
身心をして遍く清淨ならしめんが爲なり　哀愍して自他を救攝すべし
心性は是の如く諸の垢を離る　身所應に隨つて以て安坐すべし
次に復三昧耶印を結ぶべし　所謂る三業の道を淨除するなり
應に知るべし密印の相は　諸の正遍知の說なり　當に定慧の手を合せて　二
空輪を並べ建つべし
遍く諸の支分に觸れて　眞實の語を誦持すべし

(二)復餘云云第十入佛三昧耶眞言門。

(三)入佛三昧耶の明に曰く

(三)入佛云云已下五箇の印明は自身を守護す、行者此印の加持に由て佛の三昧耶即ち菩提心に入ることを得る故に入佛三昧耶と云ふ。行者此の三昧耶を持せざれば一切眞言の法事を作すことを得ず。

南麽薩婆怛他蘖帝嚩、微滋嚩目契弊、唵阿三迷、哩嚩三迷、三麽曳、莎訶

纔に此の密印を結べは　能く如來の地を淨む　地波羅蜜滿じて　(一)三法道界を成す

所餘の諸の印等は　次第に經に說くが如し　眞言者當に知るべし　所作成就することを得

(二)次に法界生の　密慧の標幟を結べ　身口意を淨むるが故に　遍く其の身に轉ずべし

般若と三昧との手　俱に金剛に作して　二空を其の掌に在き　風輪を皆な正しく直くすべし

是の如きを法界　清淨の秘印と名く

法界生の眞言に曰く

南麽三曼多勃馱喃、達摩馱睹、薩嚩婆嚩句痕、

(三)法界の自性の如く　而も自身を觀せよ　或は眞實の言を以て　三轉して而も宣說すべし

(一)三法界云云　印と眞言と意密とを三法と云ふ、道界とは果なり、合して三法の果を成すといふ。

(二)次に法界生云云　第十一法界生眞言門。此法界生の加持に由つて佛家に生在す、故に法界生と云ふ。

(三)法界云云　第十二金剛薩埵眞言門、既に佛家に生在す。

當に法體に住して　無垢なること虛空の如しと見るべし　眞言印の威力　行人を加持するが故に

彼をして堅固ならしめんが爲に　自ら(一)金剛の身なりと觀ずべし　金剛智の印を結べ　止觀の手を相ひ背けて

地と水と火と風との輪　左右に互に相ひ持せよ　二空各の旋轉して　慧の掌の中に合せよ

是を名けて法輪と爲す　最勝吉祥の印なり　是の人當に久しからずして　救世者に同ずべし

眞言印の威力　成就者當に見るべし　常に寶輪を轉ずるが如く　而も大法輪を轉ずべし

金剛薩埵の眞言に曰く

南麽三曼多伐折羅赦、伐折羅咀麽句痕

此眞言を誦し已つて　當に(二)等引に住して　諦かに我が此身は　即ち是れ執金剛なりと觀ずべし

(一)金剛　金剛薩埵の身なり。

(二)等引　心を一境に住せしむる義なり。

無量の天魔等　諸の之れを見ることあるもの　金剛薩埵の如くす　疑惑の心を生ずること勿れ

(一)次に眞言印を以て　而も金剛甲を擐る　當に所被の服　體に遍くして焰光を生ずと觀ずべし

是を用ゐて身を嚴るが故に　諸魔の障を爲す者　及び餘の惡心の類　之を觀て咸く四に散ず

是の中の密印の相は　先づ(二)三補吒に作して　止觀の二風輪　火輪の上に糺ひ持す

二空自ら相ひ並べて　而も掌の中に在け　彼の眞言を誦し已つて　當に無垢の字を觀ずべし

(三)金剛甲冑の眞言に曰く

南麽三曼多伐折囉赧、唵、伐折羅迦囉遮、斛

(四)囉字の色は鮮白なり　空點を以て之れを嚴れ　彼の髻の明珠の如くして之を頂の上に置け

(一)次に眞言云云　第十三金剛甲冑眞言門。

(二)三補吒　虛心合掌なり。

(三)金剛甲冑　金剛薩埵の身を莊嚴せんが爲に金剛甲冑を說く。

(四)囉字　第十四囉字眞言門。

設ひ百劫の中に於て　積む所の衆の罪垢も　是に由て悉く除滅して　福慧皆な圓滿す

彼の眞言に曰く

南麽三曼多勃馱喃、覽

眞言は法界に同じ　(一)無量の衆罪を除く　久しからずして當に成就して　不退地に住すべし

一切の觸穢の處に　當に此の字門を加すべし　赤色にして威光を具せり　焰鬘遍く圍遶せり

(二)次に魔を降伏して　諸の大障を制せんが爲の故に　當に大護者　無能堪忍の明を念ずべし

無堪忍大護の明に曰く

南麽薩婆怛他蘗帝弊、薩婆佩也微蘗帝弊、微濕囉目契弊薩婆他、唅欠、囉吃灑摩訶沫禮、薩婆怛他蘗多奔扼也涅祖帝、斛斛咀囉、吒咀囉吒、阿鉢囉底訶諦、涉囉訶、纔に憶念するに由るが故に　諸の毗那也迦　惡形の羅刹等　彼れ一切馳散す

(一)無量の衆罪　自宗の本意は無明を怨敵と見て除くにはあらず、法界平等の觀を作すときは則ち無明自から除かる、法性と無明と同體なる故に。

(二)次に魔云云　第十五無堪忍大護眞言門。

(一)供養儀式品第三

ア是の如く正業をもて其の身を浄め　ア定に住して本(二)眞言の主を觀ずべし

イ眞言と印とを以て而もイ召請せよ　ウ先づ當さに三昧耶を示現すべし

眞言と相應して障者を除き　衆ては不動の慧刀の印を以てせよ

ウ稽首して閼伽水を獻め奉り　イ行者復眞言の座を獻れ

ア次に花香等を供養すべし　去垢するに亦無動尊を以てす

辟除作浄も皆是の如し　加持するに本眞言王を以てす

或は諸佛勝生の子　無量無數の衆圍繞せりと觀ずべし

右は攝頌竟ぬ　下に當に次第に分別して說くべし

現前に囉字を觀せよ　點を具して廣く嚴飾せり　謂く浄光焰鬘ありて　赫く

と朝日の暉りの如し

聲の眞實の義を念ずれば　能く一切の障を除き　三毒の垢を解脫す　諸法も

亦復然なり

先づ自ら心地を浄め　復道場の地を浄めて　悉く衆の過患を除くべし　其の

(一)最初に云云巳下風水金の三輪器界の觀を明かす、下位とは世界の最下虛空を云ふ、是れ即ち胎藏三部の觀なり。

(二)頗底水精に似て白色なり、須彌の四方を頗底迦色と云ふ、赤白合して赤き具の色なり。

相虛空の如し

金剛の所持の如く　此の地も亦是の如し　(二)最初に下位に於て　彼の風輪を

思惟せよ

訶字の安住する所なり　黑き光焰流布せよ

彼の眞言に曰く

南麼三曼多勃馱喃、唅

次の上に水輪を安け　其の色猶雪乳のごとし　嚩字の安住する所　(二)頗底と

月と電との光あり

彼眞言に曰く

南麼三曼多勃馱喃、鑁

復水輪の上に於て　金剛輪を觀作せよ　想うて本初の字を置け　四方にして

遍く黃色なり

彼の眞言に曰く

南麼三曼多勃馱喃、阿

(一)是の輪云云　是れより道場を莊嚴する樣を示し、第一に阿字の功德を說けり。

(二)百千の云云　是は諸尊の一一の座を觀ずるなり。

(一)是の輪は金剛の如く　大因陀羅と名く　光焰淨金色にして　普く皆な遍く
流出す
彼の中に於て導師　諸佛子を思惟せよ　水中に白蓮を觀ずべし　妙色にして
金剛の莖あり
八葉にして鬚蘂を具せり　衆寶自ら莊嚴せり　常に無量光を出す　(二)百千の
衆の蓮繞れり
其の上に復　大覺の師子座を觀想すべし　寶玉を以て校飾して　大宮殿の中
に在り
寶樹皆な行列して　遍く諸の幢と蓋と有り　珠曼等交絡して　妙寶衣を垂れ
懸けたり
香華雲と　及與び衆の寶雲とを周布し　普く雜華等を雨らして　繽紛として
以て地を嚴れり
諸韻所愛の聲をもて　而も諸の音樂を奏す　宮中に淨妙の　賢瓶と閼伽とを
想へ

(一)總持　慧の德に名く。

(二)妙法音　佛德を讚するなり。

(三)我が功德力　三力を明す、已上深秘の道場莊嚴を說く。

(四)次に當に云云　大日門を畫すなり。

寶樹王開き敷いて　照すに摩尼燈を以てす　三昧と(一)惣持との地に　自在の
綵女あり
佛の波羅蜜等と　菩提妙嚴との華あり　方便をもて衆伎を作し　(二)妙法音を
歌詠す
(三)我が功德力と　如來の加持力と　及以び法界の力とを以て　普く供養して
而も住す
虛空藏轉明妃に曰く
南麽薩婆怛他蘖帝驃、微濕縛目契弊、薩婆他、欠、嗢娜蘖帝薩巨囉係門、伽伽娜劒
莎訶(七は法なり多く誦すべし)
此に由て一切を持するに　眞實にして異りあることなし　金剛合掌をなせ
是れ則ち加持の印なり
一切の法は不生なり　自性本寂なるが故に　此の眞實を想念して　阿字を其
の中に置け
(四)次に當に阿字を轉じて　大日牟尼と成すべし　無盡の刹塵の衆　普く圓光

の内に現はる　光焔の輪を流出し　普く衆生界に至つて　性に隨つて
千界を増數と爲して　佛心も亦復然なり　閻浮淨金の色なるは　世間に應ず
開悟せしむ
身と語と一切に遍ずるが爲の故なり
跏趺して蓮の上に坐し　正受にして諸毒を離れ　身に絹穀の衣を被て　自然
に髮髻冠あり
(一)若し釋迦牟尼には　彼の中に婆字を想へ　復是の如き字を轉じて　而も能
仁尊と成す
勤勇は(二)袈裟衣にして　(三)四八の大人相あり
釋迦種子心に曰く
南麽三曼多勃馱喃、婆
字門轉して佛と成つて　亦諸の衆生を利すること　猶大日尊の如し　瑜伽者
觀察せよ

(一)若し釋迦釋迦門を畫すなり。
(二)袈裟衣　染衣といふこと。
(三)四八　三十二相をいふ。

一身と二身と　乃至無量の身と　同じく本體に入り　流出すること亦是の如し
佛の右の蓮の上に於て　當に本所尊を觀ずべし　左に執金剛と　勤勇の諸の
眷屬とを置け
前後の華臺の中に　廣大の菩薩衆あり　一生補處等の　衆生を饒益する者なり
右邊の華座の下は　眞言者の居る所なり　(一)若し妙吉祥を持せば　中に無我
字を置け
是の字轉じて身と成る　前に觀ずる所の如し
(二)文殊の種子心に曰く
南麽三曼多勃馱喃、瞞
若は觀世自在と　或は金剛薩埵と　慈氏と及び普賢と　地藏と除蓋障と
佛眼と幷に白處と　多利と毗俱知と　忙莽と商羯羅と　金輪と馬頭と
持明の男女使と　忿怒の諸の奉教と　其の樂欲する所に隨つて　前の法に依
て而も(三)轉せよ
心をして喜ばしめんが爲の故に　外の香と華と　燈明と閼伽水とを獻め奉れ

(一)若し云々　文殊門を畫すなり、次の中には八葉蓮臺、次の無我字とは梵文の瞞字にして文殊の種子眞言なり。
(二)文殊　今菩薩の中に文殊を出すことは今經の教主なるが故に。
(三)轉ぜよ　轉は轉用の義、前の法に依りて準じて轉じて用よと。

皆な本教に説くが如し

不動を以て去垢し　辟除して光顯ならしむべし　本法を以て自ら相加し　及び我が身を護持し

諸の方界等を結するに　或は降三世を以てす　召請すること本教の　用ゆる所の印と眞言との如し

及び此の普通印と　眞言王と相應すべし

聖者不動尊の眞言に曰く

南麽三曼多伐折羅赧、戰拏摩訶路灑儞、薩破吒也、斛怛羅迦、悍曼引當さに三遍を誦すべし

當に定慧の手を以て　皆な金剛拳に作して　正直に火風を舒べて　虛空は地水を持すべし

三昧の手を鞘と爲し　般若を以て刀と爲して　(一)慧刀を入住出して　皆な三昧の鞘に在け

是れ即ち無動尊の　密印の威儀なり　定の手を其の心に住して　慧の手を普く旋轉す

(一)慧刀云云　初め右の刀を左の鞘に入るゝは入なり、左の膝に置くは住なり、後に右の刀を抜き出すは出なり。

知るべし觸る所の物を　即ち名て去垢と爲す　此を以て而も左に旋らす　是に因て辟除を成す

若方界隅を結せば　皆隨つて右に轉ぜしめよ　餘す所の衆の事業の　惡を滅し諸障を淨むること

亦當に是の如く作すべし　類に隨つて而も相應す　次に眞言印を以て　而も衆聖を請召す

諸佛菩薩の說なり　本誓に依て而も來りたまふ

召請方便の眞言に曰く

南麽三曼多勃馱喃、阿薩婆怛羅鉢囉底訶諦、怛他蘗黨矩奢、菩提浙嚩耶鉢嚩布囉迦莎訶應に七遍を誦すべし。

歸命合掌を以て　固く金剛縛を結んで　當に智慧の手をして　直く彼の風輪を舒べ

俛て其の上節を屈せよ　故に號て鉤印と爲す　諸佛救世者　玆を以て一切の十地に安住する等の　大力の諸の菩薩と　及び餘の難調伏の　不善心の衆生

とを召き玉ふ

次に三昧耶を奉るには　具に眞言と印とを以てす　印相は前に說く　諸の三昧耶の敎の如し

三昧耶の眞言に曰く

南麽三曼多勃馱喃、阿三迷怛嚩三迷三麽曳莎訶（應さに三遍を誦すべし。）

是の如く方便を以て　正に三昧耶を示せば　即ち能く普く　一切の衆生類を增益す

當に悉地を成ずることを得て　速に無上の願を滿すべし　本眞言主　(一)諸明をして歡喜せしむるが故に

獻る所の閼伽水は　先づ已に具に嚴備せよ　(二)本眞言印を用て　如法に以て加持して

諸の善逝者に奉り　用て無垢の身を浴すべし　次に當に一切の　佛口所生の子を淨むべし

閼伽の眞言に曰く

(一)諸明　本尊をいふ。

(二)眞言云云　不動の印と眞言となり。

南麽三曼多勃馱喃、伽伽娜（キヤギナウ）三摩（サンマ）三摩（サンマ）、莎訶（ソハカ）（當さに二十五遍を誦して不動尊の印を以て之れを示すべし）

次に敷く所の座を奉れ、密印と眞言とを具せり、蓮華臺を結び作して、遍く一切處に置くべし

覺者の安坐して　最勝の菩提を證したまふ　是の如き處を得んが爲に　故に持して以て上獻す

如來座の眞言に曰く

南麽三曼多勃馱喃、阿（アク）

其の中の密印の相は　定慧の手相合せて　而も普く之れを舒べ散ずること猶し鈴（リヤウ）と鐸（タク）との形の如し

二空と地輪と　聚め合せて以て臺と爲し　水輪は稍相ひ遠けよ　是れ即ち蓮花の印なり

復次に當に　自身所生の障を辟除するには　大慧刀の印と　聖不動の眞言とを以てすべし

當に見るべし彼に同じく　最勝の金剛の焰ありて　一切の障を焚燒して　盡

く餘有ること無からしむと

智者當に轉じて　金剛薩埵の身と作るべし　眞言と印と相應して　遍く諸の支分に布すべし

金剛種子心に曰く

南麽三曼多勃馱喃鑁

此の眞實の義を念ずれば　諸法は言說を離る　印等を具するを以ての故に

即ち執金剛に同じ

當に知るべし彼の印相は　先づ三補吒を以て　火輪を中鋒と爲せ　端銳りて

自ら相合す

風輪を以て鉤と爲し　舒べ屈して其の傍らに置け　水輪は互に相交へて　而も掌の內に置け

金剛薩埵の眞言に曰く

南麽三曼多伐折囉赧、戰拏麽訶路灑赧、斛

或は三昧の手を用て　半金剛の印を作し　或は餘の契經に　所說の軌儀を以

てせよ

次に當に身に周遍して　金剛の鎧を被服すべし　身と語との密印は　前に已に法に依て說く

佉字と及び點とを以て　而も頂上に置て　此の眞言を思惟せよ　諸法は虛空の如し

南麽三曼多勃馱喃、欠

應に先づ此の字門に住して、然る後に金剛薩埵の身と作るべし

次に應に一心に　諸魔を摧伏する印を作すべし　智者應に普く轉じて　眞語と共に相應すべし

能く極猛利の　諸の惡心ある者を除く　當に此の地に遍じて　金剛の熾なる焰光あり と見るべし

降伏魔の眞言に曰く

南麽三曼多勃馱喃、摩訶沫羅嚩喃、捺奢嚩路嗢婆吠、摩訶昧但囉也毗庾嗢蘖底、莎訶

當に智慧の手を以て　而も金剛拳に作し　直に風輪を舒べ　白毫の際に加へて

毗俱知の形の如し　是れ即ち彼の標幟なり　此印を大印と名く　之を念ずれば衆魔を除く

纔に是の法を結ぶが故に　無量の天魔の軍　及び餘の障を爲す者　必定して皆な退き散ず

次に難堪忍の　密印と及び眞言とを用て　而も用て周界を結すれば　威猛にして能く覩るもの無し

無能堪忍の眞言に曰く

南麽三曼多勃馱喃、三莽多努蘖帝、滿馱也徒瞞、摩訶三摩耶嚩閣帝、娑麽囉嬭、阿鉢囉嚩訶諦、馱迦馱迦、捨囉捨囉、滿馱滿馱、捺奢儞瞋、薩婆怛他蘖多努壤帝、鉢囉嚩羅達摩臘馱徵若曳、薄伽嚩嚩、微矩嚩微矩麗、麗魯補嚩微矩麗、莎訶當さに三遍を誦すべし。

或は第二の略說を以てす。眞言に曰く

南麽三曼多勃馱喃、麗魯補履微矩麗、莎訶當さに七遍を誦すべし。

先づ三補吒を以て　風輪を掌に在き　二空と及び地輪と　內に屈すること猶鉤の如し

火輪を合して峯となし　其の水輪を開き散ず　旋轉して十方を指す　是を結大界と名く

用て十方の國を持して　能く悉く堅住せしむ　是の故に三世の事　悉く能く普く之れを護る

或は不動尊を以て　一切の事を成辨す　身處を護して淨かならしめ　諸の方界等を結すべし

不動尊の種子心に曰く

南麽三曼多伐折羅赧悍

次に先づ恭敬して禮し　復た闍伽を獻ず　經說の如く香等を以て　法に依て供養を修すべし

復聖不動を以て　此の衆物を加持し　彼の慧刀の印を結んで　普く皆遍く之れに灑げ

是の諸の香華等の所　所辨の供養の具　數〻密印を以て灑ぎ　復頻りに眞言を誦すべし

(一)本眞言の眞言なり。香等

(二)名を稱云云香等の名なり。

(三)眞言行人恒に勝進して休息ぜざるは燒香の義なり。

各の(二)本眞言と　及び自ら持する所の明を說け　應に是の如く作し已つて
(二)名を稱して而も奉獻すべし
一切に先づ遍く　清淨の法界心を置け　所謂る囉字門なり　前に開示する所
の如し
稱する所の名の中の塗香の眞言に曰く
南麽三曼多勃馱喃、微輸馱儰杜嗢婆嚩、莎訶當さに三遍を誦すべし。
次に華の眞言を說いて曰く
南麽三曼多勃馱喃、摩訶妹哩囉也、毗庾嗢蘖帝、莎訶當さに三遍を誦すべし。
次に焚香の眞言を說いて曰く
南麽三曼多勃馱喃、達摩馱睹弩蘖帝、莎訶當さに三遍を誦すべし。
次に(三)然燈の眞言を說いて曰く
南麽三曼多勃馱喃、怛他揭多唎旨、薩囉囉傳嚩婆娑娜、伽伽猱那哩耶莎訶當さに三遍を誦すべし
次に諸食の眞言を說いて曰く
南麽三曼多勃馱喃、阿囉囉迦囉囉、沫隣捺泥、摩訶沫履、莎訶當さに三遍を誦すべし。

及び餘の供養の具の　獻め奉るべき所の者は　此の法則に依隨して　淨むる
に無動尊を以てすべし
當に定と慧との掌を合して　五輪互に相叉ふべし　是れ則ち衆物を持する
普通供養の印なり
眞言具慧者　衆の聖尊を敬養し　復心の儀式を作すこと　淸淨にして極めて
嚴麗なるべし
獻る所皆な充滿して　平等なること法界の如し　此の方より餘刹に及んで
普く諸趣の中に入り
諸佛菩薩の　福德に依て而も生起する　幢幡諸の瓔蓋と　廣大の妙樓閣と
及び天の寶樹王と　遍く有ゆる諸の資具　衆の香と華との雲等　際無きこと
猶虛空のごとし
各の諸の供物を雨らし　供養して佛事を成じ　思惟して一切の　諸物と及び
菩薩とに奉れ
虛空藏の明　普通供養の印を以て　三たび轉じて加持を作せば　願ふ所皆成

就す

持(一)虛空藏の明の增加の句に云く

我が功德力と　及び法界力とに依て　一切の時に獲易く　廣多にして復淸淨なり

大供莊嚴の雲　一切如來と　及び諸の菩薩衆との　海會に依て而も流出す

一切の諸佛と　菩薩との加持を以ての故に　法の如く修する所の事に　諸の

功德を積集し

迴向して悉地を成ず　諸の衆生を利せんが爲に　是の如きの心を以て說いて

明行淸淨なることを願ふべし

諸障鎭除することを得て　功德を自ら圓滿す　時に隨つて正行を修せ　是は

即ち定れる期無し

若し諸の眞言の人　此の生に悉地を求めば　先づ法に依て持誦して　但(二)心

の供養を作せ

爲す所既に終り竟て　次に一月を經て　具に(三)外の儀軌を以て　而も眞言を

受持すべし

(一) 虛空藏　虛空とは本不生の理、藏とは能出能藏、增加の句は能の義を顯はす。

(二) 心の供養　運心理供養なり。

(三) 外の儀軌　事相の供養なり。

又持金剛　殊勝の諷詠を以て　佛菩薩とを供養して　當に速に成就すること

を得べし

執金剛の(一)阿利沙の偈に曰く

(一)無等にして動ずる所なく　平等にして堅固なる法なり　流轉の者を悲愍して

衆の苦患を攘ひ奪ふ

普く能く悉地の　一切の諸の功德を授け　垢を離れて遷變せざる　無比勝願

の法なり

(二)虛空に等同にして　彼喩と爲すべからず　隙塵の千萬分にして　尙ほ其の

一に及はず

恒に衆生界に於て　果を成就する願の中に　悉地に於て盡ることなし　故に

譬喩を離れたり

(四)常に垢翳無き悲は　精進に依て生ず　願に隨つて悉地を成ずること　法爾

にして能く蔽すもの無し

衆生の義利を作すこと　及ぶ所に普く周遍す　照明にして恒に斷へず　哀愍

(一) 阿利沙　阿利沙は聖主と翻す即ち大日如來の功德を讚歎するなり。

(二) 無等　已下五偈は大日如來の五智の功德を讚歎す、其の一は已下東方發心門。

(三) 虛空　已下南方修心門。

(四) 常に云云　已下西方菩提門。

(一)障を離云云　已下北方涅槃門。

(二)唯本誓　已下中央方便門、此偈は大日如來の五轉即ち五智の功德を讃歎するなり。

(三)佛化の雲　佛の普現色身十方に遍すること雲の如しと。

廣大の身なり

(一)障を離れて罣礙無し　悲を行ずる行者なり　周く三世の中に流れて　施與して願を成就す

無量の量に於て　究竟の處に至らしむ　奇哉此の妙法　善逝の到りたまふ所なり

(二)唯本誓を越えず　我に無上の果を授けたまふ　若し此の願を施す者は　恒に殊勝の處に至る

廣く世間に及ぼして　能く勝希願を滿ず　一切の趣に染せず　三界に所依無し

右此の偈は即ち眞言に同じ　當に梵本を誦すべし

是の如きの偈讃を誦持し已つて　至誠にして世の導師を歸命したてまつる

唯願くは衆聖我に　有情慈濟の悉地を授け與へたまへと

復次に他を利せんと欲ふが爲の故に　(三)佛化の雲も一切に遍ずと觀ずべし

我が修する所の福と佛の加持と　普賢の自體法界力とを以て

蓮華臺に坐して十方に往いて　性欲に隨順して衆生を導かん

(一)內外の障　內は煩惱、外は災難なり。

(二)持誦法則云云　供養の次に持誦するが故に此品來るなり。

(三)四種の靜慮　本尊を觀じ、次に本尊の心中に月輪を現じ、次に其月輪の中に本尊の眞言の字を現じ、次に次第に念誦す、此れを四種と云ふ。靜慮は定なり。

諸の如來の本誓願に依て　一切の(一)內外の障を淨め除き

出世の衆の資具を開き現はして　其の信解の如くに之れを充滿せん

我が功德の莊嚴する所と　及び淨法界の中より出生すると

如來の神力の加持し玉ふとを以ての故に　衆生の諸の義利を成就し

諸佛の庫藏を備足し　無盡の寶を出すこと不思議なり

三たび虛空藏の轉明を誦せよ　及び密印の相は前に說くが如し

此の眞言乘の諸の學者　是の故に當に諦信の心を生ずべし

一切の導師の宣說し玉ふ所なり　誹謗して疑悔を生ずべからず

(二)持誦法則品第四

是の如く法を具して　供養し已つて無盡の衆生を利する心を起して

諸佛と聖天等を稽首し　相應の座に住して三昧に入れ

(三)四種の靜慮の軌儀を以て　能く內心をして喜樂を生ぜしむ

眞實の義を以て加持するが故に　當に眞言を以て等引を成ずることを得べし

若し眞言の念誦を作さん時には　今當に次に彼の方便を說くべし

智者先に開示する所の如く　現前に而も本所尊を觀ぜよ
其の心月の圓明の中に於て　悉く皆な眞言の字を照見し
即ち次第に而も授持すべし　乃至心をして淨めて垢無からしむべし
數と及び時分の相現ずると等は　經教に依隨し已つて滿足すべし
(一)有相の義利を志求するに　眞言の悉地意に隨つて成ぜん
是を世間の具相の行と名く　(二)四支の禪門は復殊異なり
行者決定の意を生ずべし　先づ當に一緣にして本尊を觀ずべし
彼の眞言と秘密印とを持して　自ら瑜伽の本尊の像となり
其の色相威儀等の如くして　我が身無二にして行亦同なり
(三)本地と相應する身に住するに由て　(四)少福の者なりと雖も亦成就す
(五)瑜伽の勝義品の中に說けり　次に明の字門を轉變すべし
而も觀じて本尊の形と作るを以て　身秘の標幟を逮見す
契經の略說に二の相あり　正遍知の觀は最も先と爲す
次に菩薩と聖天との觀に及びては　妙吉祥尊を上首と爲す

(一)有相　是は遍數を定め時限を究めて持誦して本尊光を放つるなり。(二)四支云云　上に明す處の四種の靜慮なり。(三)本地　本性なり。(四)少福　暫時の小供なりともと云ふ意なり。(五)瑜伽云云　金剛頂大本の中に在る品號なり。

亦彼の乘の位に依て而も轉ず　相應の印と及び眞言とを以てせよ
文殊の種子は所謂る滿字門なり　已に前の品の中に於て說く
本尊の三昧と相應する者は　(一)心を以て心に置て種子と爲すべし
彼れ應に是の如く自ら觀察して　(二)清淨の菩提心に安住すべし
衆に知識せられたるの形像は　彼の行に隨順して異なることなかれ
當に知るべし聖者妙音尊は　身相猶し鬱金色の如くにして
頂に童眞の五髻の相を現せり　左には伐折羅を青蓮に在き
智慧の手を以て施無畏にす　或は金剛與願の印を作せ
文殊師利の眞言に曰く
南麽三曼多勃馱喃、係係具摩囉迦、微目吃帖鉢他悉體多、薩麽囉薩麽囉、鉢囉帖然
涉訶

(一)心を以て云云　上の心は本尊の種子、下の心は行者の肉心。(二)菩提心　眞言なり。(三)定慧云云　合掌して二火指二水指を纏ひ持す、二風を二空の上に置く。

(三)定慧の手を合せて虛心掌にして　火輪を交へ結で水輪を持し
二風を環の如く屈して大空に加ふ　其の相鉤の如くして密印を成ず
而も用て逼く自の支分に置け　爾して乃ち衆の事業を修行す

當に知るべし諸佛と菩薩等の　字を轉ずる瑜伽も亦復然なり
或は餘の經に說ける眞言と印と　是の如く之れを用ゆるも違背せざるなり
或は彼の說の異の儀軌に依り　或は普通の三密門を以てす
若能く解了して旋轉する者は　諸有の所作皆成就す
普通種子心に曰く
南麼三曼多勃馱喃迦
契經の所說の迦字門は　一切諸法は造作無し
當に是の如きの理の光明を以て　而も此の聲の眞實の義を觀すべし
(一)眞陀摩尼寶王の印を以てすべし　定慧の五輪互に相ひ交ふ
金剛合掌の標式なり　普く一切の菩薩の法に通ず
一切諸菩薩の眞言に曰く
南麼三曼多勃馱喃、薩婆他、微沫底、微枳羅儞、達摩馱睹涅闍多、參參訶、涉訶
(二)佉字は衆色を含む　大空點を增加せり　前に宣說する所の如し　之れを頂上に置け

(一)眞陀摩尼　金剛合掌を深く合せて指の峰を光明と觀す、是れ如意寶の印なり。

(二)佉字云云　次の上の眞言に南麼三曼茶勃陀南佉（キャン）と入れて誦するなり。

當に虛空に等しきことを得べし　諸法を說くことも亦然なり　復其の首の內に
於て(一)本初の字を想念す　阿字なり。本初
純白の點を以て嚴飾せり　最勝の百明の心なり　眼界は猶し明燈の如し　大
空無垢の字あり
本尊の位に住せば　正覺當に現前すべし　乃至諦かに明了にして　應當に意
の如く見るべし
又彼の(二)心處の　圓滿の淨月輪に　阿字門を炳現して　遍く金剛の色を作す
を觀ぜよ
聲の眞實の義を說かば　諸法本より無生なり　中に於て正しく觀察すべし
皆此の心より起る
聲字は花鬘の如し　煇焰自ら圍遶せり　其の光り普く明淨にして　能く無明
の害を破す
迦字を以て首と爲し　或は復餘の字門も　皆當に是の法を修すべし　念ずる
に聲の眞實を以てす

(一)圓滿云云　蓮華の上月輪を觀ず是れ胎藏なり。

(一)單字云々　單字は種子、句因は三字以上をいふ。

(二)意支　意に依りて觀ずる故なり心外の事を簡ふが故に意支といふ、支には心なし。

(三)懈極　觀念の分別を忘れて言亡慮絶の處なり。

或は持する所の眞言　環列して圓明に在り　(四)單字と句因と　息に隨つて而も出入すべし

或は(二)意支の法を修め　理に應じて等引の如くし　緣念して悉地を成ずるに　普く衆生を利するの心を以てす

方に則ち持誦を作して　(三)懈極せば然して後に已むべし　或は眞言の字を以て心月の中に運布し

其の深密の意に隨つて　聲の眞實を思念す　是の如く受持する者を　復一の方便と爲す

諸の福聚を修することあるもの　諸の善根を成就せんに　方に意支の法を習ふべし　定れる時分あること無し

若し現法の　上中下の悉地を樂求せば　應に斯の方便を以て　先づ心の受持を作すべし

正覺の諸の世尊の　說き玉ふ所の法是の如し　或は香と華と等を奉て　力に隨つて供養を修すべし

(一)罪障云云　罪障を除けば則ち悉地は自ら成ずるが故に。

是の中の先持誦の法に、略して二種あり。一には時に依るが故に、二には相に依るが故なり。時は謂く、期する所の數滿ち、及び定る時の日月を限る等なり。相は謂く佛塔圖像より、光と焰と音聲と等を出生するなり。當に知るべし、是れは眞言行者の(一)罪障淨除の相なり。彼の經に說く所の如し。先づ作意し念誦し已て、復持して一落叉に滿つ、此れより第二月を經て、則ち具支の方便を修すべし。然して後に其の本願に隨つて成就の法を作せ、若し障あらば、先づ現相門に依て心意を以て持誦して、然して後に第二の月に於て、具支を以て供養すべし。應に是の如く知るべし。

復樂つて　如來の三密門を修習して　一月を經る者の爲に　次に彼の方便を說く

行者若し　大毗盧遮那の　正覺の眞言と印とを持誦せば　當に是の如きの法に依るべし

大日如來の種子に曰く

南麼三曼多勃馱喃、阿

阿字門は所謂る一切法本不生の故なり、已に前に說くが如し

是の中の身密印は　正覺の白毫の相なり　慧の手を金剛拳にして　而も眉間に在け

如來毫相の眞言に曰く

南麽三曼多勃馱喃阿痕若(アカンジャク)

前の如くに(一)阿字を轉じて　而も大日尊と成せ　法力に持せらるるが故に

自身と異ること無し

本尊の瑜伽に住して　加するに五支の字を以つてす　(二)下體と及び齋の上と

心と頂と眉間となり

三摩呬多(サンマキタ)に於て　(三)運想して而も安立すべし　是の法に依て住するを以て

即ち牟尼尊に同じ

阿字(アジ)は遍く金色なり　用て金剛輪と作して　下體を加持す　說て瑜伽の座と名く

鑁字(バンジ)は素月の光の如くにして　霧聚の中に在り　自の齋の上を加持す　是を大悲の水と名く

(一)阿字云云　阿ヹ𑖀𑖰𑖀𑖰なり、ヹ𑖀𑖰の四字は𑖀字の轉成なるが故に。
(二)下體　腰の中なり。
(三)運想　以下は五字を自身に布するなり。

囕字(ランシ)は初日の暉の如くにして　形赤にして三角に在り　本心の位を加持す

是を智火光と名く

唅字(ウンジ)は劫灰の焰の如くして　黑色にして風輪に在り　白毫の際を加持す　說て自在力と名く

佉字(キャジ)と空點とは　一切の色を成ずと想ひ　加持して頂の上に在く　故に名て大空と爲す

此の五種の眞言心は(一)第二品の中に已に說けり。又此の五の偈は傳度者の頗る經意を以て足して文句をして周備せしむるなり

五字を以て身を嚴れば　威德具さに成就す　熾然たる大慧の炬(ともしび)　衆の罪業を滅し除く

天魔軍衆等と　及び餘の障を爲す者　當に是の如きの人を見るべし　赫奕たること金剛に同うすべし

又首の中に於て　百光遍照王を置くべし　無垢眼を安立して　猶し燈明の顯照するが如し

前の如く瑜伽に住して　加持すること亦是の如し　智者自體を觀ずること

(一)第二品の中に在り、第三品の聲文の光明聲と共に聲を引く如しと。

(二)聲鬘云云　種子の字を中間に置き、餘の字は之れを周匝し圍繞すと。

如來の身に等同にして　心月の圓明の處に　(二)聲鬘ともに相應し　字字間斷すること無くして　猶韻の鈴鐸の如くせよ

正等覺の眞言　取に隨つて而も受持して　當に此の方便を以て　速に悉地を成ずることを得べし

復次に若し　釋迦牟尼尊を觀念せば　用ゐる所の明の字門を　我今次に宣說せん

釋迦の種子は所謂る婆字門なり、已に前の品の中に於て說けり

是の中の聲の實義は　所謂る諸の觀を離れたり　彼の佛身の密印は　如來の鉢等を以てす

當に智慧の手を用て　三昧の掌に加ふべし　正受の儀式なり　而も齋輪に在け

釋迦牟尼佛の眞言に曰く

南麽三曼多勃默喃、薩婆吃麗奢喹素捺那、薩婆達摩嚩始多鉢囉鉢多、伽伽娜三摩三摩、莎訶

是の如く或は餘の等正覺の密印と眞言とは、各の本經の用ゆる所に依て、亦當に前の方便の如く、字門を以て觀じて、轉じて本尊の身と作し、瑜伽の法に住して種子を運布し、然して後に所受の眞言を持誦すべし。若し此の如來の行に依る者は、當に大悲胎藏生曼荼羅王に於て、阿闍梨灌頂を得て、乃ち具足して修行すべし、但し持明灌頂を得る者の堪ふる所に非ざるなり。其の四支の禪門の方便次第は、設ひ餘經の中に說く所の儀軌なりとも、虧き缺くる所あらば、若し此法を加へて之を修せば、諸過を離ることを得べし、本尊歡喜し玉ふを以ての故に、其威勢を增し功德隨つて生ず、又持誦することを畢已つて輙ち本法を以て而も之を護持すべし。餘經に說かざる者ありと雖、亦當に此の意を通用して、修行人をして、速に成就を得せしむべし。

復次に本尊の住し玉ふ所の　曼荼羅位の儀式

(一)彼の形色の如く壇も亦然なり　此の瑜伽に依て疾く成就す

當に知るべし悉地に三種あり　寂灾と增益と降伏との心なり

事業を分別するに凡そ(二)四分あり　其の物類に隨つて用ゆべき所なり

(一)彼の形色云云　本尊の形色なり、四種法に依て色異る故に。

(二)四分　已上の三種と及び降伏とを敬愛を開くなり。

純素と黄と赤と深玄との色なり　圓と方と三角と蓮花との壇なり

面を北にするは勝方なり蓮坐に住す　慄怕の心を以てせよ寂灮の事なり

面を東にするは初方なり吉祥の坐にす　悅樂の容にせよ增益の事なり

面を西にするは(一)後方なり賢坐に在り　喜と怒と與に俱に攝召の事なり

面を南にするは下方なり蹲踞等にす　忿怒の像にするは降伏の事なり

若しは秘密の標幟と　性と位と形と色と及び威儀とを知るべし

華と香と等を奉つることは所應に隨ふべし　皆な當さに是の如く廣く分別すべし

障を淨め福を增し圓滿する等　處を捨てて遠く遊び摧害する等なり

眞言の初に唵字を以てし　後に莎訶を加するは寂灮の(二)用なり

若し眞言の初に唵字を以てし　後に(ウムホツ)斛發を加するは召攝の用なり

初後に納(ナウマ)麼あるは增益の用なり　初後に斛發あるは降伏の用なり

斛の字發の字は(三)三處に通ず　其の名號を增すことは中間に在り

是の如く眞言の相を分別して　智者當に悉く知解すべし

(一)後方　東の初方に對して西なり後方と云ふ、又北の勝方に對して南なり下方と云ふ、次の賢座とは蹲り坐して雙の踵跟なり身に著て後分を地に至らしむるを云ふ。

(二)用なり　其眞言の力用なり。

(三)三處云云　寂災と增益と降伏とを三處と云ふ。

(一)眞言事業品　來意は前品の中に法則持誦に依るは必ず眞言の事業ある故に此の品來るなり。

(二)前の事業云云　不動の印明を以て加持し又心中に𑖭字などを觀て金剛薩埵と成る。

(三)大住　阿字本不生際なり。

(一)眞言事業品第五

爾の時に眞言行者、其の應き所に隨つて法の如く持誦し已つて、復當に(一)前の事業の如く而も自ら加持して金剛薩埵の身と作り、佛と菩薩衆との無量の功德を思惟し、無盡の衆生界に於て大悲心を興し、其所有の資具に隨つて而も供養を修すべし、供養し已つて又當に一心に合掌して、金剛の諷誦及び餘の微妙の言辭を以て、如來の眞實の功德を稱歎し奉るべし、次に造る所の衆の善を持て廻向し發願して、是の如きの言を作すべし、大覺世尊の證知し解了し積集し玉へる所の功德を以て、無上菩提に廻向し玉ふが如く我れも今亦復是の如く所有の福聚を法界の衆生に與へ、之れを共にして咸く生死の海を度つて遍知の道を成じ、自利利他の法皆滿足し如來の(二)大住に依て而も住せしめん。獨り己が身の爲の故に菩提を求むるに非ざるなり。乃至生死に往返して諸の衆生の同く一切種智を得んを剏りしより此來、常に當に福德と智慧とを修し集めて餘業を造らざるべし。願くは我等第一安樂に到ることを得ん、求むる所の悉地諸の障礙を離れて、一切を圓滿せんが故にと復更に思惟すべし。我をして速に當に若は內若は外の種種の淸淨の妙寶を具足して、而も自ら莊嚴し相續して、無間に普く皆流出

せしむべし。是の因緣を以ての故に、能く一切衆生の所有の希願を滿す。

右略して說くこと是の如し、若し廣く修せん者は、當に普賢行願及び餘の大乘修多羅（ダイジョウシュタラ）に說く所の如くすべし。決定の意を以て而も之れを稱述すべし、或は云ふべし諸佛と菩薩との自ら證知して大悲願を興し玉ふ所の如く、我も亦是の如く願を發すなりと

次に當に闍伽を獻め奉るべし、歸命合掌を作して之を頂の上に置いて、諸佛と菩薩との眞實の功德を思惟し、誠を至して禮を作し、而も偈を說て言へ、

諸有の永く一切の過を離れ　無量の功德身を莊嚴し
一向に衆生を饒益することある者を　我今まさに悉く皆歸命して禮したてまつる

次に當に衆聖に啓白して是の偈を說いて言ふべし

現前の諸の如來と　救世の諸の菩薩と　大乘の敎を斷せずして　殊勝の位に
到る者
唯し願くは聖天衆　決定して我を證知し玉へ　(一)各の當に所安に隨つて　後
に復哀みを垂れて趣むき玉ふべしと

次に當に三昧耶の眞言と密印とを以て頂の上に於て、之れを解いて而も是の念を生ず

(一)各の當に云云　向きには本不生より來り玉ふ故に、今亦本不生に還りたまふと、爾らば本不生は外にあるかと云ふの難あり、不來にして去來、不去にして去の故にと。

べし、諸の有ゆる結護加持（ケッゴカジ）皆解脫（ミナグダツ）せしむ、此の方便を以ての故に、先に請じ奉る所の諸尊を、各の所住に還したてまつる、無等の大誓の爲に留め止むる所にあらざるなりと、復(一)法界の本性を用て自體を加持し、淨菩提心を思惟して而も金剛薩埵の身に住す、是の中の明と印とは第二品の中に已に說きつ、若し念誦し竟らば此の(二)三印を以て身を持すべし、所有の眞言行門終り畢ぬれば法則皆悉く圓滿す、又應さに方便の如く法界の字を觀じて、以て頂相と爲し金剛甲冑を被服すべし。斯の秘密の莊嚴に由るが故に、即ち金剛の如き自性を得、能く之を殂壞する者無し、諸（そよ）の其の音聲を聞き、或は見、或は觸るること有らば、皆必定して阿耨多羅三藐三菩提（アノクダラサンミヤクサンボダイ）に於て、一切の功德皆悉く成就す、大日世尊と等うして、異ることあることなきなり。

(三)次に復增上心を起して殊勝の事業を修行し、淸淨の處に於て嚴るに香華を以てし、先づ自身をして觀音菩薩と作さしめて、或は如來の自性に住して、前の方便に依て眞言と密印とを以て加持し、然して後に法施の心を以て、大乘方廣經典を讀誦し、或は心を以て誦して、而も諸天神等を請じて、之れを聽受せしむべし。說く所の偈に言ふが如し、

(一)法界云云　梵文の覽字なり。
(二)三印　入佛と法界と生薩埵となり。
(三)次に復云云　已下は道場を出て後の事業を明す。

(一)本性云云　本性加持なり。

金剛頂經に說く　觀世蓮華眼は　即ち一切の佛に同し　無盡莊嚴の身なり
或は世の導師の　諸法に自在なる者を以て　隨つて一の名號を取りて　(一)本
性の加持を作せ
觀自在の種子心に曰く
南麽三曼多勃馱喃、娑　音聲の流出する所に　當に是の如きの
字門の眞實の義は　諸法に染著無し
觀を作すべし
此の身中の密相は　所謂る蓮華の印なり　前の敷座を奉りしが如し　我れ已
に分別して說く
次に觀自在の眞言を說いて曰く
南麽三曼多勃馱喃、薩縛怛他蘖多縛路吉多、羯魯拏麽也、囉囉囉斛若、莎訶
前の法界心の字を以て之れを置いて頂に在らしむべし。又此の眞言と密印とを用て相
加して力の堪ふる所に隨つて經法を讀誦すべし。或は制底曼荼羅等を造り、爲す所已
に畢つて次に座より起つて、和敬の相を以て應に諸の人事を接すべし。又身輪を支持す

(一)次に摶食手を以て食を丸めたるをいふ。
(二)又隨喜云云　此に四分あり、一には本尊に供養し、二には行者、三には同學に食せしめ、四には飢食を濟ふ。
(三)增減　減は同文故來にして只其の心を增すといふことなり。
(四)法界心云云　覽字を以て不淨を燒き淨む。
(五)事業金剛　金剛薩埵をいふ。

ることを得んが爲の故に、次に乞食を行ず。或は壇越の請、或は僧中に得る所なり、當に
魚肉と薰菜と、及び本尊と諸佛とを供養せるの餘り、乃至種種の殘宿の不淨なるを離る
べし。諸酒と木果等との藥の、以て人を醉はすべきもの、皆飲み噉ふべからず、(一)次に
摶食を奉げて用て本尊に獻る。(二)又隨喜の食法を作せ、若し故らに餘りあらば更に少
分を出すべし、飢乏乞求を濟けんが爲の故なり。當に是の心を生ずべし、我れ身器を
任持して、安穩道を行ぜんが爲に、是の段食を受く、車の鑣に、膏し敗傷せずして所
至に到ることあらしむるが如し。滋き味を以ての故に其の心を(三)增減し、及び悅澤嚴身
の想を生ずべからず、然して後に(四)法界心の字を觀じて、遍く諸食を淨め、(五)事業金
剛を以て自身を加持すべし、是の中の種子は鑁字の眞言に說く所の如し、復た施十力
明八遍を誦して、方に乃ち之れを食すべし、此の明を說いて曰く、
南麽薩縛物馱菩提薩埵喃、唵麽蘭捺泥帝孺忘栗寄、莎訶
是の如く先成就の本尊瑜伽に住して、飯食し訖已つて、餘す所の觸食は、成辨諸事の
眞言心を以て、食ふべき所の者に供養す、當に不空威怒增加聖不動の眞言を用ゆべし
當に一遍を誦すれば受者歡喜して、常に行人に隨つて而も之を護念すべし、彼の眞言

に曰く、

南麽三曼多伐折囉赧、怛羅吒阿謨伽、戰拏摩訶路灑儞、莎破吐野弭、怛囉麽野、怛囉麽野、弭、怛囉吒、悍曼、

彼れ食し竟つて休息すること少時にして、復當に諸佛を禮拜し衆罪を懺悔すべし、淨心の爲の故に是の如く常の業を修すべし、乃至前に依て經典を讀誦し、恒に是に依て住すべし。後日の分に於ても、亦復是の如し、初夜後夜には大乘を思惟して間絶を得ることなかれ、中夜の分に至つて、事業金剛を以て前の如く金剛の甲を被て、一切の諸佛と大菩薩と等を敬禮し、次に當に運心して、如法に供養して、而も是の念を作すべし、我れ一切衆生の爲に大事の因緣を志求するが故に、應當に是の身を愛護して少時安み寢べし、睡眠の樂に貪著せんが爲には非ず、先づ當に身の威儀を正しくして、二足を重累ねて(一)右脅にて、而も臥すべし、若し支體疲懈せば意に隨つて轉側するに咎なし、速に寤めしめんが爲に、常に當に意を係けて、(二)明に在くべし、又復床の上に偃に臥すべからず、次に餘の日に於て亦是の如く、之れを行ずべし、持眞言者法則を虧ずして無間に勤修するを以ての故に、眞言門に菩薩の行を修するの名號を得るなり(三)若し數

(一) 右脅寢る時は定門なる故に右は智門、左は定門の故に動轉靜むる義なり、臨終の時は此の如し。

(二) 明是れ本尊の種子の字なり睡眠せんとする時、出入の息に本尊の種子の字を和す、之に依て睡眠も亦本尊の三昧にして眠覺も佛會を離れざるなり。

(三) 數と時と云云、數は念誦の遍數、時は持誦の月、相現は煙と火焰と火焰との三品悉地の相なり。

と時と相現と等の、持誦の法の中に前の方便を作し、乃至具に勝業を修せんに、猶成就せずんば、應に自ら警悟して倍精進を加ふべし、下劣の相を生じて、而も是の法は我が堪ふる所に非ずと言ふことを得ること勿れ、是の如く其の志力を展して、自ら利し他を利すべし、常に空しく過さざれ。行者勤誠にして、休息せざるを以ての故に、衆聖玄かに其の心を照らして、則ち威神の建立を蒙つて諸の障を離るることを得。是の中に二事あり捨離すべからず、謂く諸佛と菩薩とを捨てざると、及び無盡の衆生を饒益する心となり。恒に一切智の願に於て心傾動せざれば、此の因緣を以て必定して隨類の悉地を成ずることを得るなり。

常に內法に依て而も澡浴して　外淨の法に執著すべからず
觸食等に於て疑悔を懷くべし　是の如きは皆爲すべからざる所なり
若し是の身を任持せんが爲の故に　時に隨つて盥沐して諸の垢を除かば
河流等に於て法敎の如くして　眞言と印と共に相應せよ
法界心を以て諸の水を淨め　隨つて不動と降三世とを用ゆ
眞言と密印とを以て(一)方等を護り　本尊の自性觀に住すべし

(一) 方等　方隅を結界するなり。

復當に三轉して淨土を持して　恒に一心を以て正しく思惟すべし
聖不動の眞言等を念じて　智者默然として應に澡浴すべし
淨法界心と及び不動尊の種子と刀印とは皆前に說くが如し
降三世の種子心に曰く
南麽三曼多伐折囉赧(ダンコ)涸
此の中の訶字門は　聲と理と前の說の如し　少分の差別なることは　所謂る
淨除の相なり
降伏三界尊の　身密の儀式は　當に事業を成ずる　五智金剛の印を用ゆべし
次に降三世の眞言を說いて曰く
南麽三曼多伐折囉赧、訶訶訶(カカカ)、微薩麽曳(ビサンマエイ)、薩婆怛他揭多微灑也(サラバタタギヤタビジヤヤ)三婆嚩(サンバンバ)、怛嚧路枳(ダレイロキヤ)也
微若(ビジヤヤ)也、弉若(ムジヤヤ)、莎訶(ソハカ)
是の如く澡浴し灑淨し已つて　三昧耶を具し支分を護し
無盡の聖天衆を思惟し　三たび水を掬り奉て之れを獻れ
身心を淨めて他を利せんが爲の故に　如來勝生(ニヨライショウシヤウジ)子を敬禮し

三毒分別等を遠離し　諸根を寂調して精室に詣すべし
或は水室の異の方便に依て　心住すること前の所制儀の如くせよ
自身の(一)三等を限量と爲すは　上中下の法を求めんが爲の故なり
行者是の如く持誦を作さば　所有の罪流當に永く息むで
必定成就して諸の障を摧き　一切智の句其の身に集まる
彼れ世間成就品と　或は復餘經の所說とに依れ
供養の支分と衆の方便と　其の次第の如く修行する所なり
未だ有爲の諸相を離れざるが故に　是を世間の悉地と謂ふ
次に無相の最殊勝なるを說く　信解を具する者の觀察する所なり
若し眞言乘の深慧の人　此の生に無上の果を志求せば
信解する所に隨つて觀照を修せ　前の心供養の儀の如し
及び悉地流出品(シツチルユツポン)と　(二)出世間品(シユツセケンボン)との瑜伽の法に依るべし
彼れ眞實の緣生の句に於て　內心の支分に攀緣を離れよ
此の方便に依て而も證修して　常に出世間の成就を得べし

(一)三等　自身の三密平等をいふ。

(二)出世間品　經の第三成就悉地品第七なり。

(一)甚深云云　是れ本不生の法なり。

(二)阿闍梨　龍智なり。

說く所の優陀那の偈に言ふが如し

(一)甚深無相の法は　劣慧の堪へざる所なり　彼等に應せんが爲の故に　衆て有相の說を存すと

右は(二)阿闍梨の集むる所の、大毗盧遮那成佛神變加持經の中の、供養儀式具足し竟んぬ。傳度の者頗る會意を存すべし。又文を省かんと欲するが故に其の重複を删れり、眞言は旋轉して之れを用ふべし。修行者當に上下の文義を綜べ括るべきのみ。

國譯大毘盧遮那成佛神變加持經卷七　終

國譯大毗盧遮那經廣大儀軌卷上

亦は大悲胎藏と名づく

毘盧遮那佛の、淨眼を開敷したまへること青蓮の如くなるを稽首したてまつる。

我れ大日敎王に依りて供養所資の衆の儀軌を說かん。

彼の如くせばまさに速に成就することを得べし、然かも初めに自他の利を成就せしむることは、

無上智願の方便なり、悉地を發起することは(一)信解に由る。

一切如來勝生子、彼等の佛身の眞言行と、

所住の種々の印と威儀と、殊勝眞言の所行の道と、

及び方廣乘と皆諦信するべし、(二)六趣に輪廻する衆を哀愍して、

隨順し饒益するが故に開演したまふ、まさに恭敬して決定の意を以てすべし。

また勸誡(三)深信の心を起し、妙眞言の調伏の行を知り、

具緣の衆の支分を解了し、傳敎の印可を受くることを得已らん。

是の如き師を見て恭敬し禮して、瞻印すること猶世の導師の如くし。

(一)信解　大機なり。

(二)六趣　地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天道の六趣なり。

(三)深信　小機なり。

供養し給待して所安に隨ひ、善く師意に順じて歡喜せしむべし。
稽首して勝善逝の行を請せよ、願はくは尊かくの如く我れに教授したまへと。
彼の師自在に大悲藏等の妙圓壇を建立して、
法に依りて曼荼羅に召入し、器に隨ひて三昧耶を授與せん。
道場教本と眞言と印と、親たり尊の所に於て口より傳授せよ。
其力分相應の事に隨ひて、悉く皆奉請して供養すべし。
學處を授くる師と同じく梵行とに、一切の毀壞の心を懷くこと勿れ。
次に灌頂傳教の尊を禮して、眞言所修の業を請白せよ。
智者は師の印可を蒙り已りて、地分の所宜の處に依て、
法の如く曼荼羅をすべし、又常に堪忍の慧を具足せよ。
淨命の善伴或は伴無くんば、まさに妙法の經卷と俱にすべし。
自他の現法に成就を作し、餘の天の無畏依に隨はず。
此を具するを名づけて良助半と爲す、彼れ成就の處所を作し已はりて。
毎日に先づ念慧に住せよ、法に依りて寢息し初めて起る時に、

(一)祕密尊　尊恐らくは是れ印或は印を以て祕密と云ふなるべし。然れば即ち尊の字通じて明と印とを歎ずるなり。
(二)持地印　金剛三昧耶の印なり、左の膝の上に於て上下す、作禮方便の印、一尊法の印は大師の作禮方便の次第に出でたり。
(三)大慧刀の印　第七卷の印と同なり。

諸の無盡の障を爲す者を除くべし、誠心に十方佛を思念したてまつり、
まさに本尊所在の方に依りて、五輪を地に投げて禮を作すべし。
十方の等正覺の、三世一切に三身を具したまへるを歸命し、
一切大乘の法を歸命し、不退の菩提衆を歸命し、
諸明(一)祕密尊を歸命し、三業清淨なるを以て恭敬して禮したてまつる。
作禮方便して眞言に曰く。(二)持地の印を用ふ。
唵、曩謨薩嚩怛他蘗多、迦野弭嚩吃質多播娜鑁娜難迦嚕弭。
右の膝を地に著け先罪を悔すべし、我れ無明に由て積集する所、
身口意業に衆罪を造れり、貪欲恚癡心を覆ふが故に。
佛と正法と賢聖僧と、父母と二師と善知識と、
および無量の衆生との所に於て、無始生死流轉の中に、
具さに極重の無量の罪を造れるを、親たり十方現在の佛に對して、
悉く皆懺悔して復た作らず、出罪方便して眞言に曰く、(三)大慧刀の印を用ふ。
唵、薩嚩播波薩怖吒、娜訶曩嚩曰囉也、娑嚩賀。

(一)歸依方便　三歸なり。
(二)普通の印　胎金にては蓮華合掌、金剛合掌なり、今は胎の故に蓮合なり。
(三)施身方便　獨股杵の印、内縛二風を合すること風は命根の故に命なり、他に施すの義なり、覺明の記に曰く、獨股の印を項上に安ずと。
(四)金剛縛印　發菩提心の印に外縛を用ふること大軌の意なりと、振金剛縛並に法界定印は何れも五智五佛の二の故に大生菩提心の印に用ふるなり。

十方三世の佛の、三種の常身と正法藏と、
勝願菩提の秘密衆とを歸命したてまつる、我れ今皆悉く正しく歸依したてまつる。
(一)歸依方便の眞言に曰く、(二)普通の印を用ふ。
　唵、薩嚩沒默冒地薩怛鑁、設囉赦蘖車弭、嚩曰囉達麼、頡利。
我れ身を淨めて諸垢を離れたると、および三世の身口意との、
大海と刹塵との數に過ぎたるを、一切の諸の如來に奉獻したてまつる。
(三)施身方便の眞言に曰く、獨股杵の印を用ふ。
　唵、薩嚩怛他蘖多、布惹鉢囉嚩嚩喋多曩夜怛忙難、涅哩夜、多夜弭、薩嚩怛他蘖多室
　柘地底瑟吒多、薩嚩怛他蘖多、惹難謎阿味設覩。
淨菩提心の勝願の寶を、我れ今起發して群生を濟く。
生苦等の集に纏繞せられ、および無智に害せらるる身を、
救攝し歸依となりて解脫せしめん、常にまさに諸の含識を利益すべし。
發菩提心の眞言に曰く、(四)金剛縛の印を用ふ。
　唵　冒地質多、母怛播娜夜弭。

(一)歸命合掌　金剛合掌なり。
(二)外縛風鉤　是れ大鉤召の印なり此印を用ふること大師の軌は今の作禮方便の次第と皆同なり、自餘の軌並に次第等は皆金剛合掌なり。

あらゆる十方世界の中の、一切の諸の正遍知者の、
種々の善巧の語言と思と、惟し佛の廣く群生を濟はんが爲めに、
あらゆる修福等の業量とを、我れ今盡く將つて隨皆喜す。
彼の言に曰く、(一)歸命合掌を用ふ。
　唵、薩嚩怛他蘖多、奔若惹曩、弩暮捺那布惹迷伽三暮捺羅、薩巨囉儼三摩曳、吽。
我れ今諸の如來と、菩薩秘密の救世者とを勸請したてまつる。
唯願はくは普く十方界に於て、常に大雲を以て法雨を降したまへ。
勸請の眞言に曰はく、歸命合掌を用ふ。
　唵、薩嚩怛他蘖多、睇灑儼布惹冥伽三暮捺囉、薩巨囉儼三摩曳、吽。
願はくは凡夫所住の所をして、速かに衆苦所集の身を捨て、
まさに無垢の處に至りて、法界清淨の身に安住することを得せしむべし、
請法身の眞言に曰く、(二)外縛風鉤を用ふ。
　唵、薩嚩怛他蘖多、捺睇灑夜弭、薩嚩薩怛嚩係多喋他耶、達麼駄覩薩體、底喋嚩靺
　覩。

(一) 普通の印　蓮華合掌なり。

(二) 三昧印　已下は三三昧耶と金剛甲の印とを明す。

(三) 法界性を字観なり、印に法界性と同じ。

所修の一切の衆善業を、一切衆生を利益せんが故に、
我れ今盡く皆正しく廻向す、生死の苦を除て菩提に至らん。

廻向の眞言に曰く、(一)普通の印を用ふ。

唵、薩嚩(サラバ)怛他(タタ)蘖多(ギヤタ)、囉哩(ニリヤ)也怛(タンナウ)曩布(ジヤイ)惹(ジヤイ)冥伽(ギヤサンボダラ)三暮捺羅(ソハラムダサンマボイ)、薩囉(ソハラ)儼三麼曳(サンマボイ)、吽(ウン)。

身心をして遍く清淨ならしめんが爲めに、哀愍して自他を救攝せよ。
心性は是の如くの諸垢を離れ、身所應に隨て以て安坐すべし。
次に(二)三昧印を結び、また法界性に入り、薩埵を以て甲冑を被るべし。
有情界を淨めんと欲せば、先づ(三)法界性を以てせよ、印明心位に在りて、
諦かに自性の慧を觀ずべし、體中に囉字あり、身に遍じて智火と成る。
諸垢得べからす、佛火中の上なりと說きたまふ、三角火光を生じて、
日暉の猛焰の如し、先づ妄分別を燒き、藏識の因業盡き。
大及び蘊處界、皆性をして寂滅ならしむ、二羽金剛拳にして、
而して風輪を舒べよ、淨法界の印と名づく、彼の眞言に言く。

曩莫(ナウマク)三(サン)曼多(マンダ)沒駄(ボダ)南(ナムラム)。

(一) 字を以て字を燒く、上の字は火の字なり、燒字は智字なり、即ち是れ自心なり、是れ有爲の事法即ち是れ本不生と觀ずるなり。

(二) 阿字輪を觀ずべし　已下は五輪成身觀なり、眞言は梵(ボン)字(ジ)の五字を以て各別に眞言と爲せり。

(三) 月光九重に云く中台と八葉と合して九重と云ふなり、一に云く九つ月輪を重ぬるなり、籠に鳥を入るゝが如しと、此說は九重の名目には相當るなり、初心の觀行には初の說は觀じ易しと雖も九重の名義に相應せざるなり。

三に彼の明を稱し已はりて、印を頂上に擧げ、漸々に足に至りて、
能く蘊四大を燒け、諸法は本不生にして、自性寂滅なるが故に。
是を淨心地と爲す、故に(一)字を以て字を燒くと名づく。
諸法は本不生なるを以て、心性自ら清淨なり。
次に(二)阿字輪を觀ずべし、一切の佛加持したまふ、色黃金の聚れる如し。
其相普く方にして等し、性破壞すべからず、金剛地輪と名づく。
下體足臍を加持せよ、說いて瑜伽座と名づく、即ち金剛寶界なり。
彼の眞言印の力に由りて、加持して瑜伽、不壞金剛の座と成る。
眞言に曰く、歸命、阿(ア)、印は金剛慧の如し。
次に金剛智を觀ずべし、光明有情を照して、同く此地を得せしむ。
同體大悲の中より、能く鑁字を生ず、相智臍位に生ず。
白色にして相圓明なり、(三)月光の九重にして、輕務の中に在るが如し。
甘露水を流注して、衆生界を充潤す、名けて定水輪と爲す。
臍位を加持せよ、故に大悲水と名づく、彼の眞言に曰く、

(一)印と蓮華と同じ、八葉の印なり。

(二)印大慧刀に同じ、金合して二風甲を合せ、空之を押し、空の頭を顯すこれなり。

(三)能く衆の魔を破す、是れ風輪の位なり、風輪の大力は、惡魔を壞すなり、故に能く此俱知觀音或は降魔の印、右の拳風の指を立て、額に加ふ此の意なり、額は自身の風輪の位なるが故なり。

(四)衆色を含す、青色の事なり、四色雜するを云ふなり。

歸命尾、(一)印と蓮華と同じ、眞言印の力と。

加持の威德とに由るが故に、大悲三昧を得。

次に大悲定を觀ずべし、體自性の慧に同じ、光淨にして本と無垢なり。

能く藍字を生ず、色赤くして日暉の如し、三角にして威焰を生ず。

名けて慧火輪と爲す、彼の眞言に曰く、歸命、嚂。

(二)印大慧刀に同じ、印明の力に由るが故に、加持して自性大實相の火輪と成る。

次に自性の風を觀ずべし、慧光焰ありて鼓動し、能く唅字を生ず。

形半月輪の如し、青黑にして威怒を生じ、十方界を飄動す。

有情の因果の業、悉く皆自性なし、性本と縛解なし。

解脫の風輪と成る、加持して眉間に在りて、(三)能く衆惡魔を壞す。

故に解脫風と名づく、彼の眞言に曰く、歸命、唅。

印轉法輪に同じ、印眞言の力に由りて、解脫風輪と成る。

次に解脫の性を觀ずべし、體空にして(四)衆色を含す、眞空欠字を生ず。

想ひて頂上に置け、色玄にして相周普す、圓滿して十方に遍せり。

(一)印は尊勝と號す、尊勝陀羅尼の印と同じ、又空輪は最勝尊の故に尊勝空と云ふなり。

(二)その時に世尊云云　今は滿足の句云云　普通の印と云ふ故に孔雀王咒或は孔雀王咒或は出す、秘して普供養の明此の言を出すなり。

(三)地水火風云云　有爲の世間即本不生と照すを燒と云ふなり。

(四)二空同一　衆生界と器世界と俱に大空法界と觀ずる義なり、次の淨二界も之れに同じ。

名けて大空輪と爲す、一切の障礙なし、彼の眞言に曰く、

歸命、欠、(一)印は尊勝空と號す、眞言印の力に由りて、加持して法界に等す。

(二)その時に世尊降伏四魔の三昧に入りて說きたまふに滿足の句を以てせり、普通の印なり、五處彼の眞言に曰く、

唵、薩嚩、欠、嗢那蘖諦薩叵囉吽鉾、誐誐那劒、娑嚩賀。

眞言印の力に由りて、能く四魔を降伏す、煩惱と五縕と死との如きなり。

六道を解脫し、一切智を滿足し、五蘊四大を淨めて、

五分法身を成ず。

次に三昧耶を結び、また法界生に入り、薩埵を以て甲冑を被るべし。

次に器世界を淨むべし、前の法界生の如くして、印轉じて心位に置け。

三たび彼の明を稱し已はりて、印を以て想へ、(三)地水火風の有爲を燒き、

一切劫燒の如くして、無爲の空界と成ると、(四)二界同一の空なり。

永く有爲の過を離れて、凝然として大空に同じ、十方佛の位したまふ所なり。

故に淨二界と名つく、彼の眞言に曰く、歸命、嚂。

眞言者觀察せよ、情と界と大空に同じ、還りて本性の空を念じて、
無爲界を建立し、佛國土を嚴淨す、故に大日世尊。
(一)法界俱舍、莊嚴藏三昧に入り、以て法界、
無盡莊嚴を現したまふが故に、眞言行門を以て、無餘界の衆を度す。
次に持地を念じ、(二)地神を驚覺すべし、驚覺地神の偈にいはく、定の手に智杵を執りて心に於き慧手の五輪其他を案ず。
沙は天親護者なり、諸佛道師に於て、殊勝の行を修行し。
地波羅蜜を淨む、魔軍の衆を破せん、釋師子救世の如く。
我れまた魔を降伏し、我れ曼荼羅を畫すべし、而して發生の偈を說け。
能く隨類形の、諸法と法相とを生ず、諸佛と聲聞と、
救世の因緣覺と、勤勇の菩薩衆と、及び仁尊ともまた然るなり。
衆生と器世界と、次第に成立し、生住等の諸法。
常恒に是の如く生ず、智と方便とを具するに由りて、無慧の疑を離れたり。
この道を觀じたまふが故に、諸の正遍知說きたまへり、諸佛の發生したまふが如く。
自性無爲の法、五輪三昧の智、淸淨法界に同じ。

(一)法界俱舍　俱舍には藏と曰ふ即ち法界胎藏三昧なり。

(二)地神を驚覺すべし、定の手に智杵を執りて心に於き此に二說あり、謂く五股と三股となり、中に三股を執るを勝れとなす、是れ地神の三形なるが故に。

行者(一)等引に住して、(二)十緣生句を觀せよ、蘊本不生を知るとき、
則ちまた滅あることなし、不生滅の中に於て、次第に五輪、
淸淨器世界を成ずべし、(三)下方に欠字を觀せよ、圓滿して十方に遍じ、
一切の色を含融す、色玄にして性無礙なり、故に大空輪と名づく。
彼の眞言に曰く、歸命、欠。
次に上に唅字を觀せよ、形仰げたる半月の如し、靑黑にして大風を生ず。
威怒にして大力あり、能く十方の國を持す、故に大風輪と名づく。
彼の眞言に曰く、唅。
以上に𑖭字を觀せよ、三角にして猛焰を生ず、猶劫災火の如し。
故に大火輪と名づく、彼の眞言に曰く、𑖭。
次上に𑖩字を觀せよ、形月の九重にして、光輪潔白の色、
霧聚の中に在るが、能く一切の水を雨して、大千界に充滿す。
故に大水輪と名づく、彼の眞言に曰く、𑖩。
次上に阿字を觀せよ、色黃金聚の如し、其の相方にして廣大なり。

(一)等引に住して、已下は器界觀なり、等印とは大羯磨の印なり、外縛して二地二空立合すは是れなり。
(二)十緣生句を觀ぜよ　緣生無性の觀を用ふるは遮情より機に入るに約すなり、又自宗の意なれば本不生に約して十緣生句を觀ずるなり。
(三)下方に欠字を觀ぜよ　已下は五輪世界を觀ずるなり。

數量を以て測るべきに非ず、性堅實にして壞し難し、力刹塵の國を持す。

金剛地輪と名づく、彼の眞言に曰く、阿。

金剛滿足の句、三たび普通の明を念じて、加持して五輪を成せよ。

彼の眞言に曰く。

唵、薩嚩他、欠、嗢那蘖諦薩巨囉四鉾、誐誐那劒、娑嚩賀。

眞言印の力を以て、器世界を加持するに由りて、五輪皆成就す。

諸佛國土の如く、種種の寶を以て莊嚴し、寶樹ありて華菓多く。

法界の中に遍滿し、清淨にして極めて嚴潔なり、

次に想ひて大海を爲せ、五寶を以て四岸と爲し、底に妙なる金沙を布けり。

尾字の炎輪あるを觀せよ、次に想へて大海と爲る、八功德水を出して、

其海中に盈滿せり、無盡海の印を結べ、定慧兩ながら相叉ふ。

彼の眞言に曰く。

唵尾麽盧那地吽。

眞言の力に由りて、八味をして減ずること無からしむ。

次に其海中に、一緣にして、(一)八峯の彌盧山を觀想せよ。

定慧內に相合せよ、彌盧山を結び成す。彼の眞言に曰く、

唵阿左攞吽。

眞言印の力に依りて、八峯皆圓滿す。

次上に嚩字を觀せよ、大羯磨輪と成る、用て大寶華を持して、

堅固にして傾動ることなし、彼の眞言に曰く、大羯磨の印を用ふ、

歸命、阿三忙鉢多達磨馱覩、蘖登蘖多南、薩嚩多、暗欠暗嚩、糝索、唅鶴、嚂嚩、

鑁嚩、娑嚩賀吽嚂嚩、賀羅鶴、娑嚩賀嚂嚩、娑嚩賀。

(二)次にまた觀想すべし、羯磨輪の上、其の中に阿字を觀せよ。

轉じて白蓮華と成る、臺蘂皆嚴好にして、八葉皆廣大なり。

衆寶を自ら莊嚴す、彼の眞言に曰く、歸命、阿。

眞言印の力に由りて、印を以て三たび旋繞すれば、八方に遍布す。

想へ百千の蓮華ありと、まさに衆の聖尊を坐せしむべし、不壞金剛の座なり。

次に五色を布すべし、囉嚂迦麽賀、白赤黃青黑なり。

(一)八峯の彌盧山　八峯は即ち八葉なり、八葉の心蓮を須彌盧と云ふ。

(二)次にまた觀想すべし　已下は八葉の位を觀ずるなり。

(一)金剛慧の印外五股の印なり。

(二)三界の金剛道三界とは三重界道なり印は三重界道五重界道共に外五股なり。

(三)法界宮寛も狹も六大法界なれば法界宮なりとも方寸の間なりとも六大法界なれば高無中邊の六大法界宮なり。

(四)轉法輪是は常の小金輪の印なり、瑜祇經に出でたり。

(五)大曼荼羅と成る、已下は曼荼羅觀なり。

(六)摩訶薩の意處意處は即ち心蓮にして大悲胎藏曼荼羅なり。

(七)佛巧色形羯磨形。

彼の衆生界を染めて、法界の色に同せしむ。

次に金剛印を布すべし、(一)金剛慧の印を結べ、彼の眞言に曰く。

歸命、吽、眞言印の力に由りて、三轉の金剛印。

流散すること火光の如く、其の明暗遍く、一切諸佛の刹に周遍す。

無疑慮の心を以てすれば、普遍して(二)三界の金剛道を流出す。

中に(三)法界宮あり、廣大の寶樓閣なり、中に曼荼羅を觀ずべし。

次に(四)轉法輪を結べ、印は金剛頂の如し、眞言に曰く、

唵(アムバザラ)囉(ラ)曰羅(シヤキラ)斫(ウムジヤク)訖囉(ウムバムコク)吽(ウム)弱吽鑁斛。

彼の眞言を念じ已はりて、心額喉頂を印せよ、乃至印ずる所に隨ひて、

(五)大曼荼羅と成る、(六)摩訶薩の意處を、說いて曼荼羅と名づく。

行者斯の位に住して、鏡中に阿字を觀せよ、焰鬘皆妙好なり。

光輝普く周遍して、衆生界を照明す、千の電を合會せるが如くにして、

(七)佛巧色の形を持せり、深く圓鏡の中に居して、諸の方所に應現すること。

猶淨水の月の如くにして、普く衆生の前に現ず、次に其の首の上の。

(一)大護の印虛合二水を開き散ずる是れなり二中圓く合せ餘は散じ申べよ、光燄と爲るなり、是に種々の異說あり。

頂會の交際せる中に於て、標するに大空點を以てして、暗(アム)字を思惟せよ。

妙好にして淨無垢なること、水精と月と電との如し、寂靜法身なりと說けり。

次に光輪を觀じて、入嚩囉(ジムバラ)字を想ふべし、無量の百光を舒べて、

大圓明輪と成り、衆生界を照明す、乃至微塵界。

圓光の內に影入す、彼の圓光の眞言に曰く、(二)大護印を用ひて二空並べて常に入れ風輪は而も散じ舒べよ

入嚩羅(ジムバラ)麼(マリ)嘿(ニ)儞、怛他(タタ)蘖(ギヤタ)多(リシ)嘿(ニ)旨、娑(ソ)嚩(ハカ)賀。

彼の眞言を念じ已はりて、印を以て三たび旋轉すれば、普く圓光輪を現ず。

輪の中に佛菩薩あり、一切の依持する所なり、行者瑜伽座にして、

身執金剛に同じ、囉(ラ)字を眼界と爲せ、輝燭明燈の如し。

頸(ウウフ)を俛せ少しく頭を低れ、舌を齶(アギト)の間に近づけ、以て心處を觀せよ、

まさに心に等引を觀ずべし、無垢にして妙淸淨なり、圓境の如くして常に現前す。

是の如きは眞實の心なり、瑜伽者字を轉して、曼荼羅行に入り、

一切の大會を觀ずべし、慈悲を修習する眼を以て、衆生界を觀察し。

甘露三昧に入れ、是の定力によるが故に一切三世、

(一)無礙力明妃印なし口傳に如來の頂印を用ひよと、謂く內縛して火を立合せ二風火の背に附け、空は火の側を押すなり。

(二)明八遍。八葉を印現する義なり。

(三)無二の境界明妃と如來と無二なり。

(一)無礙力明妃を說く、彼の眞言に曰く、

怛你也他(タニヤタ)、誐誐曩三迷(ギャギャナウサンメイ)、阿鉢羅底(アハラチ)三迷(サンメイ)、薩嚩怛他(サラバタタ)蘖多(ギャタ)三麼多(サムマダド)努蘖帝(ギャアイ)、誐誐曩三摩(ギャギャナムサンマ)、縛囉(バラ)落(ラキ)乞灑(シャチイ)、娑嚩賀(ソハカ)。

彼の(二)明を念ずること八遍せよ、(三)無二の境界なるが故に、また此偈を說いて曰く、

是の佛の加持によりて、菩薩大名稱、法に罣礙なく、
能く衆苦を滅除す、心は本不生の句なり、自身を加持するが故に。
および持金剛、上首の執金剛までに、諦かに聞け金剛手。
字輪曼荼羅、眞言修行の行、能く諸の佛事を作し、
普く其色身を現ず、その時に執金剛、金剛華座より、
旋轉して下り已はりて、大日尊を頂禮して、讚歎の言を發す。
菩提心を歸命し、菩提を發すものを歸命し、行體の、
地波羅蜜等を稽首し、先造者を敬禮し、證空者を歸命すと。
執金剛歎じ已はりて、惟し願はくは法王尊、我れを哀愍し護念して、
之を演說しまへ、衆生を利益し、眞言を修せしものをして圓滿せしめんがためなり。

大日遍照尊、執金剛に告げて言はく、我れは一切の本初なり。
號して世の所依と名づく、說法等比なく、本寂にして上あることなし。
佛此の伽陀を說きて、是の如く加持を作したまふ、執金剛、
及び諸の菩薩衆を加持するを以て、能く勝願者の、佛菩提の座處をあらはす。
大日は虛空の如し、戲論なく無二の、行にして瑜伽と相應す。
是の行成就したまふが故に、即時に大日尊、身の諸支分より、
悉く皆字を出現して、一切世間の金剛と菩薩と。
緣覺と聲聞と、乃至諸の衆生とに、思惟して悉地を成就し。
種々依處に同ならしむ、彼の眞言に言く、阿(ア)。
秘密主阿字は、一切の佛の加持したまふなり。普く色身の像を現せしむ。
此の一切の佛の心は、密が中の秘密なり、大悲胎藏生。
大曼荼羅王、聖天の位を放置する、三昧神通の行あり、
瑜伽の阿闍梨、鏡中に阿字を觀せよ、淨妙の光明を放ちて。
普く圓光の內に現ずること、千界を增數と爲し、光焰の輪を流出す。

次にまさに阿字を轉じて、大遍照尊を成ずべし、導師成正覺なり。
八曼荼羅、種子の字を以て圍繞す、各の標記を執持して、
性に隨つて開悟せしむ、身語一切に遍ず、佛心もまた〳〵然るなり。
閻浮淨金の色なり、世間に應ずるが爲めの故なり、跏趺して蓮の上に坐し、
正受にして諸毒を離れ、身に箱穀の衣を被て、(一)總持の髮髻冠あり。
字門轉じて佛と成りて、普く諸の衆生を利す、瑜伽者觀察せよ。
(二)一身と二身と、乃至無量の身と、各各に三昧に住して。
咸く皆佛の化を受く、願くは華藏海に生じて、同じく一體に入り、
大曼荼羅と成らん。
次に虛空藏の、廣大の寶樓閣を觀ずべし、大寶閣の中に在りて。
寶閣皆行列して、遍く諸の幢蓋あり、珠曼等交絡して。
妙寶衣を垂れ懸けたり、香華雲、及びもろ〳〵の寶雲を周布し、
普く雜華雲を雨らして、繽紛として以て地を嚴る、所愛の聲を韻し諸へ。
而かも諸の音樂を奏す、壇中に淨妙の賢、瓶と閼伽とを想へ。

(一)總持の髮髻冠　上の方に束ね上げたる髮髻なり。

(二)一身と二身　一身とは佛なり二身とは佛と行者となり、然かも各各にして而も一體なり。

寶樹王開敷して、照すに摩尼燈を以てす、三昧と總持との地。
自在の綵女あり、(一)佛波羅蜜等、菩提妙嚴の華あり。
方便を以て衆伎を作し、妙法音を歌詠す、雲の如くにして、
一々の佛海會を供養したてまつり、諸の如來と。菩薩と金剛との衆を供養したてまつる。
我が功德力と、如來加持力と、および法界力とを以て、
普く供養し而も住す、虛空藏明、妃金剛合掌の印なり。
彼の眞言に曰く、
曩莫薩嚩怛他蘗帝嚩、尾濕嚩目契弊、薩嚩他、欠、嗢那蘗底薩頗囉四合、誐誐那劒、
娑婆賀。
大日遍照尊と、塵刹海會の諸の如來と、
菩薩と金剛と聲聞との衆を奉請したてまつる、廣大の樓閣に普く雲集したまへ。
無邊の聖衆皆證知しまへ、我れ今佛の如く(二)二界を淨めて。
身を成じ曼荼羅を建立して、種々の莊嚴今已に耶んぬ。

(一)佛波羅蜜　佛所變の四波羅蜜と云ふ義なり。

(二)二界を淨めて　有爲の四大は下界なり、無爲の虛空は上界なり、此中の意は本地と加持とを并せたり。

悲願を捨てずして降臨したまへ、唯願くは聖衆本願を滿せしめたまへ。

その時に薄伽梵すなはち、身無害力三昧に住したまふ。斯の定に住したまふが故に一切如來の三昧に入り、一切に遍じて能く障閡する無き力無等の三力の明妃を說きたまふ。是の密印の相はまさに定慧の手を以て虛心合掌に作し、二虛空輪竝べ合せて之を建立すべし。頌に曰く。

此れ(一)一切の諸佛、救世の大印なり、正覺の三昧なり。

此の印に於て住す、彼の眞言に曰く、

阿三迷、怛嚩三迷、三摩曳、娑嚩賀。

秘密主、斯の如くの明妃は一切如來の地を示現す。三法道の界を越へざれば地波羅蜜を圓滿す。

また定慧の手を以て拳に爲して、虛空輪を掌中に入れて二風輪を舒ぶる、是を淨法界の印と爲す。彼の眞言に曰く、

嚂達摩駄睹、娑嚩婆嚩句唅。

また定慧の手を以て五輪皆等しく、たがひにひるがへし相鉤す、二虛空輪の首俱に相

(一)一切の諸佛救世の大印は凡心如合蓮なり、二印は空大空の果德なり、凡心を直ちに佛果に入るゝ故に入佛三昧耶と云ふなり。

向へよ。頌に曰く、

是を名づけて勝願、吉祥法輪の印と爲す、世依の救世者、

悉く皆法輪を轉じたまふ、彼の眞言に曰く、

曩莫三曼多嚩日囉喃、嚩日囉怛摩句唅。

眞言印の力に由りて、まさに等引に住して、諦かに我が此の身は、

即ち是れ金剛なりと觀ずべし、無量の天魔等、諸の之を見ること有る者の、金剛薩埵の如くし、疑惑の心を生ずること勿れ。

次に甲冑を被るべし、まさに所被の服體に遍じて焰光に生ずと觀ずべし。

是を用ひて身を嚴るが故に、諸魔の障を爲す者及び餘惡心の類、

之を覩て咸く四散す、(一)定慧三補吒にして、止觀の二風輪、

火輪の上を糾持し、二空を自ら相竝べて、而も掌中に在け。

金剛甲冑の印なり、眞言印の力に由りて、即ち無垢の字を觀せよ。

彼の眞言に曰く、

曩莫三曼多嚩日囉赧、唵、嚩日囉迦嚩左、吽。

(一)定慧三補吒虛心合掌なり金剛甲冑とは環金剛甲冑となり此印の二火二風は正體後得の二智なり、二大中なり、二智共に大空を離れざる故なり。

眞言印の力に由りて、想へて五處に置て印せよ、額と左右と心と喉となり。
身遍じて三昧の光あり、天魔も能く壞することなし。
次に法界生を結びて、想へ囉(ラ)字白色なり、空點以て之を嚴し。
彼の髻の明珠の如し、之を頂上に置け、設ひ百却の中に於て、
積める所の衆ろ〳〵の罪垢も、是れに由りて悉く除滅して、定慧風圓滿す。
印は法界生に同じ、彼の眞言に曰く、嚂(ラム)。
眞言法界に同じ、無量の衆罪を除く、久しからずしてまさに成就すべし。
不退地に住す、一切の觸穢の所に、まさに此の字門を加すべし。
赤色にして威光を具せり、焰鬘遍く圍繞せり。
また定慧の手を以て歸命合掌に作し、風輪相捻じて二空輪を以て上に加ふ、形憩伽(ケーキヤ)の
如し。頌に曰く、
此の大慧刀の印は、一切の佛の所說なり、能く諸見を斷ず。
謂く具生の身見なり、彼の眞言に曰く。
摩賀竭伽尾囉惹(マカキヤラキヤビラジヤ)、達磨薩捺囉奢迦娑訶惹(ダラマサムダラシヤキヤサカジヤ)、薩得迦耶捺嘿瑟恥砌諸迦(サトキヤダリシユチヒヤダキヤ)、怛他蘖多地目(タタギヤタチボ)
吃底儞佐多(キチニリシヤタ)、尾囉誐達麼儞社多吽(ビラギヤダラマニリシヤタウム)。
また定慧の手を以て虛心合掌にして、二風を屈して以て二空輪を絞(マト)ひ、形商佉の如し。
頌に曰く、
吉祥法螺の印、諸佛世の師、菩薩救世者、
皆無垢の法を說きて、寂滅涅槃に至る、彼の眞言に曰く、
唵(アム)。
また定慧の手を以て相合せて、普く之を舒べ散ず、猶健吒(ケンダ)の如し、二地輪二空輪相持
して、火風輪和合せよ。頌に曰く、
吉祥願の蓮華、諸佛救世者の、不壞金剛の座なり。
覺悟するを名づけて佛と爲す、菩提と佛子と、悉く皆是れより生ず。
彼の眞言に曰く、阿(ア)。
また定慧の手を以て、五輪內に向つて、拳に爲し火輪を建て、二風輪を舒べて屈して
鉤形に爲す、傍に在りて之を持せよ、虛空輪●地輪竝べて直く上げ、水輪交へ合せて拔
折囉の如くせよ。頌に曰く、

(一)金剛大慧の印。内五股の印なり。

(二)摩訶の印、如來頂の印なり、謂く内縛して火を立て空風は火を持すること是れなり。

(三)鉢を持するに相應す、袈裟の左右の前の方の角の釣鈕なるをとづして取べきなり、是を釋迦の大鉢の印と云ふ。雖も飯食の印の如くにすべからざるは不可なり。

(一)金剛大慧の印は、能く無智の城を壞し、睡眠の者を曉寤す。天人も壞すること能はず、彼の眞言に曰く、

曩莫三曼多嚩日囉赦吽。

また定慧の手を以て、五輪内に拳に爲し、火輪を建立して二風を以て傍に置き、二虛空を屈して相並べよ。頌に曰く、

此の印は(二)摩訶の印なり、所謂如來頂なり、たま〳〵纔に之を結び作せば。即ち世尊に同じ、彼の眞言に曰く、

また智慧の手を以て拳に爲して眉間に置け、

頌に曰く、

此を毫相藏、佛常滿願の印と名づく、纔に此印を爲すを以て、即ち人中の勝に同じ、彼の眞言に曰く。

阿念に呼べ痕惹念に呼べ

瑜伽座に住せよ、(三)鉢を持するに相應す。定慧の手を以て俱に臍の間に在く、是を釋迦牟尼の大鉢の印と名づく。彼の眞言に曰く、

婆。

また次に智慧の手を以て、上に向へて、施無畏に形を作せ。頌に曰く、

能く一切、衆生類に無畏を施與す、若し此の大印を結ぶを。施無畏者と名づく、彼の眞言に曰く、

薩嚩他、爾那爾那、佩野曩奢那、娑嚩賀。

また次に、(一)智慧の手を以て垂れて施願の形に爲せ。頌に曰く、

是の如く與願の印は、世依の所說なり、たま〳〵纔に此を結ぶ者は、諸佛其の願を滿じたまふ。彼の眞言に曰く、

嚩囉娜嚩曰羅怛麽迦、娑嚩賀。

また智慧の手を以て拳に爲して、風輪を舒べ、毘俱胝の形を以て等引に住せよ。頌に曰く、

是の如くの大印を以て、諸佛救世の尊諸の障者を恐怖し、意に隨ひて悉地を成じたまふ、是の印を結ぶに由るが故に、大惡の魔軍衆及び餘の諸の障者、馳散して疑ふ所なし、彼の眞言に曰く。

(一)智慧の手云云是れ怖魔の印なり右の手拳に爲して風を舒べ白毫の際に加ふ。

摩賀沐囉嚩底、捺捨嚩路嗢婆吠、摩賀昧怛嚩也毘庚嗢蘖底、娑嚩賀。

また次に、智慧の手を以て拳に爲して、火と水との輪を舒ぶ。頌に曰く、

此を一切の佛、世依の悲生眼と名づく、想へて眼界に置けば。

智者佛眼を成す。彼の眞言に曰く、

誐誐曩嚩囉嚩嚩吃灑儜、迦嚕儜摩耶、怛他蘖多作吃芻、娑嚩賀。

また次に定慧の手を以て、一に合して內に拳に爲して、智慧の手の風輪を舒べて、第三の節を屈すること猶環の相の如くせよ。頌に曰く、

是の如くなるを(一)鉤印と名づく、諸佛救世者、一切の十地の位に住せる、菩提大心者と、及び惡思の衆生とを招集す。

彼の眞言に曰く、

阿薩嚩多囉鉢囉底賀帝、怛他蘖多矩者、冐地揺囉耶鉢哩布囉迦、娑嚩賀。

また次に。定慧の手を以て、五輪內に向けて拳に爲して風輪を舒べ、圓に屈して相合せよ。頌に曰く、

此の勝願の索の印は、諸の惡を造くる者を壞す、眞言者之を結べば、

(一) 鉤印內縛して右の風火を立つるなり。

能く諸の不善を縛す、彼の眞言に曰く、

係係摩賀播捨、鉢囉娑嚩那囉也、薩怛嚩駄睹、微謨訶迦、怛他蘖多地目吃底儞佐多、娑嚩賀。

即ち前の鉤印其の火輪を舒べて少し之を屈せよ、是れ諸の如來の心印なり。彼の眞言に曰く、

枳穰怒、嗢婆縛、娑嚩賀。

また此印を以て其水輪を舒べて之を竪立せよ、(一)如來臍の印と名く。彼の眞言に曰く、

阿沒嘊都嗢婆嚩、娑嚩賀。

即ち此印を以て直く地を舒べ、餘はまた之を竪てよ、如來腰の印と名づく、彼の眞言に曰く、

怛他蘖多三婆嚩、娑嚩賀。

また定慧の手を以て、空心合掌に爲し、二の風水輪を以て屈して內に入れ、其の二地輪少し屈して火輪を舒べよ、この是れ如來藏の印なり、彼の眞言に曰く、

曩莫薩嚩怛他蘖底弊、嚂嚂嚩嚩、娑嚩賀。

(一) 如來臍印內縛して風水火の三を立つ、又攝大軌の中の如來臍は內縛して二水を立合す。

(一) 大界の印文に曰く此印を以て其水輪を散じて上に向ふと文。

次に二守護門を結べ、即ち此印を以て其の水輪を散じて上に向けて之を置け、(一)大界の印と名づく。彼の眞言に曰く、

麗嚕補哩尾矩𣑭、娑嚩賀。

大三昧を以て大界を結す。彼の眞言に曰く。印前に同じ

薩嚩怛囉弩𠸄帝、滿馱野徒瞞、摩訶三摩野喝囉左帝、娑麽囉嬾、阿鉢囉底訶底、馱迦馱迦、折囉折囉、滿馱滿馱、捺奢你以羶、薩嚩怛他蘖多弩枳惹帝、鉢囉鉢囉達磨臘馱尾惹曳、婆誐嚩底、尾矩囉尾矩𣑭、麗嚕補哩、娑嚩賀。

(二) 無堪忍大護の印結大界と四大護と皆同じと、無堪忍亦は雜堪忍と名づく、是れ總結界なり、言も亦た總呪なり。

その時に毗盧遮那佛は一切の願を滿する舌相を出して、遍く一切の佛刹を覆ひ、入清淨法幢高峰觀三昧に住したまふ。時に佛定より起ちて一切如來法界に遍じて無餘の衆生界を哀愍したまふ聲を發し、大力大護の明妃を說きて、即ち前の大界の印を以て、其の二火輪鉤屈して、相ひ合せて風輪を散じ舒べよ、(二)無堪忍大護の印と名づく。彼の眞言に曰く、

四大結護印言東方には無畏結護の持倍の印を造る嚩字なり。北方には壞諸怖大護の持刀の印を造れ、麽字なり。西方には雜降大護の持刀の印索字なり。南方には金剛無勝大護の阿の印麼字なり。

曩莫薩嚩怛他蘖帝毘藥、薩嚩婆野尾蘖帝毘藥、尾濕嚩目契弊、薩嚩他、唅欠、洛乞灑摩訶沫隸、薩嚩怛他蘖多、奔眤也你惹帝吽吽、怛羅吒怛囉吒、阿鉢囉底賀帝、娑嚩賀。

(一) 不動尊の印明刀印一字の印明なり。

此明を說き已はりて、即時に普遍く佛刹六種に震動す、一切の菩薩は未曾有の開敷眼を得て諸佛の前に於て悅意の言を以て偈を說きて曰く。

諸佛は甚だ希有なり、此大力護を說きたまふ、一切の佛護持したまふこと、城池の皆固く密なるが如し、彼心を護りて住するに由りて、あらゆる障を爲す者の、毗耶夜迦等の惡形の諸の羅刹、一切皆退散す。眞言を念する力の故に、

次に(一)不動尊の、印明を結び用ひて、所供養を加持して垢を去け。障を辟除し光を顯ならしめ、大威德を增加す。彼の眞言に曰く、

曩謨三曼多嚩曰囉赧憾𤙖。

次に閼伽香水の印を結べ、二羽に閼伽香水の器を捧げて、想へ諸の聖衆を浴したてまつると。まさに五大願を發すべし、彼の眞言に曰く、

誐誐曩三麽三麽、娑嚩賀。

次に塗香の印を結べ、定の羽を以て智の腕を握し、五輪を舒べて掌を揚げ。

施無畏の勢に作せ、彼の眞言に曰く、

尾輸馱健度納娑嚩、娑嚩賀。

彼の眞言を念じ已はりて、想へ印より塗香器雲海を流出して、

虛空盡法界、塵刹大海會に、一一の尊を供養したてまつる。

次に如來座を結べ、彼の華座の印に同じ、彼の眞言に曰く、

阿。

まさにもろ〳〵の聖尊を不壞金剛の座に坐せしむべし、願くは法界の衆生、

同じく法空の座に坐せしめん。

その時に薄伽梵廣大法界の加持を以て、即ち是の時に於て法界胎藏三昧に住したまふ。

此定より起ちて入佛三昧耶を說きたまふ、彼のに曰く。

曩莫薩嚩怛他蘗帝嚩、微濕嚩目契弊、唵、阿三迷、恤哩三迷、三麼曳、娑嚩賀。

正しく三昧耶を以て、即ち能く普く增益す、一切の衆生類、

まさに悉地を成じて、無上の願を滿することを得べし、以て大眞言主。

及び諸明をして歡喜せしむ。

次に獻華の印を結べ、定慧內に相叉へて、圓に二風輪を屈し、

峯を側だて相拄へて、二空風の側りに附けよ、彼の直言に曰く。

摩賀昧怛哩也、毗度訥蘗帝、娑嚩賀。

彼の眞言を念じ已はりて、想へ印より、焚香氣雲海を流出して。

盡虛空、微塵大海會に周遍して、一一の衆聖の前に。

種種の香を供養したてまつり、同じく法界體に入る。

次に飲食の印を結べ、(一)定慧空心合して、印成じて觀想せよ。

彼の眞言に曰く、

阿囉囉迦囉囉、沫隣捺娜弭沫隣捺禰、摩訶沫哩、娑嚩賀。

彼の眞言を念じ已はりて、無量の飯食雲盡虛空。

微塵の刹土に周遍して、一一の聖衆の前にて、廣大に而かも供養したてまつる、

法喜と禪悅との食なり。

次に燈明の印を結べ、智の羽拳に作すべし、風輪火輪を絞ひ。

(一) 定慧空心合　この下恐らくは、「空は風輪の側を捻ず」の句を脫せしならんか。

空は水地の甲を押す、火輪は而も直端くす、彼の眞言に曰く、

怛他蘖多囉㗚、娑頗羅儜嚩娑娑曩、誐誐猱娜哩耶、娑嚩賀。

彼の眞言を念じ已はりて、右に旋らして而も照明すべし、印より、

無量燈雲海を流出して、盡虛空、微塵刹土の中に周遍して、

一一の燈廣大にして、佛の海會を照耀す。

次に虛空藏の、廣大寶樓閣を觀せよ、大寶樓閣の中に在りて、

寶樓皆行列して、遍く諸の幢蓋あり、珠曼等交絡して、

寶妙衣を垂れ懸けたり、香華雲、およびもろ〳〵の寶雲を周布し、

普く雜華雲を雨らして、繽紛として地を嚴る、諸韻所愛の聲、

而も諸の音樂を奏す、壇中に淨妙の、賢瓶と閼伽とを想へ。

寶樹王開敷して、照すに摩尼の燈を以てす、三昧と總持との地に、

自在の婇女あり、佛波羅蜜等、菩提妙嚴の華あり。

方像を以て衆伎を作し、妙法音を歌詠す、雲の如くに供養を、

一一の佛の海會に雨して、諸の如來と、菩薩と金剛との衆に供養したてまつる、

我が功德力と、如來の加持力と、および法界力とを以て、

普く供養して而も住す。

虛空藏明妃は、金剛合掌の印なり、彼の眞言に曰く、

曩莫薩嚩怛他蘖帝嚩、尾濕嚩目契弊薩嚩他、欠、嗢娜蘖帝娑頗囉㗚、誐誐曩劔、

娑嚩賀。

次に五讃歎を陳べよ。一は佛を讃し、二は法を讃し、三は僧を讃し、四は（一）普賢を讃し、五は金剛手を讃す。

摩賀迦嚕抳建曩貪、捨娑跢嚧薩嚩吠你南、奔女那地蟬虞拏駄嚂、鉢囉拏摩弭怛他誐

耽。

吠囉儗野若曩南秣淡、戊婆訥蘖底謨左劔、播囉沫體迦謎建耽、達磨鉢舍麽嚩憾。

目訖耽目訖底播他鉢羅跛耽試乞灑夜素弭也嚩娑體耽、乞灑怛嚂尾始瑟鳥虞拏鑁、曩

謎僧建左婆嚩哆。

薩嚩母馱鉢囉捨娑跢野、三勃里跢野虞隸虞嚂、阿嚩路枳多僧枳孃野、曩謨顎髻枳里

播答摩寧。

摩訶嚩攞野左拏野、尾你野攞惹野娑馱味、訥難跢娜麽迦夜、曩麽悉帝嚩曰囉播拏曳。

（一）普賢　疑ふらくは觀自在ならん何となれば蘇悉地經に此の五讃の漢語を出す、其標する所の題目是の如し、即ち佛部法部僧部、佛蓮金の三寶三部を默ずるなり、或は又蓮部に諸菩薩を攝する故に普賢を讃するも義に於ては害無かるべし。

次に如來頂を結べ、彼の眞言に曰く（即ち大日尊に同じ。）

曩莫三曼多勃馱南、誐誐曩、難多微輪馱達麽徐闍帝、娑嚩賀。

また定慧の手を以て空心合掌に爲して、二風輪を以て火輪の側りを持せよ。如來甲の印と名づく。彼の眞言に曰く、（五處を印ぜよ額と左右の肩と心と喉となり。）

鉢羅左拏、嚩曰囉入嚩攤、尾娑[illegible]囉吽。

また前の大力大護の印に準じて空輪並べて掌に入れ、風輪をば散じ舒べよ、如來普光の印と名づく。彼の眞言に曰く、

入嚩攤摩囉伊、他怛蘖多嘿尒、娑嚩賀。

また前の甲の印に準じて、二空中に入れ、如來舌相の印と名づく。彼の眞言に曰く、

（一）怛他蘖多尒訶嚩、薩底也達麽鉢囉底瑟恥多、娑嚩賀。

また前の舌相の印に準じて、二風輪二水輪屈して相捻じ、空輪上に向けて少し之を屈し、火輪地輪正しく直くして相あはせよ、如來語門の印と名づく。彼の眞言に曰く、

怛他蘖多摩訶嚩吃怛囉、尾濕嚩枳孃曩摩護娜也、娑嚩賀。

また前の語門の印に準じて、二風輪を以て屈して掌に入れて空輪の傍に在け、如來身

（一）大日經の具緣品には怛他蘖多の上に摩訶摩訶の二句を加ふ、即ち四句を成す。密印品は今に同じ。

の印と名づく。彼の眞言に曰く、

怛他蘖多能瑟吒羅、囉娑囉娑蘖羅、糝鉢羅博迦、薩嚩怛他蘖多、尾灑也糝婆嚩、娑嚩賀。

また前の印に準じて、二風輪を以て上に向へて之を置き、第三の節を屈せよ、如來辨說の印と名づく。彼の眞言に曰く、

阿尒底也娜部多、路跛嚩三麽哆鉢羅鉢多、尾輪馱娑縛囉、娑嚩賀。

またつぎに定慧の手を以て和合一相にして空心合掌に作し、二地輪二空輪屈し入れ相合せよ、是れ如來十力の印なり。眞言に曰く、

捺奢沫浪誐達囉、吽三髯、娑嚩賀。

また前の十力の印に準じて二空輪を以て、上節を屈して相合して二空輪の上に在く、是れ如來念處の印なり。彼の眞言に曰く、

怛他蘖多娑麽嘿底、薩怛嚩係怛嚩毗度嗢蘖多、誐誐曩三忙三麽、娑嚩賀。

又前の念處の印に準じて二空輪を以て水輪の上に在け、一切法平等開悟の印と名づく。彼の眞言に曰く、

(一)その時に普賢菩薩云云　如來身會の終りに普賢慈氏菩薩を擯ぐるは初後なる擯なり、中間を略して此二菩薩は八葉の初後なるが故に。

(二)二風輪云云　甲を合せ空を以て風の側を押す之を寶瓶の印と名づく。

薩嚩達摩三摩多鉢囉鉢多、怛他蘖多弩蘖多、娑嚩賀。

(一)その時に普賢菩薩即時に佛境界莊嚴三昧に住して阿字を觀じて體と爲す、即ち普賢の行に同じ、また定慧の手を以て合して一と爲す、二風輪を以て火輪の上に加ふ、餘は前の如し、是れ普賢如意珠の印なり、彼の眞言に曰く、

參摩多弩蘖多、尾囉惹達磨徐社多、摩訶摩訶、娑嚩賀。

その時に彌勒菩薩は發生普遍大慈三昧に住して阿字を觀じて體と爲す、即ち彌勒の行に同じ。

また定慧の手を以て虛心合掌にして、(二)二風輪を以て屈して二火輪の根の下に在け、餘は前の相の如し、是れ慈氏菩薩の印なり。彼の眞言に曰く、

阿爾多惹野、薩嚩薩怛嚩奢野弩蘖多、娑嚩賀。

次に轉百字三部曼荼羅或身觀行に入るべし。別に口より受けよ。

國譯大毘盧遮那經廣大儀軌卷上　終

(一)三角にして光明を放つ　この遍智院の三角知印は炎り下に向ふべきなり、下化の故に然りと雖も恰好惡しきに上に向ふと見えたり已に攝大の軌に云く、其色鮮白峰銳にして其下に向ふと云へり。

(二)印は大日に同じ、青軌曰く佛頂の印の如しと是れ三眼の印なり玄軌曰く佛眼印にしてこは五股眼の印なり並に大日の印なりと。

國譯大毘盧遮那經廣大儀軌卷中

大日如來の東の、大白蓮華臺の、圓淨の月輪の中に、

內商佉の色を現ずるに、欠字の法門を觀ぜよ、(一)三角にして光明を放つ。

其の色皆鮮白なり、金剛印を以て圍繞せり、彼の眞言王より、

周匝して光明を放つ、普遍して而も流出す、此を持して四魔を降伏しまふ。

號して遍智印と名づく、能く多の功德を具す、彼の一切佛心を、

號して大勤勇と爲す、彼の眞言に曰く、印は大日に同じ。

薩嚩沒馱冒地薩怛嚩、訶嘌捺耶、寗夜吠奢徐、娜麼薩嚩尾泥娑嚩賀。

北維の大蓮臺に、嚴字の光輪あるを觀ぜよ、轉じて諸佛母と成る。

光暉ありて眞金の色なり、縞素を以て衣と爲し、遍く照すこと猶日光のごとし、

正受にして三昧に住したまへり、號して虛空眼と名づく、虛空明妃なり。

彼の眞言に曰く、(二)印は大日に印じ。

誐誐曩嚩囉、落訖叉嬭、誐誐曩三迷曳、薩嚩覩訥誐多、鼻娑囉三婆吠、入嚩攞娜謨

阿目佉（アボギャナン）、娑嚩訶（ソハカ）。

南維の白蓮臺に、迦（キャ）字の光明あるを觀せよ、金色の光輪の中に、救世の諸菩薩、大德聖尊の印あり、號して滿衆願と名づく。

二羽の初分交へよ、普通密印と名づく、彼の眞言に曰く。

薩嚩（サラバ）多、尾麼底（ビマチ）、尾枳羅（ビキラム）儞（ダ）、達磨（ダルマ）馱睹（ニリジャタ）徐佐多、糝糝（サムサムカ）訶、娑縛（ソハカ）賀。

次に大日の方に、精進觀世音あり、普遍く四方の相にして、中に吉祥商佉あり、鉢頭摩華を出して、開敷して果實を含めり。上に(一)金剛の慧を表せり、承るに大蓮の印を以てせり、娑上字の光輪あるを觀せよ、輪に觀自在を現ず、微笑して白蓮に坐し、頂に無量壽を現ず。普觀三昧に住して、自心の眞言を說きたまふ、印は蓮華の敷けたるが如くせよ、彼の眞言に曰く。

薩嚩（サラバ）怛（タ）他蘖（ギャタ）多（タ）嚩（アバ）路吉（ロキタ）多、羯（キャ）嚕儞（ロムダ）麼野（マヤ）、囉囉囉（ラララ）吽若（ウムジャク）、娑嚩賀（ソハカ）。

次に右の蓮華の中に、糝（サム）字の光輪あるを觀せよ、轉じて大勢至と成る。被服商佉の色なり、大悲蓮華の手、滋榮して而も未だ敷けず。

(一) 金剛慧とは一股杵なり。

圍繞するに圓光を以てす、定慧空心合掌にして、蓮花の未だ開かざるが如くせよ。彼の眞言に曰く、

髯髯（ゼムゼムサタ）索（サタ）、娑嚩賀（ソハカ）。

次に左の蓮華の中に、耽（タム）字の光輪あるを觀せよ、光多羅尊を現ず。青白色相雜はりて、中年の女人の狀なり、合掌して青蓮を持し、圓光周からざることなし、暉り發せること猶淨金のごとし、微笑して鮮白の衣なり。定慧內に拳に爲して、二風輪舒べ合し、二空を以て之に加へよ。

彼の眞言に曰く。

羯嚕（キャロ）抳（ダウド）嚕（パムペイ）婆吠（タレイダリニ）、多隷多哩抳、娑嚩賀（ソハカ）。

次に右の蓮華の中に毅（ビ）嚧（リ）字門を觀せよ皓素にして圓光の中にあり。毗俱胝の身を現ず、手數珠曼を垂れたり、三目にして持髮髻あり。尊形皓素の如し、圓光ありて黃赤白なり、多羅の印を左に差（モドラ）せよ。

彼の眞言に曰く、

薩嚩（サラバ）婆野（バヤ）怛囉（タラサン）散徐（ウンソハダヤ）、吽（ウン）娑頗吒野（ソハダヤ）、娑嚩賀（ソハカ）。

明妃其左に住せり、持名稱者と號す、一切の妙瓔珞を以て、
金色の身を莊嚴せり、鮮かなる妙華の枝を執り、左には鉢胤遇を持せり。
密印は馬頭に準じて、上に風輪を擧げて屈せよ、彼の眞言に曰く、

琰野輸馱囉野、娑嚩賀。

次に多羅の右に近いて、臺中に半字を觀せよ、白淨の光輪を放つ、
圓明白處を現ず、髮冠ありて(一)純白を襲ぬ、鉢曇麼華を持せり。
二羽虛心合にして、水輪掌中に入れて、空輪其上を捻す。
是れ白處尊の印なり、彼の眞言に曰く、

怛他蘖多尾灑野三婆吠、鉢娜麼忙嚩你娑嚩賀。

次に左華臺の中に、唅字の法門を觀せよ、大光明聚を放ちて、
大力明王を現ず、晨朝の日の暉りの色なり、白蓮を以て身を嚴り、
赫然として焰鬘を成し、吼怒して四牙現じ、利爪ありて獸王の髮あり、
印は白處尊の如くして、風を空輪の下に屈して、相去けんこと穬麥の如くせよ。彼の
眞言に曰く、

(一) 純白を襲ぬ　襲は重衣なり又及なり入なり合なり又その備はらざるを掩ふを襲と云ふ又衣を襲と云ふ又受くるなり、左傳に故天祿を襲ふと云ふ又性なり今は曰く掩乎。

(一) 迦羅者　瓶の梵語なり。
(二) 嚩字は經の轉字輪品に出づ、又疏十六には吽を出せり。

㗚佉娜野畔惹、娑巨吒野、娑嚩賀。

次右の華臺の中に、訶字ありて光を放つと觀せよ、轉じて地藏の身と成る。
地藏は馬頭に同じて、水水を申べて餘は拳にせよ、是を地藏の印と名づく。
彼の眞言に曰く、

訶訶訶、素怛努、娑嚩賀。

次に大日の左の方に、正等にして四方の相あらしめよ、金剛の印を以て圍繞せり。
內心に蓮華を敷け、臺に(一)迦羅奢を現ず、光色ありて淨月の如し。
臺中に(二)嚩字を觀せよ、綵寶の光輪を放つ、輪金剛手を現ず。
周環して光焰を起す、首へに衆寶の冠を戴き、瓔珞を以て身を莊嚴せり。
間錯して互に嚴飾し、左に拔折羅を持す、無勝三昧耶なり。
五峯金剛の印なり、水輪掌に入れて交へよ、自心の眞言を說きたふ。

曩莫三曼多嚩日囉南、左荼摩訶路灑拏、吽。

金剛手の右に、部母忙莽鷄ををけ、身を嚴るに瓔珞を以てす。
また堅慧の杵を持せり、三股金剛の印なり、彼の眞言に曰く、

曩莫三曼多嚩曰囉南、怛哩吒哩怛、惹衍底、娑嚩賀。

金剛手の左に、大力金剛針をゝけ、使者衆圍繞して、微笑して同じく瞻仰す、內拳にして風輪を申べよ、彼の眞言に曰く。

薩嚩達磨儞嘝吠馱儞、嚩曰囉素尒嚩囉禰、娑嚩賀。

金剛手の右に、持鎖商佉攞あり、自部の諸の使と俱もなり。

其身淺黃色なり、四輪背けて相叉へ、旋轉して慧を以て定に加へよ。

彼の眞言に曰く、

吽、滿馱滿馱野、冒馱滿馱野、嚩曰嚕娜婆吠、薩嚩怛囉鉢羅底賀低、娑嚩賀。

金剛手の左に、忿怒降三世あり、大障者を摧伏す。

號して(一)月黶尊と名づく、三目ありて四牙を現し、夏時の雲雨の色にして、(二)阿吒吒の笑の聲あり、金剛の瓔珞を以て嚴れり、衆生を攝護するが故に。

無量の衆圍繞せり、乃至百千の手に、衆器案を操持せり。

是の如きの忿怒等、皆蓮華の中に住せり、印は金剛慧の如くして、二空を開きて風を持せよ、彼の眞言に曰く、

紇唎、吽發吒、娑嚩賀。

(一)月黶尊即ち降三世なり、月輪の中に黑色の尊を現ずるは黶に似たるが故に月黶尊と云ふ。

(二)阿吒吒笑の聲あり、阿吒吒は嗔なり、笑怒の貌なり愛染王の如し。

金剛手の右に、吽字を種子と爲して、各の威怒の身を現ずるなり。

印は(一)持地と同じ、彼の眞言に曰く、

吽吽吽、發吒發吒髯髯、娑嚩賀。

金剛手の右に、金剛拳あり外縛にせよ、彼の眞言に曰く、

娑怖吒野嚩曰羅三婆吠、娑嚩賀。

金剛手の右に、一切奉敎金剛あり、彼の眞言に曰く、獨鈷金剛の印なり。

係係緊尒囉拽徒、仡哩俱拏仡哩俱拏、佉那、鉢哩布羅野、薩嚩緊遇囉赦、娑嚩鉢羅底尾撚、娑嚩賀。

大日如來の下、羅刹主の方に、不動如來使をゝけ。

五寶盤石の上にあり、含字の法門を觀せよ、大火光明を放ちて。

三角にして靑身を現ず、慧には刀定には羂索なり、頂髮左の肩に垂れ。

一目にして諦かに觀る、威怒の身にして猛焰あり、面門に水波の相あり。

充滿せる童子の形にして火生三昧に住せり、各の地水輪を屈して。

(一)持地と同じ持地已下の三尊攝軌には大日の西にあり然れば即ち金剛の左なり。

二空を自ら上に加へ、火風竝べ申べて、慧は覆せ定の羽は仰け。
右の劍左の鞘に入れて、心に當てゝ三たび明を念じ、劍を拔きて八方、
上下に旋らして諸物を淨めよ、右にするは辟左にするは結界、難調の者を降伏す。
左拏摩賀路灑拏、娑破吒野、吽怛羅吒憾鉗。
次に風方に往いて、また忿怒尊を想ふべし、所謂勝三世。
先づ想へ寶石の上、火生三昧の中に、訶字の法門に轉じて、
威怒尊と成ると想へ、猛焰の光圍繞せり、寶冠ありて金剛を持す。
自の身命を顧ず、(一)印は剛慧に同じ、專請して敎を受く。
彼の眞言に曰く。
訶訶訶、微薩麽曳、薩嚩怛他蘖多微灑也三婆嚩、怛嚧路枳也微惹也、吽惹、娑嚩賀。
(二)中間に十六の金剛あり未だ足らず。
次に降三世を結ぶ、二羽忿怒拳にして、檀慧背けて鉤結せよ。
まさに寶石の上に於て、心に吽字門を想ひて、大忿怒王を成ずべし、
八臂にして四面あり、怒恐怖の形なり、四牙ありて熾盛の身なり。

(一)印は金剛慧に同じ、內五股の印なり。

(二)中間は十六金剛あり、こは具緣品の意に依る若し祕密品に依らば則ち金剛界院に在るなり。

諸の器伏を執持せり、辟除し結護を作せ、彼の眞言に曰く、
唵、蘇吽婆你蘇吽婆吽、仡哩訶拏仡哩訶拏吽、仡哩訶拏波耶吽、阿那野斛婆誐鑁嚩
曰囉吽泮吒。
次に大威德を結ぶべし、身を玄雲の色に作せ、遍身に火焰を生じて、
諸の器伏を執持せり、六手の身にして六足ありて、水牛の上に坐せり。
想へて身に三字を安せよ、唵字を口の上に安じ、噁字を心に安じ、
吽字を以て尊の身を成就す、劍と戟と棒と索とを執り、左に弓を持し右に箭なり。
普集會を結護せよ、彼の眞言に曰く(一印は玄の如し)
曩莫三曼多沒馱南、阿鉢羅底賀、舍娑曩南、唵羯囉羯囉、矩嚕矩嚕、麽麽迦吡鄰、
伴惹伴惹、薩嚩尾覲南、諸賀諸賀、薩嚩嚩曰囉尾曩野迦冒羅馱吒迦、貳尾旦多迦囉、
摩賀尾訖哩多路比寧、鉢者鉢者、薩嚩訥瑟吒、摩訶誐拏鉢底、貳尾旦多羯囉、滿馱、
薩嚩蘖囉憾、殺目佉、殺部惹、殺者囉拏、嚕捺囉麽曩野、尾瑟拏麽曩野、沒囉賀麽
撚泥嚩那曩野、摩尾覽嚩摩尾覽嚩、攞護攞護、曼拏攞未弟、鉢羅吠捨野、三麽野麽
弩娑摩囉、吽吽吽吽吽吽娑破吒娑破吒娑嚩賀。

(一)印は玄の如し、內縛二火を立合す、これ師傳なり。

次に第二院に於て、四方相均しく普く、衞らすに金剛の印を以てす。
火生の曼荼羅あり、內心に青蓮臺ありて、臺中に滿字を觀せよ。
大慧の光明を放つ、光轉じて曼殊と成る、神力三昧に入りて、
其の身爵金色なり、五佛の髻冠頂にありて、猶童子の形の如し。
定の羽に青蓮を持す、上に金剛(一)智を表せり、慧の羽は施無畏なり、
或は與願の印に作せ、慈顏遍く微笑す、妙相ありて(二)圓普の光、
周匝して互に暉映せり。
定慧の手を以て虛心合掌に爲して、火輪水輪を絞ひ交へ結して相持し、二風輪を以て
二空輪の上に置き、猶劍形の如くせよ、是れ聖者文殊師利の印なり。自心の眞言を說
きて曰く、

係係矩摩囉迦、尾目吃底鉢他悉體多、娑麼囉娑麼囉、鉢羅底枳壤、娑嚩賀。

右の青蓮の中に、髯字の光輪あるを觀せよ、轉じて光網の身と成る。
童子にして寶網を持す、種々の瓔珞を以て嚴れり、定を掌にして鉤を執りて印にせよ。
彼の眞言に曰く、

(一)智は經には印に作れり、金剛印とは三股杵なり。
(二)圓普　攝軌には圓滿に作れり、經は今に同じ。

係係矩摩囉、忙耶蘖多娑嚩婆嚩悉體多、娑嚩賀。

(一)左の青蓮華の中に、無垢光童子ををけ、寶冠ありて寶印を持す。
青蓮にして未だ敷けざるなり、前の印一切の輪、相背けて之を屈せよ。
是れ無垢光の印なり、彼の眞言に曰く、

係矩忙羅、尾質怛羅蘖底矩忙羅、摩弩娑摩羅、娑嚩賀。

右の青蓮の中に、中に枳囉字を觀せよ、轉じて計設尼と成る。
慧を拳にして風火を刀の如くせよ、彼の眞言に曰く。

係係矩忙囉計、娜耶孃難娑摩羅、鉢羅底枳孃、娑嚩賀。

左の青蓮華の中に、你囉字の光あるを觀せよ、轉じて金剛の使と成る。
烏波計設尼なり、慧を拳にして火輪を舒べよ、彼の眞言に曰く。

頻娜野壤難、係矩忙哩計、娑嚩賀。

右の青蓮華の中に、係囉字の光輪あるを觀せよ、轉じて地慧幢と成る。
定を拳にして地水を幢の如くせよ、彼の眞言に曰く、

係娑摩囉枳壤曩計覩、娑嚩賀。

(一)左の青蓮華の中に等の文未會に似たり。秘密品に依るに「寶冠持寶印の句は、是れ一の菩薩なり」、又印品に依るに「相背」を「相背」に作せり、若し然らば前印等の句已下は長行なり。

(一) 童子使は攝軌に依るに實多羅なり。

(二) 定慧外にし又へよ、一本に此句の次に「二風風して鉤の如し彼の眞言に曰く」の句あり。

(三) 大精進とは謂く寶珠の德を歡ずるなり。

左の青蓮の中に、弭嚩字光輪あるを觀せよ、轉じて(一)童子使と成る。
慧を拳にして風輪を杖の如くせよ、彼の眞言に曰く、
弭嚩、娑嚩賀。
右青蓮華の中におくを、また請召使と名づく、慧を拳にして風輪を鉤せよ。
彼の眞言に曰く、
阿迦羅灑野、薩鑁矩嚕阿枳壤、矩忙囉寫、娑嚩賀。
左の青蓮華の中に、五種の奉教使あり、不思議童子は、
(二)定慧外拳にして又へよ。
阿尾娑摩野儼曳、娑嚩賀。
南方に除蓋障ををけ、火輪の中に住せり、其の上に赤蓮華あり。
(三)大精進の種ををけ、嚩字光輪あるを觀せよ、現に除障尊と成る。
悲力三昧に入れり、定慧虛心合にして、地水空を月に入れよ。
各の風火を申べて合して、摩尼珠を持するが如くせよ、彼の眞言に曰く、
阿薩怛嚩係多、弊嗢葉多、怛嚂怛嚂嚂娑嚩賀。

(一) 金剛とは一股杵なり。

(二) 施一切無畏此句は尊の號にして印の名を兼れたり但し右の手に之を作れ。

(三) 發起の手とは即ち五指を擧げ之を申ぶるなり。此印は古來打破る義と爲せり、疏の意を見れば引擧ぐるなり、佛界へ衆生を引擧ぐるなり、地獄を打破ると云ふ口傳は合はざるなり。

右の赤蓮華の中に、訶娑難字を觀せよ、光轉じて此尊と成る。
定慧内に又へて拳にし、火を舒べて上の節を屈せよ、寶瓶の上の(一)金剛なり。
除疑怪の眞言にいはく、
尾麼底砌、諸迦、娑嚩賀。
左の赤蓮華の中に、囉娑難字を觀せよ、光轉じて此尊と成る。
(二)施一切無畏なり、彼の眞言に曰く、
阿佩延娜娜、娑嚩賀。
右の赤蓮華の中に、特憎娑難字を觀せよ、光轉じて此尊と成る。
慧の羽(三)發起の手にせよ、除一切惡趣なり、彼の眞言に曰く、
阿毘庚達囉抳、薩怛嚩馱敦、娑嚩賀。
左の赤蓮華の中に、尾訶娑難字を觀せよ、光轉じて此尊と成る。
慧悲の手を心に掩へ、救護慧の眞言に曰く、
係摩賀摩訶、娑摩囉鉢囉底、枳壤娑嚩賀。
右の赤蓮華の中に、諂字の光輪あるを觀せよ、轉じて大慈生と成る。

(二)空水　經に空風に作れり。

慧の空に水之を持す、彼の眞言に曰く、

　娑嚩制妬嗢蘖多、娑嚩賀。

左の赤蓮華の中に、閻字の光輪あるを觀せよ、轉じて悲旋潤と成る。

慧の掌火心に屈せよ、彼の眞言に曰く、

　迦嚕儞沒曬眤多、娑嚩賀。

右の赤蓮華の中に。縊字の光輪あるを觀せよ、轉じて除熱惱となる。

慧の手垂れて施願せよ、甘露水流注して、遍く諸指の端にあり、

慧の眞言に曰く、

　係嚩囉娜、嚩囉鉢囉鉢多、娑嚩賀。

左の赤蓮華の中に、汗字の光輪あるを觀せよ、轉じて不思議と成る。

慧の空風珠を持するが如くせよ、彼の眞言に曰く。

　薩嚩捨鉢哩布羅迦、娑嚩賀。

北方に地藏尊ををけ、其の座極めて廣嚴なり、雜寶を以て莊嚴せる地、

綺錯して互相に間へたり、四寶の蓮華の中に、訶字の光輪あるを觀せよ。

轉じて地藏尊と成る、定慧内に拳に爲して、火輪舒べ散じて幢の如くせよ、

金剛不壞、三昧に住して眞言を說きたまへり、彼の眞言に曰く、

　訶訶訶尾娑麼曳、娑嚩賀。

地藏尊の右に、諦かに想ひて寶華の中に、難髯字の光輪あるを觀せよ。

轉じて寶處尊と成る、慧の拳三輪を舒べよ、彼の眞言に曰く、

　係摩訶摩訶、娑嚩賀。

左の寶蓮華の中に、衫字の光輪あるを觀せよ、轉じて寶手尊と成る。

慧の拳水輪を舒べよ、彼の眞言に曰く、

　囉怛怒嗢婆嚩、娑嚩賀。

右の寶蓮華の中に噉字の光輪あるを觀せよ、轉じて持地尊と成る。

掌背けて地空叉へよ、二手金剛印なり、彼の眞言に曰く、

　達囉尼達囉。娑嚩賀。

左の寶蓮華の中に、含字の法輪あるを觀せよ、轉じて寶印手と成る。

前の五鈷の印の如くせよ、彼の眞言に曰く、

囉怛曩你唎尒多、娑嚩賀。

右の寶蓮華の中に、赦字の光輪あるを觀せよ、轉じて堅固意と成る。

(一)二羽五輪を合して、羯磨金剛の如くせよ、彼の眞言に曰く、

嚩曰囉三婆嚩、娑嚩賀。

西方に虛空藏をゝけ、圓白悅意の壇にして、大白蓮華の中に、伊字の白光あるを觀せよ、轉じて虛空尊と成る、勤勇にして白衣を被、刀の生ずる光焰を持し、瓔珞を以て莊嚴せり、密印は慈氏に同じて、二空掌中に入れよ、清淨境界、三昧に住して自心を說きたまふ。

彼の眞言に曰く、

伊阿迦奢參麽多弩蘖多、尾質怛嚂嚩囉達囉、娑嚩賀。

右の白蓮華の中に、憾字の光輪あるを觀せよ、轉じて無垢尊と成る。印は大慧刀の如くせよ、彼の眞言に曰く、

誐誐曩難多愚者囉、娑嚩賀。

左の白蓮華の中に、嚩字の光輪あるを觀せよ、轉じて虛空慧と成る。

(一)二羽五輪を合して、傍朱に蓮合空を並べて擧げ開くと云ふは淺略に約す深祕には即五股の印なり因て如羯磨金剛と云ふ。

印は轉法輪の如くせよ、彼の眞言に曰く、

斫吃囉嚩唎底、娑嚩賀。

右の白蓮華の中に、丹字の光輪あるを觀せよ、轉じて淸淨慧と成る。

前の商佉の印の如くせよ、彼の眞言に曰く、

曩莫三滿多沒馱南、達磨三婆嚩、娑嚩賀。

左の白蓮華の中に、地嚂字の光輪あるを觀せよ、光轉じて行慧者となる。

前の蓮華の印の如くせよ、彼の眞言に曰く、

曩莫三滿多沒馱南、鉢納麽攞野、娑嚩賀。

右の白蓮華の中に、斛字の光輪あるを觀せよ、轉じして安住慧と成る。

青蓮の印稍敷け、彼の眞言に曰く、

曩莫三滿多沒馱南、壤弩納婆嚩、娑嚩賀。

左の白蓮華の中に、蓮華印者を觀せよ、彼の眞言に曰く、普通の印を用ひよ。

嚩曰囉悉體囉沒弟、布囉嚩嚩怛麽滿怛囉娑囉、娑嚩賀。

左の白蓮華の中に、執蓮華杵を觀せよ、(一)彼の菩薩眞言に曰く。

(一)彼の菩薩眞言一本に菩薩の二字なし。

(一) 釋迦師子釋迦を第三重の外部の中に擧ぐるは六道衆生の能化の故なり。

嚩曰囉迦羅、娑嚩賀。

次に東の第三院の、(一)釋迦師子の壇は、謂く大因陀羅なり。
妙善眞金色にして、四方の相均等なり、金剛を以て圍繞せよ、
上に波頭摩を現せよ、妙善眞金色にして、轉じて釋迦文と成る。
周匝して皆黃暉あり、紫金光聚の身にして、三十二相を具し、
袈裟錫杖等あり、大鉢を丶け光焰を具せり、寶處の三昧に住せり。
二羽臍の間に仰げよ、自心の眞言を說きて曰く、

薩嚩佗哩捨喝素娜曩、薩嚩達磨嚩始多鉢囉鉢多、誐誐曩三摩三摩、娑嚩賀。

次に右の蓮華の中に、遍知聚を顯示す、熙怡の相にして微笑し。
遍體に圓淨の光あり、頂髻ありて遍黃色なり、憙見無比の身なり。
是を能寂母と名け、亦遍知眼と名く、印は佛頂の如く同じて、
金剛の標幟にして異なり、彼の眞言に曰く、

怛他蘖多斫吃芻、尾也嚩路迦也、娑嚩賀。

次に左の蓮華の中に、毫相明を圖寫せよ、鉢頭摩華に住し。

圓照ありて商佉の色なり、如意珠を執持せり、慧の拳眉間に置け。
是を毫相の印と名く、彼の眞言に曰く、

嚩囉泥、嚩囉鉢囉鉢帝吽、娑嚩賀。

次に右の蓮華の中に、噁字の法門を觀せよ、無相の相光りなり。
轉じて白傘頂と成りて、三千界に普遍す、定の羽五輪を覆せ。
慧の拳風指を申べよ、彼の眞言に曰く。

噁、悉怛多鉢怛囉鄔瑟抳灑、娑嚩賀。

次に左の蓮華の中に、苦字の法門を觀せよ、大寂光を成就す。
轉じて最勝頂と成る、彼の眞言に曰く、印は大慧刀なり。

苦、惹欲鄔瑟抳灑、娑嚩賀。

次に右の蓮華の中に、賜字の法門を觀せよ、本寂光殊勝なり。
定慧の手(一)輪印にせよ、轉じて最勝頂と成る、彼の眞言に曰く、

尾惹欲鄔瑟抳灑、娑嚩賀。

次に左の蓮華の中に、怛陵字の法門を觀せよ、一切の法如本にして、

(一) 輪印轉法輪の印なり。

自性無垢の身なり、光明十方に遍じて、轉じて火聚頂と成る。

印は佛頂と同じ、彼の眞言に曰く、

怛陵、帝儒囉施鄔瑟抳灑、娑嚩賀。

次に右の蓮華の中に、訶林字の法門を觀せよ、諸の因果業性。

畢竟じて不可得なり、威光一切を照して、轉じて除業頂と成る。

慧の手風輪鉤せよ、能く地獄の障を除く、彼の眞言に曰く、

訶林、尾枳囉拏牢祖鄔瑟抳灑、娑嚩賀。

次に左の蓮華の中に、吒嚕斛字門を觀せよ、字廣生頂を現ず。

(一)印は五峯と同じ、能く諸障を摧碎す、彼の眞言に曰く、

吒嚕斛。鄔瑟抳灑、娑嚩賀。

次に右の蓮華の中に、輸嚕吽字門を觀せよ、發生佛頂を現ず。

印は蓮華と同じ、世出世の、未來の諸の聖衆を發生す。

彼の眞言に曰く、

輸嚕斛、鄔瑟抳灑、娑嚩賀。

(一)印は五峰と同じ、外五股の印なり。

次に左の蓮華の中に、斛字の門を觀せよ、轉じて無量聲となる。

(二)二手商佉を持して、寂滅の妙法を說くべし、彼眞言に曰く、

吽、惹欲鄔瑟抳灑、娑嚩賀。

次に右の蓮華の中に、鑁字門を觀せよ、一切佛頂の字なり。

慧の手五峯を聚めて、頂に置いて密印を成す、彼の眞言に曰く、

(二)鑁鑁、吽吽吽。泮吒、娑嚩賀。

次に左の荷葉の中に、一切聲聞衆をゝけ、梵爽を標幟と爲す。

彼の眞言に曰く、

係睹鉢囉底也、尾蘖多、羯磨涅惹多、斛。

次に(三)右に緣覺衆をゝけ、內縛にして火輪を豎てゝ、圓滿にせよ錫杖の相なり。

彼の眞言に曰く、

縛。

釋尊の門の右に於て、華臺に吽字を觀せよ、字轉じて金剛と成る。

青色にして異怒の形なり、(四)阿跋囉尒多と成る、智は蓮を執りて心に在き、

(二)二手商佉を持して二手等の句即ち商佉の印なり。

(二)此眞言は經の印品に出でたり、藏品と少しく異れり。

(三)右に緣覺衆をけ右とあるは一本には左とあれども不可なり諸家の次第今に同じ。

(四)阿跋囉尒多翻じて無能勝と云ふ。

(一) 次に其北方に於て已下は諸世天等の印明を明す。

(二) 自在天は思惟にせよ右の手を舒べ稍々頭を側めて手を就こと少し許り相去るされなり又大自在天は云ふ是は経疏共に印明を闕く、謂く外縛して地風空を立合すれ三戟の印なり。是則ち大自在天の印なり。

定の手外に向けて舒べよ、彼の眞言に曰く、

曩莫三曼多嚩日囉赧、吽、地嚩地嚩、唧嚩唧嚩、娑嚩賀。

次に左の青華の中に、無能勝妃を觀せよ、色相前の如く等し。

内拳にて大空を開け、彼の眞言に曰く。

曩莫三曼多嚩嚩囉喃、阿跋羅尒帝、惹衍底怛捉帝、娑嚩賀。

(一) 次に其北方に於て、淨居衆を布列せよ、(二)自在天は思惟にせよ。

普華は風火差らせ、火鬘は空掌に在け、滿意は空風を華にせよ。

遍音は空を水に加ふ、耳を掩ふて明を習持せよ、五天に眷屬を幷せたり。

自在天彼の眞言に曰く、

曩莫三曼多沒馱喃、唵播囉尒怛麽囉底毗藥、娑嚩賀。

普華天子の眞言に曰く、

麽弩囉、達麽三婆嚩、迦馱迦馱那、三三怛縒泥、娑嚩賀。

光鬘天子の眞言に曰く、

左覩陁姹寫難、娑嚩賀。

滿意天子の眞言に曰く、

阿唵訶寧恥弊、娑嚩賀。

音聲天子の眞言に曰く、

唵阿婆薩嚩嚩弊、娑嚩賀。

次に東南の隅に於て、火仙の像を作れ、熾燄の中に住せり、

三點の灰を以て幟となす、身色皆深赤なり、心に三角の印を置け。

慧には珠定には澡瓶なり、印を掌にし定には杖を持せり、青羊を以て座と爲す、

妃后左右に待せり、嚩思瑟姹仙と、幷に餘の諸仙衆となり。

南門に閻摩天をゝけ、手に(一)檀荼の印を秉り、(二)水牛を以て座と爲す。

(三)判官諸の鬼屬あり、印相今當に說くべし、火天は施無畏にして、

大空を掌中に横へよ嚩思等の五印は、空は水輪の節を持して、

次第に開敷して遍せよ、閻魔は禪智合して、地風屈して月に入れよ。

七母は三昧を拳にして、空を抽でゝ堅てよ鎚の印なり、暗夜は三昧を拳にして、

風火竝びに皆申べよ、荼吉尼は定を拳にして、尒賀嚩を以て之を觸れよ。

(一) 檀荼の印、大火に付くと、壽命を延ぶる時之を付く、壽命は炎寛天之を主るが故に。

(二) 水牛を以て座と爲す、一本に此句の次に三句を挿入せるものあり。

(三) 判官、これ唐の君なり、大山府太山を主る故に爾か云ふ。

閻魔の妃后は鐸なり、慧手五輪を垂れて、猶健吒の相の如くせよ。

(一)火天の眞言に曰く、　阿擬曩曳、娑嚩賀。
嚩思仙の眞言に曰く、　嚩斯瑟多嘌鈔、娑嚩賀。
阿跌哩仙の眞言に曰く、　惡帝囉也摩訶嘌鈔、娑嚩賀。
蘖嘌伽仙の眞言に曰く、　矯怛麽摩訶嘌鈔、蘖嘌伽、娑嚩賀。
閻摩羅天の眞言に曰く、　嚩嚩娑嚩多野、娑嚩賀。
閻摩后の眞言に曰く、　阿起禰曳、娑嚩賀。
七母の眞言に曰く、　怛底哩毗藥、娑嚩賀。
暗夜神の眞言に曰く、　迦羅囉底哩曳、娑嚩賀。
荼吉尼の眞言に曰く、　頡唎訶、娑嚩賀。

次に西南の隅に於て、大囉刹の方と名づくるあり、刀を執りて恐怖の形なり、身印は(二)揭諦に同し、是を囉刹娑と名く、西門には嚩嚕拏あり。天の形にして女人の形なり、龍光ありて龜を座と爲す、門内の前の左右に忿怒無能勝と、阿毗目佉と對せり、廊曲の中の大護なり。

(一)火天の眞言の次に疑ふふらくは火天后なら、何んとなれば下の閻魔后の眞言に出す所即此后の眞言なり、更に青玄二軌を檢せよ。

(二)揭諦　これには刀と云ふ即ち刀印なり。

難徒と拔難徒と、及以び諸の(一)地鬼と、辨才と及び(三)毗紐とあり。西北嚩庾の方に、塞健那と風神と、所餘の諸の眷屬とあり。印相今まさに說くべし、(四)虛合にして水掌に入れ、風豎て空火交へよ。(五)羂索は內に叉へて拳にし、二風頭圓滿にせよ、地神は禪智の羽、八度頭圓かに合して、二空附けて蓋の如くせよ、辨才は即ち妙音なり。慧の風は空を持し、定は仰げて臍に在いて舒べて、運動して樂を奏するが如くせよ、名けて費拏印と爲す、毗紐は即ち那延なり、三昧の空を捻じて、圓なる孔輪勢の如くせよ、彼の后は風を空に加ふ、次北に諸龍衆あり。寒建は童子と翻ず、六首にして孔雀に乘ず、商羯羅の戟の印なり。定空を地に加へよ、后の印は空地を持す、妃の印は三輪開け。門の南に月天衆あり、諸宿宮神繞れり、(六)自在天と及び妃とあり。遮文荼は定の掌、仰けて刼波羅を持するが如くせよ、月天は三昧の手。空風持して白蓮とせよ、宿の印は定慧合して、空を建て火輪交へよ。不可越は定の拳は、翼を擧げて指を擧げ、智の拳は風を舒べて、

(一)地鬼　攝軌には地神と爲せり。
(三)毘紐　紐の字梵字は濫音の字なり、諍論の字なるが故に。
(四)虛合　是れ羅刹王の印なり。
(五)羂索　は即ち嚩嚕拏水天の印なり。
(六)自在天と及び妃　商羯羅及び妃と同體なり。

猶相擬る勢の如くせよ、相向は慧の拳を擧げて、狀相擊つ勢の如くせよ。

(一)二龍は左右の掌、更互に相加せよ、罅度は風天幢なり。

智の拳地水を豎てよ、諸の眷屬圍繞せり、羅刹主の眞言に曰く、

囉吃察娑、地跛多曳、娑嚩賀。

囉刹斯の眞言に曰く、　嚩乞刹娑、誐尼弭、娑嚩賀。

將兄の眞言に曰く、　乞囉迦哩、娑嚩賀。

囉刹衆の眞言に曰く、　嚩乞叉細毘藥、娑嚩賀。

諸龍の眞言に曰く、　銘伽捨徐曳、娑嚩賀。

地神の眞言に曰く、　鉢哩體吠曳、娑嚩賀。

妙音の眞言に曰く、　蘇囉娑嚩帶曳、娑嚩賀。

那羅延の眞言に曰く、　尾瑟拏吠、娑嚩賀。

后の眞言に曰く、　尾瑟拏弭、娑嚩賀。

月天の眞言に曰く、　戰捺囉野、娑嚩賀。

一切宿の眞言に曰く、　諸乞察怛囉徐(二)曩娜徐曳、娑嚩賀。

(一)二龍云云古來の印は恐くは龍頭に作らす手を豎にして結ぶべし。謂く先づ左を仰け右を覆せ、右の五指を左の手の上に當て、口の形に爲せ。

(二)曩經の印品には曩とし、宿囉軌には囊に作せり。

大自在天の眞言に曰く、眞言主の如し。

烏摩妃の眞言に曰く、　烏摩尒弭、娑嚩賀。

遮文荼の眞言に曰く、　左悶拏曳、娑嚩賀。

不可越守護の眞言に曰く、

曩莫三曼多嚩曰囉喃、訥達嚧灑摩訶路灑拏、佉陀野薩嚩怛佗蘖多阿然矩嚕、娑嚩賀。

相向守護門不空金剛の眞言に曰く、

曩莫三曼多嚩曰囉喃、係阿鼻日佉摩訶鉢囉戰拏、佉那野緊旨囉也徒、三麼野麼努娑麼囉、娑嚩賀。

嚩嚕拏水天の眞言に曰く、　歸命、阿播鉢多曳、薩嚩賀。

一龍の眞言に曰く、　歸命、難那野、娑嚩賀。

二龍の眞言に曰く、　歸命、鄔波難那野、娑嚩賀。

風天の眞言に曰く、　歸命、嚩野吠、娑嚩賀。

東北に伊舍那と、眷屬の部多等あり、北門に多聞天あり。

母と及び祖母等と、吉祥功德天と、男女眷屬等とあり。

印相今まさに說くべし、伊舍は三昧を拳にして、火を竪て風を背に屬けよ。
多聞は虛心合掌にして、雙地掌に入れて交へ、空を竪て風を側に挂へて、
一寸ばかり相著けざれ、次左の大藥叉は、定慧內に叉へて拳にして、
水を竪て二風を屈せよ、一切藥叉女は、前の印火輪を申べ。
地空を自相持せよ、門の東の毘舍遮は、內縛にして火を申べよ。
前の印火輪を屈す、即ち毗舍支と名く、伊舍那の眞言に曰く、
歸命、伊舍那野、娑嚩賀。
步多鬼の眞言に曰く、印は玄の如し。
歸命、喝縒喝伊蘖憘舍寧步多地跋底、娑嚩賀。
多聞天の眞言に曰く、歸命、吠室羅摩拏野、娑嚩賀。
大樂叉の眞言に曰く、歸命、藥乞叉濕嚩囉、娑嚩賀。
一切藥叉女の眞言に曰く、歸命、藥訖叉尾徐也達哩、娑嚩賀。
毗舍遮の眞言に曰く、歸命、比舍遮蘖底、娑嚩賀。
毗舍支の眞言に曰く、歸命、比旨比旨、嚩嚩賀。

天王の八兄弟は、門の西東に各の四たりあり、同く一の眞言を習せよ、印は玄の如し。
東門に帝釋天あり、妙高山に安住せり、寶冠ありて瓔珞を被、
手に獨股の印を持す、天衆を自圍繞せり、左に日天衆を置け、
八馬の車輅の中にあり、二妃は左右にあり、逝耶と毗逝耶となり、
亦た勝無勝と云ふ、眷屬には執曜を布け、盎伽は左邊に在り、
輸迦は東に在り、沒馱は南にあり、勿落薩鉢底は、
日天の北に置け、設徐設遮は東南にあり、囉喉は西南にあり。
劒婆は西北に在り、計都は東北にあり、南緯の南に、
涅伽多(一)天狗を置け、北緯の北に、溫伽波多波を置け。
摩利支天は前に往いて、翼從して待衛せり、梵天は帝釋の右に、
印相は今まさに說くべし、七鵝のに車に坐せせり、四面にして髮髻冠あり。
四手ありて慧には華を持し、次の慧には數珠を持す、定の上には君持を執り、
次に下の手は掌を側たす、風を屈し餘は申べ直くす、淨行吉祥の印なり。
名けて(二)唵字の印と爲す、摩利支は寶瓶なり、定の手虛にして拳に爲し、

(一) 天狗是は日本に云ふ天狗にはあらず、星の名なり。

(二) 唵字の印左の手を仰で風を屈する印なり。

智の掌舒べて覆へし、四禪天は左にあり、無熱五淨は右にあり。
釋の印は內縛拳にして、二風を豎てゝ杵の如くせよ、(一)日天は福智の手、
各の水輪の側に置きて、仰けて車輅の形の如くせよ、社耶毘社耶は、
般若と三昧との手、風地背けて內に向へ、水火を自相持し、
定慧の輪は頭合し、空を建てゝ心に置け、九執は二羽合して、
虛空輪並べ豎てよ、釋の右の梵天の印は、三昧の空は水を持し、
猶華を執る相の如くせよ、定の風火の上に加へ、空水の中節を持するは、
梵天妃の密契なり、(二)乾闥と阿修羅とあり、前の印內縛拳にして、
水を申るは樂天の印なり、修羅は智の手を以て、風に空輪の上を較へ。
帝釋の眞言に曰く、　歸命、鑠吒囉也、莎嚩賀。
日天の眞言に曰く、　歸命、阿伊恒夜耶、娑嚩賀。
社耶毘社耶の眞言に曰く、　歸命、摩訶我拏跋多、娑嚩賀。
摩利支の眞言に曰く、　歸命、摩利支、娑嚩賀。
九執の眞言に曰く、　歸命、蘖囉醯濕嚩哩也、鉢囉鉢多孺底羅摩耶、娑嚩賀。

(一) 日天福智の手　手の字恐らくは空ならん、謂く合掌して水を入れ空を以て水の甲を押し二風開き散する印なり。

(二) 乾闥と阿修羅とあり　攝執には此句の上に一天帝脊屬中一の句を加ふ最も可なり。

梵天の眞言に曰く、　歸命、鉢囉惹鉢多曳、娑嚩賀。
梵天妃の眞言に曰く、玄の如し。
乾闥婆の眞言に曰く、　歸命、尾戍馱薩嚩囉嚩係伊、娑嚩賀。
(一)阿修羅の眞言に曰く、　歸命、阿素囉蘖囉囉延、囉鴿囉鴿特菌耽、沒囉鉢囉、娑嚩賀。
餘のあらゆる眷屬諸仙の二十八天八部の眞言皆大曼荼羅圖の中に在り。

(一) 阿修羅眞言　經の藏印二品及び攝青玄の三軌と各々異れり但し今軌最も具れり。

國譯大毘盧遮那經廣大儀軌卷中 終

國譯大毘盧遮那經廣大儀軌卷下

次に大日の前に當りて、般若波羅密あり、明妃の契は六臂なり。
三目皆圓滿せり、定の羽には梵爽を掌にし、慧の羽には護の印を豎つ。
次に定は臍輪に仰げ、慧の羽は垂支願なり、二羽定慧の手には、
各の根本の契を結べり、身には堅甲冑を被、是を諸佛母、
六波羅蜜の印と名づく、彼の眞言に曰く、(三)眞言は玄の如し。
印明の力に由るが故に、相應の身無二なり、まさに知るべし此明妃は、
三世諸佛の母にして、薩般若を圓滿せしめたまふ。
その時に金剛手は、大日世尊の身語意地に昇りて法平等の觀を以て、未來の衆生を念
じて一切の疑を斷せんが爲めの故に大眞言王を說きて曰く、(三)羯磨の印を用ふ。

歸命、阿三怛鉢多達磨駄覩、藥登藥多南、薩嚩他、暗欠暗惡、糝索、唅鶴、嚂嚩、
鑁嚩、娑嚩賀。吽嚂嚩訶囉鶴娑嚩賀。嚂嚩娑嚩賀。

時に執金剛秘密主此の眞言王を說き已る時に、一切如來十方世界に住して各の右の

(一) 般若波羅密阿闍梨所傳の曼荼羅には之れ無し、こは般若佛母尊にして即ち行者六度圓滿の果體なり、六臂とは六度を表す、六度は智を主とする故に般若佛母の像を現ずるなり。

(二) 眞言は玄の如し　此註は後人の加へしならん、何となれば時代大に相違するが故に、何ぞ後大の軌を指さんや。

(三) 羯磨の印　常の大羯磨等に非ずと、或は外五股の印なり。

手を舒べて、執金剛の頂を摩でゝ、善哉の聲を以て稱歎して言く、善い哉善い哉佛子、
汝已に毘盧遮那世尊の身語意地に超昇せり、一切の方所の平等の眞言道に住せる諸菩
薩を照明せんと欲するが爲めの故なり。乃至正遍知者に同じ。
次に(一)八秘密を傳へよ、諸の眞言門に於て、菩薩の行を修行する、
諸の菩薩は知るべし、本尊の身を觀じて、各の堅固にして動せず。
本尊の三昧の如し、本尊の如く觀に住して、悉地を成ずることを得。
諦かに白蓮華を觀せよ、八葉皆廣大にして、法界に普固せしむ。
東方の葉の華座に、嚂字の光輪あるを、轉じて如來の身と成る。
寶幢如來と號す、身色日暉の如し。
定慧の手を以て虛心合掌に作して而も、風輪地輪を散じて光焰を放つが如くせよ、是
れ世尊威德生の印なり。其の曼荼羅は三角にして光明を具せり。彼の眞言に曰く、

歸命、嚂嚩、娑嚩賀。

南方の葉の華座に、鑁字の光輪ある觀せよ、轉じて如來の身と成る。
開敷華王と名づく、金色にして光明を放ち、三昧にして諸垢を離れたり。

(一) 八秘密を傳へよ　秘密八印は別して未傳法の人に祕す、釋其だ嚴密なり、此八印は皆自身を加持す、八は皆大日如來なり。

即ち此の印を以て而も風輪を屈して、二空輪の上に在いて囉字の形の如くせよ、是れ世尊金剛不壞の印なり。其の曼荼羅は囉字の相の如くにして金剛の光あり。彼の眞言に曰く。

歸命、鑁囉、娑囉賀。

北方の葉の華座に、唅字の光輪あるを觀せよ、轉じて鼓音王と成る。

離惱清涼の定なり。

即ち此の印を以て二地輪を屈して掌中に入れよ、是れ如來萬德莊嚴の印なり、其の曼荼羅は半月形の如し、大空點を以て之を圍せり。彼の眞言に曰く、

歸命、唅鶴、娑囉賀。

西方の葉の華座に、糝字の光輪あるを觀せよ、轉じて無量壽と成る。

色閻浮金の如し、

即ち初の印を以て水輪火輪を散ず、蓮花藏の印と名づく、其曼荼羅は月輪の相の如し、波頭摩華を以て之を圍繞せり。彼の眞言に曰く、

歸命、糝索、娑囉賀。

東南の葉の華座に、暗字の光輪あるを觀せよ、轉じて普賢の身と成る。

また定慧の手を以て未敷蓮華の合掌に作し、二空輪を建立して稍〻之を屈せよ。是れ一切支分生の印なり。其の曼荼羅は迦羅捨滿月の形の如し。金剛を以て之を圍せり、彼の眞言に曰く、

歸命、暗嚩、娑囉賀。

西北の葉の華座に、囉字の光輪あるを觀せよ、轉じて聖者の身と成る。

號して觀自在と名づく、色紅頗梨の如し、是れを聖親音と名づく。

即ち此印を以て其火輪を屈せよ、餘の相は前の如し。是れ世尊陀羅尼の印なり。其の曼荼羅は猶彩虹の如くにして遍く之を圍せり。金剛の幡を垂れたり。彼の眞言に曰く、

歸命、沒駄達囉抳、娑沒嘌底麼囉駄曩迦囉、(一)駄囉野駄囉野薩鑁、婆哦囉底、阿迦囉囉底、三麼曳、娑囉賀。

西南の葉の華座に、阿字の光輪あるを觀せよ、轉じて文殊の身と成る。

所謂一切智なり、身鬱金色の如し。

また虛心合掌を以て火輪を開き散じ、其の地輪と空輪とを和合して之を持せよ。是を如來法住の印と爲す。其の曼荼羅は猶虛空の如し、雜色を以て之を圍らして二の空點

(一) 駄囉野駄囉野なし一本經に一駄囉野駄囉野及び軌は之れに同じ疏及び支胥二軌は今に同じ。

あり。彼の眞言に曰く、

歸命、阿吠娜尾泥、娑嚩賀。

東北の葉の華座に、野字の光輪あるを觀せよ、加するに三昧の聲を以てす。

轉じて慈氏尊と成る、大乘と相應するが故に、身色黃金の如し。

二羽虛心合掌にして定慧の手を以て交互に相加へ持して自ら旋轉せよ、是れを世尊迅疾加持の印と名づく、其の曼荼羅はまた虛空の如くして靑點を用て之を嚴れり。彼の眞言に曰く、

歸命、摩訶瑜誐瑜擬顎、瑜詣濕嚩嚇、欠若唎計、娑嚩賀。

中央の法界性は、圓明廣大の輪なり、輪の中に阿字を轉じて、

大法界身と成る、號して遍照尊と名づく、金色にして暉曜を具せり。

首に髮髻冠を持し、綃穀嚴身の服あり、輝焰衆電に過ぎ、

種々の色光を放つ、正受と相應せる身、寂然の三摩地にして、

願に應じて群生を濟ひ、大日正覺尊、八曼荼羅の

種々の字を以て圍繞せり、甚深圓鏡の中の、法界曼荼羅なり。

猶制底を敬ふが如くすべし、如來の三密門は、まさに是の如くの法に依れ、

彼の大日の眞言に曰く、

曩莫薩嚩怛他蘗帝嚩、微濕嚩目契弊、薩嚩多、阿阿暗噫。

(一)行者若し持誦して、乃し初安住に至りぬれば、疑慮の意を生せず。

隨つて彼の(二)一の心を取れ、心を以て心に置き、極淨の句を證して、

無垢なり安ずること不動にして、分別せざること鏡の如し、現前すること甚だ微細なり。

若し彼常に觀察し、修習して相應すれば、乃至本所尊と、

自身との像皆現ず、即ち是れ第一の句なり、瑜伽の阿闍梨、

まさに第二の句に依りて、鏡曼荼羅に本尊の三昧を作すべし。

心を觀せよ自ら圓明にして、微妙なること圓鏡の如し、鏡中に八葉の、

大寶蓮華王あり、自嚴好にして鬚蘂あり、臺中に種子あり。

種子色聲を轉じて、即ち大日如來となる、眞實加持の身。

即是れ正覺の句なり、

(一)行者若し持誦して已下の七偈はこれ三月持誦の法則なり。
(二)一の心とは一の眞言心なり。

(一)念珠を捧ぐべし、これ正念珠なり。

(二)暗字を百暗と云ふは百光遍照の主なるが故なり、百光遍照は即ち如來百法明門なり、餘の中には初地の菩薩百法明門を得たるに同なり。所作の法具の大法の如しには胎の大法の如し。

次にまさに(一)念珠を捧ぐべし、菩提と蓮子と、金剛との光好なる者の、一百八を貫穿すべし、珠を持して心に當て、四時と及び三時と。乃至二時に、まさに心等三摩呬多地に住すべし。

大日の本明を念ずること、一百或は一千、數三洛叉を滿するまで、心意の念珠を爲せ、出入の息を一と爲し、短聲と長聲と、常に一々相應すべし、異んじて此に受持すれば、眞言支分を闕す、自と尊と一相と爲り、無二にして取著なし、意の色像を壞せず、法則に異ること勿れ。

次に巧智生に住して、種々、善巧智を出生する百光を說き、遍く諸佛の刹を照すべし、二羽金剛合にせよ、或は五智の印を作せ。即ち頂上に置いて、微かに加〻之を搖動せよ、彼の百光遍照の、眞言に曰く、　歸命、(二)暗。

此の百字の眞言は、眞言救世者、大威德を成就する、法自在牟尼なり、諸の無智の暗を破し、無智の城を摧壞すること。

月輪の普く現じて、衆生を利益するが如くなるが故に、念誦の分限畢んなば、珠を捧げて頂戴し已はりて、然して後に本處に安せよ、重て大日の印を結びて法界三昧に入るべし、行者三昧を出でゝ、本明を念ずること七遍して、また五供養を結び、悅意の妙五讃をなし、閼伽香水を獻じ、まさに五大願を發すべし、また大三昧を結びて、左に旋らして解界を成せ。まさに衆々の聖尊に白すべし、現前の諸の如來、救世の諸の菩薩、乃至諸の聖天、大乘敎を斷せず、殊勝の地に至る者。唯願はくは聖天衆、決定して我を證知して、廣く諸の有情を利し。久久に世間に住したまへ、佛加持句を說きたまふ、定慧金剛合にして、明に隨ひて遍く身に觸れよ、彼の密言を念じて曰く、

歸命、薩嚩他、勝勝、怛嚴怛嚴、顒顒、達嚴達嚴、娑他波也娑他波也、沒馱薩底也、嚩、娑嚩迦嚩、吽吽、吠娜尼泥、娑嚩賀。

頂上に於て之を解きて、各の其所安に隨ひて、皆解脫を得せしめよ。また三昧耶と、薩埵被甲冑との、三印等を結びて護持し、

法界の字を頂に爲せ、功德悉く成就す、前の如く禮を作すべし。
然して後に道場を出で、閑靜の處に住して修多羅を轉讀せよ。
華嚴と涅槃と、楞伽と思益等となり、願くは諸の有情と共に、
同じく華藏海を證して、佛の無漏智に入らん。

國譯大毘盧遮那經廣大儀軌卷下 終

此法は摩訶毘盧遮那より金剛手に付屬し、金剛手次で傳へて那爛陀寺達磨鞠多阿闍梨に付屬す、達磨鞠多阿闍梨次で中天竺國の王種釋迦善無畏三藏に付屬す、善無畏三藏開元中に此國に來至して玄宗の朝に當りて大國師と爲りて法を傳へ灌頂す、次で海東新羅國の僧玄超阿闍梨に付屬す、玄超阿闍梨次で傳へて京の青龍寺の僧慧果阿闍梨に付屬す、慧果阿闍梨次で傳へて僧法潤阿闍梨に付屬す、大和八年甲寅歲三月七日慧日寺の五部持念の僧惟謹に付屬す。

國譯(一)攝大毗盧遮那成佛神變加持經入蓮華胎藏海會悲生曼荼羅廣大念誦儀軌供養方便會卷第一

京大興善寺中天竺國三藏(二)輸婆迦羅　詔を奉て譯す。
授法の弟子一行筆授比丘寶月譯語

毗盧遮那佛の、淨眼を開敷し玉へること青蓮の如くなるを稽首したてまつる。

我れ(三)大日經王に依て、供養の所資と衆の(四)儀軌とを說かん、次第眞言の法を成せしめんが爲めに、彼の如くせば當に速に成就することを得べし。又本心をして垢を離れしめんが故に、我れ今要に隨て略して宣說せん。此の生に於て(五)悉地に入らんと欲はゞ、其の(六)所應に隨て之を思念せよ、親たり尊の所に於て明法を授けられ、觀察し相應すれば成就を作す、先づ灌頂傳敎の尊を禮して、眞言所修の業を請白せよ。

智者師の許可を蒙り已て、地分所宣の處に依れ、妙山と補峯と牢巖との間、種々の

餘六、續藏三套四

(一)大日經儀軌にして、攝大軌と略稱し、廣大軌、玄法軌、青龍軌と合し四部儀軌と云ふ、

(二)輸婆迦羅　梵語 Subhakarasiṃha 善無長と義譯す、印度の人、初めて密敎を支那に傳ふ。

(三)大日經王　密敎兩部大經の一、善無長譯七卷あり。

(四)儀軌　秘密部の本經に說ける佛菩薩諸天神等を念誦供養する儀式軌則を說ける書。

(五)悉地に入る　梵語 Siddhi 成就と譯す。三密修行の結果眞言の妙果を成就すること、入るとは了達證悟の意。

(六)所應　行者の機根性慾に隨て應現せし曼荼羅會上の諸尊のこと。尊の所、灌頂阿闍梨のこと、明法、眞言のこと。

合龍窟と兩山の中と、或は諸の如來聖弟子の、嘗て往昔に於て遊居し玉ふ所と、寺塔と(一)練若と古仙の室と、當に自心意樂の處に於て、有情を悲愍して、(二)大壇を畫し、如來に次補なつて法眼を開かしむべし、能く人天無量の衆を度せば、即ち是れ如來勝生の子なり、淨慧力を具して能く堪忍し、精進して諸の世間を求めず、是の夜に放逸より生ずる所の罪、般勤に還て淨くし皆な悔除せよ、心目に視觀し諦に明了にして、(三)五輪を地に投げて禮を作すべし、十方の正等覺の、三世一切に三身を具し玉へるを歸命し、一切の大乘の法を歸命し、不退の菩提衆を歸命し、諸明眞實の言を歸命し、一切の諸の密印を歸命して、身口意清淨の業を以て、般勤無量に恭敬して禮したてまつる。

(四)作禮方便の眞言に曰く、下の持地の印を用ゆ。

唵曩謨薩嚩怛他蘖多、迦耶嚩乞質多嚩曰羅鑁娜難迦嚕弭。

此の作禮の眞實の言に由て、即ち能く遍ねく十方の佛を禮したてまつる、右膝を地に著け、爪掌を合せ、思惟して先の罪業を悔ることを說くべし。

我れ(五)無明に積集せらるゝに由て、身口意業に衆罪を造れり、貪慾恚癡心を覆ふが故に、佛と正法と賢聖僧と、父母と(一)二師と善知識と、以及び無量の衆生との所に於て、無始生死流轉の中に、具さに極重無盡の罪を造れるを、親たり十方現在の佛に對して、悉く皆な懺悔して復た作らじ。

出罪方便護の眞言に曰く、(二)普遍。

唵、薩嚩播婆薩普吒娜賀曩嚩曰囉野娑嚩賀。

十方三世の佛の、(三)三種の常身と正法藏と勝願菩提の大心衆とに南無し、我れ今皆な悉く正しく歸依す。

歸依方便の眞言に曰く、普通。

唵、薩嚩沒馱冐地薩怛鑁設囉赧蘖縒弭嚩曰囉達磨紇哩。

我れ此の身を淨めて諸垢を離れたるを、及與び三世の身口意との、大海と刹塵との數に過たるを、一切の諸の如來に奉獻したてまつる。

施身方便の眞言に曰く、(四)身獨股杵の相に同じ。

唵、薩嚩怛他蘖多布惹鉢囉嚩哩多曩夜怛麼南涅哩野哆夜弭薩嚩怛他蘖多室者地底瑟姹耽薩嚩怛他蘖多惹難謎阿昧設都。

(一)練若　梵語阿蘭若(Arañya)の異稱閑寂無諍聲等と譯す、寺院のこと。

(二)大壇　壇は梵語の曼荼羅(Man-ḍala)の義譯して壇と云ふ、壇を作りて諸尊を安置す。

(三)五輪　五體のこと。

(五)無明　梵語Avidyā、諸種の事理を理解し得べき智識なきこと、即ち愚痴なり。

(一)二師　聖師と凡師のこと。

(二)普通　普通の印のこと、但し廣軌には大慧刀の印を出す。

(三)三種常身　一、本性常法身佛の本性常住なること、二不斷常、報身佛の當に生起して間斷なきこと、三、相續常、應化佛の設し已りて復化現して斷絕せざること。

(四)身云云　註の中の身は恐らくは印ならん、廣軌に獨股杵の印を用ゆとあり。

(一) 生苦等の集 生老病死等の煩惱のこと。

(二) 含識 有情のこと。

(三) 布惹 經には本惹となる、廣軌には奔苦と作る今の本は恐らく寫誤ならん。

(四) 廣軌は勸請に亦歸命合掌を用ゆ。

淨菩提心の勝願の寶を、我れ今起發して群生を濟ふ、(一)生苦等の集に纏さる身と、及與び無知に害せらる身とを、救攝し歸依して、解脫せしめ、常に當に諸の(二)含識を利益すべし。

發菩提心方便の眞言に曰く、總印。

唵冐地唧多、母怛播娜夜弭。

十方無量の世界の中の、諸正遍知の大海衆の、種種の善巧方便力と、及び諸の佛子の群生のために、諸有ゆる所修の福業等とを、我れ今一切盡く隨喜す。

隨喜方便の眞言に曰く、歸命合掌。

唵薩嚩怛他蘖多(三)布惹惹曩弩母娜曩布惹迷伽三母捺攞娑頗囉拏三麼曳吽。

我れ今諸の如來と、菩提大心の救世者とを勸請したてまつる。

唯し願くは十方界に於て、恒に大雲を以て法雨を降したまへ。

(四)勸請方便の眞言に曰く、

唵、薩嚩怛他蘖多、睇灑儞布惹迷伽娑母捺囉娑頗拏囉三麼曳、吽。

願くは凡夫所住の處をして、遠に衆苦所集の身を捨てしめ、當に無垢處に至て、清淨法界の身に安住することを得せしむべし。

(一)奉請法身方便の眞言に曰く、

唵、薩嚩怛他蘖多、娜睇灑野弭、薩嚩薩怛嚩係多哩他野達麼馱覩悉體底嘝婆縛覩。

所修の一切の衆の善業を、一切衆生を利益せんが故に、我れ今盡く皆正しく廻向す、生死の苦を除て菩提に至らしめん。

(二)廻向方便の眞言に曰く、

唵、薩嚩怛他蘖多涅哩也怛曩布惹迷伽三母捺囉娑頗囉拏三麼曳、吽。

復た所餘の諸の福事、讀誦(三)經行宴坐等を造すことは、身心をして遍ねく清淨ならしめんがためなり。

自他を哀愍し救護せよ、心性は是の如く諸垢を離れたり、身所應に隨て以て安坐して、分明に(四)初字門を諦觀すべし、輪圍九重にして圓白なり。

次に當に三昧耶の印を結ぶべし定慧虛心合掌の如くす能く福智聚を滿ず。、幡謂ゆる(五)三業道を淨除するなり。

應に知るべし密印の相は、諸の正遍知の說なり、當に定慧の手を合して、二の(六)空輪

(一) 廣軌は奉請に鉤の印を用ゆ。

(二) 廣軌には廻向は普通の印を用ゆ。

(三) 經行 一定の地を旋歩すること。

(四) 初字門 丑字のこと。

(五) 三業道 身業口業、意業のこと。

(六) 空輪 十指異名を參照すべし。

(一) 佛の三昧耶に入る　年來の罪障を清化すること泯して三業を淨化するの意、三昧耶は梵語Samaya、本誓、平等、除障、警覺の四義あり。
(二) 如來地　佛果の位。
(三) 三法界道とは三密平等の境界なり。
(四) 般若と三昧との手、右手と左手との事。
(五) 金剛拳　四種拳の一、大指を提て拳となすもの。
(六) 執金剛杵　手に持する故に名く、又は金剛薩埵のことをいふ。

を竝建て、遍く諸の支分に觸れて、眞實の語を誦持し、(一)佛の三昧耶に入るべし。

三昧耶の眞言に曰く、

曩謨(ナウマク)、薩嚩(サラバ)怛他(タ)蘖(ギヤ)帝毘(ダイビ)藥(ヤク)、尾濕嚩(ビシラバ)目契(ホクケイ)毗藥(ビヤク)、唵(オン)阿(ア)三迷(サンメイ)底哩(チリ)三迷(サンメイ)、三摩曳(サマエイ)娑嚩賀(ソワカ)。

纔に此の密印を結べば、能く(二)如來の地を淨む、地波羅蜜滿じて、(三)三法界道を成ず、所餘の諸の密印は、印品にあり次で當に陳すべし、次に法界生、密慧の標幟を結べ、身口意を淨むるが故に、遍ねく身分に轉せよ、(四)般若と三昧との手、俱に(五)金剛拳に作して、二空其の掌に在き、風幢皆な正しく直くす、是の如きを法界清淨の秘印と名く。

法界生の眞言にいはく、

曩莫(ナウマク)三滿多(サンマンダ)沒駄(ボダ)南(ナム)覽(ラム)達摩(ダルマ)駄(ダ)睹婆(トソバ)嚩婆(ババ)嚩(バク)句(カム)憾(カン)。

法界の自性の如く、自身を觀ぜよ、或は眞實の言を以て、三轉して宣說すべし、當に法體に住して無垢なること虛空の如しと見るべし、眞言印の威力、行人を加持するが故に。

彼をして堅固ならしめんがために、(六)自ら執金剛なりと觀ずべし。金剛智印を結べ、

(一) 掌　掌の字は經には常となる。
(二) 等引　梵語の(Samāhita)譯。心を專注統一すること。
(三) 無垢の字　ह字なり。

止觀の手相ひ背けて、地水火風輪、左右互に相ひ持し、二空各旋轉して、慧の掌の中に合す、是を名て法輪、最勝吉祥の印と爲す、是の人當に久からずして、救世者に同ずべし、眞言印の威力、成就者當に見るべし、(一)掌霑輪の轉ずるが如く、而も大法輪を轉ずと。

金剛薩埵の言はく、

曩莫(ナウマク)三滿多(サンマンダ)縛(バザラ)日囉(ダン)赧、縛(バザラ)曰囉(ダラ)怛麼(タマ)句(カム)憾(カン)。

此の眞言を誦し已て、當に(二)等引に住して、諦かに我が身は、即ち是れ執金剛なりと觀ずべし。無量の天魔衆、諸有ゆる之を見る者、金剛薩埵の如くす、疑惑の心を生ずること勿れ。

次に金剛の甲を擐(き)よ、當に觀ずべし所被の服、體に遍じて焰光を生ずと、是を用て身を嚴るが故に、諸魔の障を爲す者、及び餘の惡心の類、之を覩て咸く四(よも)に散ず、先づ三神吒に作して、止觀の二風輪、火輪の上に糺(まと)ひ持し、二空を自ら相ひ竝べて、而も掌中に在け、彼の眞言を誦し已て、當に(三)無垢の字を觀ずべし。

金剛甲冑の明にいはく、

曩莫三滿多𤙖曰囉赧、唵𤙖曰囉迦𤙖遮吽。

囉字の色は鮮白なり、空點以て之を嚴れり、彼の髻の明珠の如くして、之を頂上に置くべし、設ひ百劫の中に於て、積むる所の衆の罪垢も、是に由て悉く除滅して福慧皆圓滿す。

即ち彼の眞言に曰はく、　曩莫三滿多沒駄南嚂。

眞言は法界に同じ、無量の衆罪除く、久しからずして當に成就して、(一)不退地に住すべし、一切の觸穢の處に、當に此の字門を加すべし、赤色にして威炎を具し、焔鬘遍く圍繞せり。

次に魔を降伏し、諸の大障者を制せんがために、當に大護者無能堪忍の明を念ずべし、印相は下に明すが如し、大護の眞言に曰く、

曩莫薩𤙖但他蘖帝毘藥、薩𤙖婆野尼誐帝毘藥、尼濕𤙖目契毘藥、薩𤙖他憾欠囉乞灑摩賀沫麗、薩𤙖但他、蘖多弁尼也徐左帝吽吽怛囉吒怛囉吒阿鉢囉底賀多、娑𤙖賀。

總に憶念するに由るが故に、諸の(二)尾曩夜迦、惡形の羅刹等、彼れ一切馳散す、現前に囉字を觀せよ、點を具して廣く嚴飾せり、謂ゆる淨炎焔鬘あつて、赫きこと朝日の

(一) 不退地　退轉せざる位地のこと、常に菩薩の初地をいふ。

(二) 尾曩夜迦　梵語Vinayaka障疑神又は象鼻と譯す常に人に隱て障疑を作す惡鬼神故に又常隱覆と稱す。

陣の如し、聲の眞實の義を念せよ、能く一切の障を除き、三毒の垢を解脫す、諸法も亦復然なり、先づ自ら心地を淨め、次に道場の地を淨むべし、悉く衆の過患を除く、其の相虛空の如し、金剛の所持の如く、此の地も亦是の如し。

(一)瑜伽者諦かに、五輪の最深密を觀ずべし、最初に下位に於て、彼の風輪を思惟せよ、賀字の安住する所なり、黑き光焔流布せり。

即ち彼の眞言に曰く、　曩莫三滿多沒駄南唅。

次の上に水輪を安せよ、其の色猶し雪と乳とのごとく、嚩字の安住する所なり、(二)頗胝と月と電とのごとき炎あり、即ち彼の眞言に曰く、

鑁歸命　前に同じ

復た水輪の上に於て、(三)金剛輪を觀作せよ、想て本初の字を置くべし、四方にして逼く黃色なり、即ち彼の眞言に曰く、

阿歸命　前に同じ

是の輪は金剛の如し、(四)大因陀羅と名く、炎焔淨金色にして、普く皆な逼く流出す、彼の中に於て、導師諸佛子を思惟せよ、水中に白蓮を觀ずべし、妙色にして金剛の莖

(一) 瑜伽者　梵語Yogaの相應と譯す三密の修行に由て本尊と行者と感應相應せんと欲する眞言行者を瑜伽者といふ。

(二) 頗胝迦　梵語のSphatikaと水晶と譯す。

(三) 金剛輪　地輪のこと、本初の字　地輪のこと。

(四) 大因陀羅　地輪のこと。

あり、八葉にして鬚蕊を具せり、衆寶を以て自ら莊嚴し、常に無量光を出し、百千の衆の蓮繞くれり、其の上に復た、大覺(一)師子の座を觀想せよ、寶王を以て校飾して、大宮殿の中に在り、寶柱皆な行列し、遍ねく諸の幢蓋あり、珠鬘等交絡して、妙寶衣を垂れ懸けたり、香華雲、及與び衆の寶雲を周布し、普ねく雜華等を雨し、繽紛として以て地を嚴れり、韻に諧へる所愛の聲を以て而も諸の音樂を奏す、宮中に淨妙の、賢瓶と閼伽とを想へ、寶樹王開敷して、照すに摩尼の燈を以す、三昧と總持との地に、自在の婇女あり、佛の波羅蜜等と、菩提妙嚴の華とあり、方便を以て衆伎を作し、妙法音を歌詠す、(二)我が功德力と、(三)如來の加持力と、及び法界力とを以て、普ねく供養して而も住す。

虛空藏明妃の眞言に曰く、法多く誦すべし觀想經の如し

曩莫薩嚩怛他蘗帝毘藥、尾濕嚩目契毘藥、薩嚩他欠嗢那蘗帝娑頗羅嗢給誐誐曩劒娑婆賀。

此に由て一切を持すれば、眞實にして異あることなし、金剛掌にして中を虛にす、是れ即ち加持の印なり、一切の法は(四)不生なり、自性本寂なるが故に、此の眞實を想念して、阿字を其の中に置け、次に當に阿字を轉じて、大日牟尼と成すべし、無盡刹塵の衆、普く圓光の內に現ずること、千界を增數となす、火焰の輪を流出して、遍ねく衆生界に至て、性に隨て開悟せしむ、身語一切に遍ず、佛心も亦復然なり、閻浮淨金の色なるは、世間に應ぜんがための故なり、跏趺して蓮の上に坐し、(一)正受にして諸の毒を離れ、身に綃穀の衣を被て、自然の髮髻冠あり、字門轉じて佛と成り、亦諸の衆生を利すること、猶ほ大日尊の如し、瑜伽者觀察せよ、(二)一身を二身と、同く本體に入り、流出すること亦是の如し、其の樂欲する所に隨て、前法に依て而も轉せよ、(三)召すに三部心を用ゆ、(四)風を鉤して再び加請すべし、心をして喜ばしめんがための故に、外の香華を奉獻せよ。

次に塗香の印を結べ、觀の掌外に向て豎て、上の羽(五)右の觀を握れ、心に想へ塗香雲、清涼にして世界に遍ずと、塗香の眞言に曰く、

曩莫三滿多沒馱南、尾戊馱健度納婆嚩(六)野娑嚩賀。

次に奉華の印を明さん、八度內に相ひ叉へ、腕合せて風頭挂へ、印華を掬する勢の如くすべし、眞言に曰く、

(一) 師子座　佛は人中の師子なれば佛の座を師子座といふ。

(二) 我が功德力　行者現在修行する三密の功德力。

(三) 如來の加持力　佛の大悲方便の力。

(四) 不生　生滅變化なき絕對の謂。

(一) 正受　梵語のJamaya邪亂を離れて、心に正法を受けること。

(二) 一身云云　本經には一身と二身との次に乃至無量身の一の句あり。

(三) 召すに等の二句　一本になし。

(四) 風を鉤して等　とは如來鉤等の四攝なり。

(五) 右の觀　とは右の腕の字か。

(六) 野　の字は衍字か、經及び廣青玄の三軌になし。

曩莫三滿多沒駄南、摩賀妹怛哩也毘庾嗢誐帝、娑嚩賀。

次に燒香の印を明さん、六度内に背け竪て、二風の頭側め合せ、空各の風に附けよ、眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄南、達麼駄睹拏蘖帝、娑嚩賀。

次に飲食の印を明さん、二地側め相ひ着け、水火風の頭合せ、空を風の下に附て食器の形の由如くし。腕合せて前に向て獻せよ。眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄南、阿羅囉迦囉囉、麼隣捺泥、摩訶摩哩、娑嚩賀。

次に燈明の印を明さん、觀の拳火輪を竪て、空火の下の節に挂へよ、運想せよ、無邊の刹の一一の諸佛の前に、光明あつて(一)佛事を爲すと。

眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄南、怛他蘖多嘊旨娑頗囉拏嚩婆娑娜、誐誐猱娜哩也娑嚩賀。

次に應に長跪して普通の掌を以て、如來の諸の福智を讃揚したてまつるべし、此れ已に刹塵の衆を讃歎す、悉地を求めんがために清音を發して、慇懃に唄唱すること三より七に至れ、次に(二)吉慶の伽(三)他の句を誦せよ、或は五或は七下至三までにし、諸尊を

(一) 佛事　諸佛の衆生を教化すること をいふ。

(二) 吉慶の伽陀　阿利沙偈又は吉慶讃のこと、灌頂のとき受者の吉事を祝して唱ふる伽陀なり。

(三) 他は陀の字なるべし。

警覺し、歡喜を發さしめよ。眞言に曰く、

嚩曰囉薩怛嚩僧誐囉賀、嚩曰囉囉怛曩摩弩怛嚂、嚩曰囉達麼誐野奈嚩曰囉羯麼、迦嚕婆嚩。

次に閼伽を獻ずる印は、止觀蓮華合にして、風を開て火の節に附け、空各の風に附けよ、先づ右後に左の膝、印を展て額に至り、三たび聖天に奉り、心内に有ゆる所求、隨て獻じて皆な啓白すべし、當に無垢の地、雖惱清涼の定を得べし。

閼伽の眞言に曰く、

唵嚩曰囉娜迦吒吽。（如な至願な求めば三たび百字の門を誦習すべし。）

次に金剛杵を執て、抽擲して金鈴を振れ、再び轉法輪を加して、諦に執金剛の、法界の性の如くなるを想て、當に菩提心に住すべし。

次に方隅の印を結べ、聖不動尊を用て、左に轉じて辟除を成じ、右に旋らし及び上下し、備に身の支分に觸れ、結護して悉く堅牢なるべし、眞語と(一)母陀羅とは、下に當に分別するが如し、既に嚴備を爲し訖て、當に根本の契を示して、還て五處を加し、七轉し或は再三して、印を散じて頂上に開くべし、半跏にして身意を正くし、或は

(一) 母陀羅　梵語の Mudra 印契のこと。五處を加し、額右肩、左肩、心喉等身體上の五處を手印或は法具を以て加持すること。

(一)相應坐息災增益調伏敬愛等の四種法と相應する坐なり。

(二)相應の坐に作し、方に隨て敎に說くが如くし、面を正くし住して身前に於て、一の圓明の像を觀せよ、淸淨にして瑕玷なきこと、滿月輪の猶如し、中に本尊の形あり、妙色三界を超へ、妙穀の嚴身の服、寶冠ありて紺髮垂れたまへり、寂然として三摩地、輝焰衆の電に過ぎ、猶ほ淨鏡の內に、幽邃に眞容を現ずるが如し、喜怒形色に顯はれ與願等を操持せり、正受と相應せる身、明了にして心亂るゝことなし、無法淨法の體願に應じて群生を濟ふ、乳風四印を作し、隨一に成就を作す、修行すること六月滿せば、輕舉下神通あり、如來鉤に安住し、字を布すること下に明すが如し、火生障聖者、無動尊の眞言。

國譯攝大儀軌卷第一　終

國譯攝大毘盧遮那經大菩提幢諸尊密印標幟

曼荼羅儀軌卷第二

(一)大興善中寺天竺國三藏輸波迦羅　詔を奉けて譯す。

(一)一本に譯號なし。

(二)諸趣地獄餓鬼畜生人天等人の往く所をいふ。

爾の時に婆誐鑁、毘盧遮那佛、諸の大衆を觀察して、執金剛手、密主薩埵に告げて言く、法あり大日如來莊嚴の具に同じ、法界の幟幟に同じ、菩薩摩訶薩。是に由て身を嚴るが故に、生死の中に處し、(二)諸趣に巡歷すれども、塵刹の如來の會、此の大菩提の、(三)計都を以て如來の幟幟を建立すれば、諸天龍夜叉、八部遙に禮敬し、敎を受て奉行す、汝今ま極て諦に聽け、吾れ當に之を演說すべし、密生誠請し已て、爾の時に婆誐鑁、即便ち身無害力三昧に住す、斯の定に住するに由るが故に、一切如來、無能障閡身、無等三力の明を說く、即ち明妃を說て曰く、

曩莫三滿多沒馱南、阿三迷底哩三迷三摩曳、婆嚩賀。

(三)計都幢と譯す。

金剛秘密主、明妃は能く、一切如來地を示現す、三法界を越へず、地波羅蜜滿ず、密

印は定慧の手、蓮合にして二空を建つ、額と肩と心と喉と頂と、五を印して明妃を誦す、此れ一切諸佛、救世の大印なり、正覺の三昧耶、此の印に於て住す、次に法界生の印を以て、當に㘓字に住すべし、印明は前に說くが如し、次に轉法輪の印を以て、諦に執金剛、風輪風の種子を想へ、印明は初會の如し、眞言行の菩薩、此の衆の三昧より、即ち無生の字に入り、大菩提心に住す、身を觀じて薩埵の如くす、色相碧頗梨にして、(一)羯磨輪に住す、普遍して餘鬘を成す、下の眞言王を誦して、方に曼荼羅を作れ、自の肘を雙て量と爲し、此に異するは吉祥に非ず、乞地の偈は經の如し、白檀を點じて記を爲し、香華普ねく奉獻して、先づ辨事の明を持すべし、傳法の阿闍梨、方に次に五色の修多羅を取るべく、一切佛、大毘盧遮那を稽首したてまつりて、親自ら加持を作す可し。

東方を以て首と爲し、(二)修多羅を(三)對治し、齎に至て空に在り、漸次に右に旋轉す、是の如く南及び西、北方に終竟るべし、第二に界を安立す、亦初方より起て、諸の如來を憶念し、所行は上に說くが如し。右の方及び後の方、復た(四)勝方に周るべし、阿闍梨次に廻て、(五)涅哩底に依る、受學對持の者は、漸次に以て南に行り、此より右に旋

(一) 羯磨輪　四佛の中北方不空成就佛の法輪なり、

(二) 修多羅　梵語Sūtra　綾と譯し又契經と義譯す、今は七條袈裟に用ゆる組紐に名く。

(三) 對持　弟子と師と相對して持すこと。

(四) 勝方　北方なり。

(五) 涅哩底　(Nirṛti)西南方のこと

(一) 風方　西北方

(二) 火方　東南方

(三) 伊舍尼　東北方。

(四) 見諦　阿闍梨三昧を發得して秘密の灌頂を受けたる人のこと。

(五) 悲生曼荼羅　胎藏界現圖曼荼羅のこと、此は衆生を濟度すべく、佛の大悲より生じたる曼荼羅なれば斯く名く。

(六) 四智四行　大圓鏡智、平等性智、妙觀察智、成所作智の四智を體したる東方寶幢如來、南方開敷花王如來、西方無量壽如來、北方天鼓雷音佛の四佛とは四佛の四智の所依の定德のことにして東南普賢、西南文殊、西北觀世音、東北彌勒の四隅菩薩なり。

(七) 遍知印　胎藏界曼荼羅の上方第一の院なり、遍知印とは三角智印のこと

遶して、轉じて(一)風の方に依り、師位は本處を移して、(二)火方に居すべし、持眞言行者、復た是の如の法を修せよ、弟子は西南に在り、師は(三)伊舍尼に居す、學者復た旋繞して、轉じて火方に依り、師位は本處を移して、風方に住すべし、是の如く眞言者、普ねく西方の相を作して、漸次に其の中に入り、三位以て之を分つ、已に三分の位を表して、地相普く周遍せば、復た一一の分に於て、差別して以て三と爲す、是の中に最初の分は、作業所行の道なり、其の餘の中と後との分は、聖天の住處なり、應に其の分齊を知るべし、誠心以て慇重に、諸の聖尊を運布せよ、(四)見諦の阿闍梨、正受にして衆相を造らんには、均調にして善く分別すべし、內心に妙白蓮ををけ、胎藏は正しく均等にして、藏中に一切の(五)悲生曼荼羅を造れ、十六央倶梨にせよ、此に過ても是れ其の量なり、八葉正しく圓滿にして、鬚蘂皆な嚴好にすべし、金剛の智印遍く諸の葉の間に出せ、此の華臺の中、大日勝尊現じ、金色にして暉躍を具す、首に髮髻の冠を持し、救世圓滿の光あつて、熱を離て三昧に住したまへり、(六)四智四行等は、八秘の中に宣說す、大日如來の上に、三昧の諸の眷屬あり、彼の東に應に、一切(七)遍知印を畫作すべし、三角にして蓮華の上にあり、其の色皆な鮮白にして、炎焰遍く圍繞

して、皓潔にして普く周遍せり、峰鋭くして其の下に向へり、佛(二)道樹の下に坐して、此を持して四魔を降したまふ、故に遍知印と號す、能く多の功德を具し、衆の三昧を生ずる王なり云々。

次に其の北維に於て、(三)導師諸佛母ををけ、晃曜ありて眞金の色なり、縞素を以て衣と爲す、遍ねく照すること猶ほ日光のごとく、正受にして三昧に住せり。

佛母虛空眼の眞言に曰く、

曩莫三滿多設駄南、誐誐曩嚩囉咯乞叉嬭、誐誐曩娑摩曳、薩嚩覩嗢誐多鼻娑囉三婆吠入嚩羅難摩目佉曩娑嚩賀。

(四)定慧歸合(命か)掌にして、風捻じて空を上に加ふ、其の形(五)憩伽の如し、此れ大慧刀の印、一切佛の所說なり、能く(六)諸言を斷ず、謂ゆる六俱生の身見なり。

眞言に曰く、

曩莫三滿多設駄南、摩賀竭誐尾囉惹達麼讃、捺囉捨迦娑賀惹、薩迦野捺嚩瑟致、吒曳、諾迦、怛他蘖多阿地目訖底、儞翼捺多、尾囉誐達磨儞翼舍多吽。

定慧虛心合にして、風を屈して空を以て之を絞び、形(七)商佉等の如し、此を名て勝願

(一)菩提樹 又は覺樹と稱す、釋尊此樹下にて成道せり。

(二)導師諸佛母 佛眼、母のこと、三世諸佛能生の母なり、故に虛空眼、悲生眼又は如來眼といふ。

(三)定慧等 大慧刀を明す、是れ佛の諸多の惑を斷破することを表す。

(四)憩伽 事理を決定すること。

(五)諸見 見とは審に分別推求すること。

(六)俱生 生の身見俱生とは凡夫生れながら有する惑のこと、身見とは身體は(色)蘊(受想行識)の假和合なることを知らずして實我の存在すと執着すること。

(七)商佉 Śaṅkha 白螺と譯す、大法螺を明す、是れ如來無垢の說法を表す。

の吉祥法螺の印となす、諸佛世の師、菩薩救世者、皆無垢の法を說て、寂靜涅槃に至る。眞言に曰く、

曩莫三滿多設駄南、暗。

定慧合て舒べ散じ、(一)猶ほ前の(二)健吒の如し、地空各の相ひ持して、風火の頭合せしめ、吉祥願の連花は、諸佛救世者の、不壞金剛の座なり、覺悟するを名て佛となす、菩提と佛子と悉く皆な此より生ず。眞言に曰く、

曩莫三滿多設駄喃、阿。

二羽外に拳に爲くり、火風を申て鉤の如し、地空各の豎て合す、形(三)跋折羅の如し、(四)金剛大慧の印は、能く無香の城を壞し、睡眠の者を曉寤す、天人も壞すること能はず、眞言に曰く、

曩莫三滿多嚩曰羅賀、吒。

定慧內に拳に成て、火空各の豎て合して、風を屈して火を持す、形由寶珠に似たり、此の印は、摩訶の印なり、謂ゆる(五)如來頂なり、適に纔かに之を結び作せば、即ち世尊に同じ、眞言に曰く、

(一)前 此の字經になし、蓮花座を明す、是れ佛菩薩の座を表す。

(二)健吒 Ghaṇṭā 鈴鐸と譯す。

(三)跋折羅 Vajra 金剛杵と譯す。

(四)金剛大慧 金剛佛の能く無智の暗迷を破すことを表す。

(五)如來頂 如來の頂を明す、是れ如來の頂骨の形寶珠に似たるを表す。

(一)毫相藏を明す、是れ如来の眉間の白毫相を表す。
(二)瑜伽座　瑜伽（ユーガ）相應と譯す、佛の三密と行者の三密と相應一致すること、今瑜伽を修する行者の座床を瑜伽座と云ふ。
(三)大鉢を明す、是れ如来の所持する鐵鉢を表す。
(四)施無畏印　佛衆生に無畏を施す印なり、安穩蘇息の義なり、大日經には六種の無畏を說く。
(五)與願　與滿願と言ふ一切衆生に滿願を與ふることを表す。
(六)世依　佛の尊稱、佛は一切世間の所依なる故に。
(七)怖畏　怖畏を明す、右押指を胎拳にして風指を竪て、眉間にあて、忿怒の相を現して諸魔障を恐怖降伏することを表す。
(八)毘俱胝　Bhrukuṭi 巖と譯す、忿怒の形なり。

曩莫三滿多沒駄南、吽吽。

慧の手屈して拳に成じ、風の節眉間に置く、此を(一)豪相藏と名く、佛常に其の願を滿じたまふ、纔に此を作すを以て、即ち人中の勝に同じ、眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄、阿哈若。

次に(二)瑜伽座に住して、定慧を齎の間に累ねて、鉢を持する相の猶如くす、是を名て釋迦、牟尼(三)大鉢の印と爲す。

眞言に曰く、　曩莫三滿多沒駄喃、婆。

前の印慧の持を舒べて、上に向て(四)施無畏にす、能く一切、衆生類に無畏を施與す、若し此の大印を結ぶを、施無畏者と名く、眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄喃、薩嚩他爾娜爾娜佩也耶奢娜娑嚩賀。

定慧復た前の如く、慧を垂れ下して施願にす、是の如きは(五)與願の印なり、(六)世依の所說も、適さに纔に此を結べば、諸佛其の願を滿じたまふ。眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄喃嚩羅娜嚩曰囉怛摩迦娑嚩賀。

(七)慧の拳風輪を舒べて、(八)畏俱胝の形を以て、等引の相に住す、是の如き大印を以て、

諸佛救世者、諸の障者を恐怖し、意に隨て悉地を成ず。是の印を結ぶに由るが故に、大惡魔軍の衆、及び餘の諸の障者馳散して疑ふべきなり、風の頭眉間に置け。

眞言に曰く。

曩莫三滿多沒駄喃、摩訶摩羅嚩底捺奢嚩路納婆吠摩訶每怛哩野毘庾訥蘖底娑嚩賀。

慧の拳水火を舒べ、風地空輪を押す。此を一切佛、世依の(一)悲生眼と名く、眼界に置くと想へ、智者佛眼を成ず。

眞言に曰く、灌頂の時是を用ひて眼を開く。

曩莫三滿多沒駄喃、誐誐曩嚩羅落乞叉儼迦嚕儼摩耶、怛他蘖多斫乞芻娑嚩賀。

(二)定慧内に拳に成て、風を舒べ頭圓らかに合す、此れ勝願の索の印なり、諸の造惡の者を壞す、眞言者之を結べば、能く諸の不善を縛す。眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄喃、係係摩訶播奢鉢羅娑勞涅哩野薩埵駄睹尾模迦怛他蘖多地目乞底爾佐多、娑嚩賀。

(三)定慧を合して拳に成て、慧の風屈して鉤の如くす、即ち此を鉤印と名く、諸佛救世者、一切の(四)十地の位に住せる、菩提大心者と、及び惡思の衆生とを召集したまふ、

(一)悲生眼を明す、是れ肉眼を加持して、佛限を開かしむること。
(二)如來索を明す、是れ如來大悲攝受の力を索に喩へ、之を以て一切衆生を縛す。
(三)如來鉤を明す、是れ如來大悲の力を以て一切衆生を鉤召するなり。
(四)十地　無明の惑を斷じて眞如を證得する位に十種の階段あり、之を十地といふ、菩薩此の十地の位に住せば決定して成佛すべき故に之を聖住とも稱す。

召に隨て皆な赴集す、眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄喃、阿薩嚩怛囉、鉢囉底訶帝怛他蘖黨組奢、冐地折哩耶、跛哩布羅迦、娑嚩賀。

(一)前の印火を申て屈し、火風竝て鉤の如くす、是を如來心と名く。眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄喃、枳壤怒納婆嚩娑嚩賀。

前の拳火風を收めて、水を申るは(二)如來臍なり、即ち前の風火水、舒べ散ずるは如來(三)腰なり、二印各の明を持すべし。

彼の二の眞言に曰く、腰は或は内縛拳にして二水竝べ申べ合す

如來臍の眞言にいはく、

曩莫三滿多沒駄喃、阿沒哩都納婆嚩娑嚩賀。

如來腰の眞言にいはく、

曩莫三滿多沒駄喃、怛他蘖多三婆嚩涉嚩賀。

定慧虛心合にして、風水屈して内に入れ、火を合し空亦然なり、地合して少し屈せしむ、此を(四)如來藏と名く、眞言に曰く、

(一)如來心を明す是れ佛心の大智慧を表す。

(二)如來臍を明す如來の臍を表す。

(三)如來腰を明す是れ如來の腰を表す。

(四)如來藏を明す是れ如來の馬陰藏を表す。

曩莫薩嚩怛他蘖帝毘也嚂嚂嚩婆嚩賀。

前の印水を散じ舒ぶ、即ち(一)大結界と名く、次に(二)無堪忍の印、大力大護者は、即ち前の印相を以て、火を鈎し頭屈し合せ、風を舒て餘は前に同じ。

二印の眞言に曰く、

曩莫三滿多沒駄喃、麗嚕補哩尾矩哩尾矩麗娑嚩賀。

曩莫薩嚩怛他蘖帝弊薩嚩佩也尾蘖帝弊尾濕嚩目契弊薩嚩他啥欠囉、乞叉摩訶摩麗、薩嚩怛他蘖多奔捉也涅佐帝吽吽怛囉吒怛囉吒阿鉢囉底訶帝娑嚩賀。

次に(三)普光の印を明さん、前に準じて空を月に入れ、風を開て光を放が如くす、又(四)空心合を以て、二風火の側を持するを、(五)如來甲の印と名く。

次に(六)爾賀嚩を明さん、前の如來甲に準じて、空二水の甲を押し、爾賀嚩を印に觸れよ、觸るゝと並に眞言を誦(誦と通するか)せよ、(七)語門は虛心合にして、風水屈して相ひ捻じ、二空並に少く屈し、地火峯を成せしむ、或は云く地水屈して、風火峯の如くならしめて、二空開て彼に附く、五の印四の眞言あり、彼彼の眞言に曰く、

普光

(一)大結界を明す

(二)無堪忍を明す是れ如來の正法を破るものに對して、如來堪忍すること能はず、降伏の三昧に入りて其を降伏すること。

(三)普光如來圓光のこと、如來の頭後の赫々たる圓光を表す。

(四)空心合虛心合か。

(五)如來甲を明す是れ如來大悲の甲胄を表す。

(六)爾賀嚩(二)舌と譯す、如來舌なり、是れ如來の舌相を佛格化せるもの。

(七)語門如來語を明す、是れ如來の語言を佛格化せるもの。

曩莫三滿多沒馱喃、入𨘋攞、摩里儞怛他蘖多嚂旨娑嚩賀。

如來甲

曩莫三滿多沒馱喃、鉢囉戰拏嚩曰羅入嚩攞野尾薩怖羅吽。

如來舌

曩莫三滿多沒馱喃、怛他蘖多爾訶嚩、薩底也達摩鉢囉底瑟恥多娑嚩賀。

如來語

曩莫三滿多沒馱喃、怛他蘖多摩訶嚩吃怛囉尾濕嚩、枳惹曩摩護那也娑嚩賀。

次に(一)牙は語門に同じ、風第三の節を屈して、掌に入れて相ひ合せしむ、(二)辯說は牙に同じて、風輪移して上に向へて、火の三節の上に置く。

曩莫三滿多沒馱喃、怛他蘖多能瑟吒囉、娑囉娑㘑囉、參鉢羅博迦薩嚩怛他蘖多尾灑也參婆嚩娑嚩賀。

如來辯說

曩莫三滿多沒馱喃、阿振底也娜部多路跛嚩、三摩哆鉢囉跛多尾輸、馱娑嚩囉娑嚩賀。

次に佛の(三)十力を明さん、定慧虛心合にして、地空屈して掌に入れ、月內にして節相

(一)如來牙　菩薩を明す。
(二)如來辯說を明す、是れ如來說法の辯說を表す。
(三)如來十力を明す、是れ如來の具ふる十力の功德を表す。

ひ合す、念處は十力に同じて、空風の上節を隻べ屈して、相ひ合せしむ。

(一)次に開悟の印を陳べん、前の印空水に加へて、餘度並に申べ合す、(二)普賢は如意珠なり、虛合して風火に加ふ、(三)慈氏の印は前に同じて、風を火輪の下に屈す、五の印の眞言に曰く、

如來持十力

曩莫三滿多沒馱喃、捺奢麼浪伽達囉、吽、參、髻、娑嚩賀。

如來念處

曩莫三滿多沒馱喃、怛他蘖多娑沒哩底薩怛嚩哩哆弭、訥蘖多、誐誐曩三摩三摩娑嚩賀。

平等開悟

曩莫三滿多沒馱喃、薩嚩達磨三摩哆鉢囉鉢多、怛他蘖哆、弩蘖多、娑嚩賀。

普賢如意珠

曩莫三滿多沒馱喃、三滿多弩蘖多、尾囉惹達摩徐惹多、摩訶摩何娑嚩賀。

慈氏菩薩

(一)如來念處を明す、是れ如來大慈悲の念を表す。
(二)普賢菩薩如意寶珠を明す、是れ普賢菩薩が一切の願を滿足せしむることを如意寶珠の如くなることを表す。
(三)一切法平等開悟を明す、如來能く一切法を平等に開悟し給ふことを表す。